

川 西 市

下 加 茂 遺 跡

—都市計画道路川西・伊丹線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

1994. 3

兵庫県教育委員会

した  
下 加 茂 遺 跡

—都市計画道路川西・伊丹線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

1994. 3

兵庫県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県川西市加茂<sup>かも</sup>1丁目・5丁目・6丁目、下加茂<sup>したかも</sup>2丁目に所在する下加茂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、都市計画道路川西・伊丹線道路改良工事に伴うもので、兵庫県西宮土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が昭和58年から平成3年にかけて8次にわたって発掘調査を実施した。
3. 整理作業は、昭和63年度に兵庫県教育委員会が、平成4年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が行った。
4. 本文および図版に示した方位は、国土座標を基準とする。
5. 第2図に使用した地図は、川西市発行1万分の1地形図である。また図版1の航空写真は、国土地理院発行大阪西北部KK-85-1、C2-6を用いた。
6. 本文の執筆は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所大平 茂・深井明比古・中川 渉・高瀬・嘉・長濱誠司、および川西市教育委員会岡野慶隆が行い、目次に分担を示した。なお、編集は中川が行った。
7. 写真図版に用いた写真のうち、遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、遺物写真撮影は委託写真撮影によって行った。
8. 本書にかかる下加茂遺跡の写真・図面・遺物などは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）および魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下630-1）にて保管する。
9. 発掘調査にあたり、川西市教育委員会田中達夫、岡野慶隆、祭本敦士の各氏には格別の御協力を頂いた。また立命館大学高橋 学氏には有益な御助言を頂いた。記して謝辞としたい。

## 本文目次

### 第1章 調査の経緯

第1節	調査の体制と経過	（深井・中川）	1
第2節	整理作業の体制と経過	（中川）	2

### 第2章 遺跡の環境

第1節	地理的環境	（中川）	4
第2節	歴史的環境	（岡野）	4

### 第3章 遺跡の調査

第1節	第1次調査	（深井）	11
第2節	第2次調査	（深井）	17
第3節	第3次調査	（高瀬）	23
第4節	第4次調査	（中川）	33
第5節	第5次調査	（大平）	43
第6節	第6次調査	（長濱）	49
第7節	第7次調査	（長濱）	52
第8節	第8次調査	（長濱）	53

### 第4章 まとめ

第1節	各次調査の成果	（中川・長濱）	65
第2節	下加茂遺跡の時期別変遷	（中川）	68
第3節	結び	（中川）	71

## 挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡地図	5	第33図 A-1地区第1面全体図	34
第2図 年次別調査位置図と遺構概要図	9-10	第34図 溝1断面図	34
<b>第1次調査</b>			
第3図 第1次調査位置図	11	第35図 土壙2	35
第4図 2トレンチ平面図・断面図	12	第36図 A-1地区第1面出土遺物	35
第5図 9トレンチ平面図・断面図	12	第37図 A地区第2面全体図	36
第6図 16トレンチ平面図・断面図	13	第38図 竪穴住居跡1	37
第7図 出土遺物(1)	14	第39図 竪穴住居跡2	38
第8図 出土遺物(2)	15	第40図 竪穴住居跡1出土石器	38
<b>第2次調査</b>			
第9図 第2次調査位置図	17	第41図 A-1地区第2面出土遺物	39
第10図 A地区全体図	17	第42図 土壙3	40
第11図 A地区出土遺物	18	第43図 土壙31出土遺物	40
第12図 B地区全体図	19	第44図 B地区全体図	41
第13図 B地区遺構配置図	20	第45図 土壙4	41
第14図 潟池1	21	第46図 B地区出土遺物	42
第15図 B地区出土遺物	22	<b>第5次調査</b>	
<b>第3次調査</b>			
第16図 第3次調査位置図	23	第47図 第5次調査位置図	43
第17図 A地区全体図	24	第48図 調査区全体図	43
第18図 掘立柱建物跡1	25	第49図 土壙2	44
第19図 出土鉄器	25	第50図 井戸1	44
第20図 掘立柱建物跡2	26	第51図 掘立柱建物跡1・2	45
第21図 出土遺物	26	第52図 柱穴内の遺物	45
第22図 掘立柱建物跡3	26	第53図 竪穴住居跡1~3	47
第23図 掘立柱建物跡4	27	第54図 古墳時代の遺物	48
第24図 出土遺物	27	<b>第6次調査</b>	
第25図 土壙1	27	第55図 第6次調査位置図	49
第26図 出土鉄器	27	第56図 調査区全体図	50
第27図 方形周溝墓	29	第57図 A・B地区出土遺物	51
第28図 出土遺物	30	<b>第7次調査</b>	
第29図 出土石器	31	第58図 第7次調査位置図	52
第30図 土壙2	32	<b>第8次調査</b>	
第31図 出土遺物	32	第59図 第8次調査位置図	53
<b>第4次調査</b>			
第32図 第4次調査位置図	33	第60図 調査区全体図	54
		第61図 掘立柱建物跡1	55
		第62図 溝4出土鉄器	55
		第63図 柱穴・溝出土遺物	56
		第64図 井戸1・2	57

第65図	井戸1出土遺物	58	第71図	自然流路断面図	63
第66図	土壤2・3・8・10	59	第72図	自然流路出土遺物	63
第67図	土壤12出土鉄器	60	第73図	溝10・包含層出土遺物	64
第68図	土壤1・3・8・10出土遺物	60	第74図	地形区分と集落の変遷	69
第69図	土壤6・7、溝4~6	61	第75図	加茂台地より下加茂遺跡周辺を望む	71
第70図	土壤6・7出土遺物	62	第76図	調査地点の現況	72

## 表 目 次

表1 下加茂遺跡調査一覧表

表2 周辺遺跡一覧表

6

## 図 版 目 次

図版1 航空写真

第1次調査

図版2 確認調査

図版3 2・9トレンチ

図版4 16・17トレンチ

図版5 遺物

第2次調査

図版6 A地区 遺構

図版7 B地区 遺構(1)

図版8 B地区 遺構(2)

図版9 B地区 遺構(3)

図版10 遺物

第3次調査

図版11 A地区 遺構

図版12 A・B地区 遺構

図版13 遺物(1)

図版14 遺物(2)

第4次調査

図版15 A地区 遺構(1)

図版16 A地区 遺構(2)

図版17 A地区 遺構(3)

図版18 A地区 遺構(4)

図版19 A地区 遺構(5), B地区 遺構

図版20 C・D地区 遺構

図版21 遺物(1)

図版22 遺物(2)

図版23 遺物(3)

第5次調査

図版24 確認調査, 全景写真

図版25 遺構(1)

図版26 遺構(2)

図版27 遺物

第6次調査

図版28 全景写真

図版29 A地区 遺構

図版30 遺物

第8次調査

図版31 全景写真

図版32 遺構(1)

図版33 遺構(2)

図版34 遺構(3)

図版35 遺物(1)

図版36 遺物(2)

図版37 遺物(3)

図版38 遺物(4)

図版39 遺物(5)

図版40 遺物(6)



# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査の体制と経過

下加茂遺跡は伊丹段丘上に位置する加茂遺跡の東方の沖積地であり、昭和50年代の分布調査や付近の民間開発工事の立会い調査により、遺跡範囲が明確になってきていた。

兵庫県では阪神地域のほぼ中央を占める当地の南北交通のよりいっそうの確保を目指すため、兵庫県西宮土木事務所による都市計画道路川西・伊丹線道路改良工事（拡幅工事）が計画された。工事に先立ち、西宮土木事務所より県教育委員会に対し、埋蔵文化財の照会があったため、分布調査を行った結果、用地買収状況を勘案し、北は加茂橋付近から南は中国縦貫道付近までの約700mを確認調査の対象とした。

確認調査は昭和58年度（第1次調査）に実施した他、その後の用地買収の進捗状況に応じて、昭和60年度（第3次調査）・昭和62年度（第5次調査）・平成3年度（第7次調査）に追加の確認調査を行った。

全面調査は、確認調査の成果に基づき、昭和59年度（第2次調査）から平成3年度（第8次調査）まで実施した。

各次調査ごとの調査体制などは、煩雑を避けるため、表1 下加茂遺跡の調査一覧表にまとめて掲げる。

なお調査にあたっては、以下の方々のご協力を得たことを記しておく。

調査補助員	金田 畏、久保直樹、立山栄一、岸本一穂、吉井雅司、仲井重之 奥見俊章、川上和也、高井雅之、佐々木規文、清水悟司、渡辺 琢 岸田浩治、渡嘉敷行子、片桐和子、足立倫子、広辻明子、上田真智子 山内睦子、金田英美、山本晶子、岡本浩志、柏 芳幸、森山宣幸 井上高文、伴 悅子、梅澤純子、浅野裕充、桔梗知明、長尾家典 中川 秀
整理作業員	大西政晴、岸田浩治
事務員	浦浜みどり、辻本京子、西田洋子

（順不同）

## 第2節 整理作業の体制と経過

発掘調査で出土した遺物および作成した図面の整理作業は、昭和63年度と平成5年度の2年度にわたって行った。昭和63年度には土器の水洗・ネーミング、接合・復元までを、平成5年度には土器の接合・復元の残り、土器・石器・鉄器の実測・写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、鉄器の保存処理、報告書の刊行までを行った。

整理作業の体制は、以下に示すとおりである。

### 昭和63年度

主 体 者 兵庫県教育委員会

社会教育・文化財課

(事務担当) 課 長 中根 孝司

参 事 日野 和広

副 課 長 高坂 隆

課長補佐 松下 勝

主 壱 小川 良太

(整理担当) 主 任 岡田 章一

補 助 員 石野 照代

魚住 朋子

### 平成5年度

主 体 者 兵庫県教育委員会

埋蔵文化財調査事務所

(事務担当) 所 長 池水 義輝

副 所 長 渡邊 清

総務課長 田中 豊英

整理普及班長 小川 良太

主 任 山下 史朗

(整理担当) 技術職員 中川 渉

嘱託員 松本 謙

二階堂 康

早川亜紀子

尾崎比佐子

蓬萊 洋子

日々雇用職員 奥野 春枝

(金属器担当) 主 壱 加古千恵子

表1 下加茂遺跡の調査一覧表

調査 番号	種別	調査所	面積	調査主体	調査委員会	担当者	調査担当者	委託業者	測量調査番号
第1次	縦掘	下加茂 2丁目 福光3-5丁目	130m <sup>2</sup>	昭和59年3月5日 ～3月30日	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 福光小学校長 技術職員 大平 庄	課長 西沢良之、文化財担当事務 副課長 畠山義一 技術職員 大平 庄	川西町長 淀田義典 川西町教委 間野義博		830039
第2次	全面	下加茂2丁目 加茂1丁目	2700m <sup>2</sup>	昭和60年2月12日 ～3月29日	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 福光小学校長 技术職員 大平 庄	課長 西沢良之、文化財担当事務 副課長 畠山義一 技术職員 大平 庄	主 任 吉田 明 技術職員 清井明比古 技术職員 大平 庄		840002
第3次	縦掘	下加茂2丁目 加茂1丁目	44m <sup>2</sup> 970m <sup>2</sup>	昭和61年2月5日 ～3月28日	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 福光小学校長 技术職員 大平 庄	課長 北村幸久、文化財担当事務 副課長 畠山義一、浜原敏博 技术職員 大平 庄	主 任 小田口太 高橋一基 技术職員 大平 庄	東播ナード 不動	850046
第4次	全面	下加茂2丁目 加茂1-4丁目	1120m <sup>2</sup>	昭和61年8月1日 ～9月30日	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 福光小学校長 技术職員 大平 庄	課長 北村幸久、文化財担当事務 副課長 畠山義一 技术職員 大平 庄	主 任 大平 庄 技術職員 中川 浩	西播ナード 不動	860046
第5次	縦掘	加茂1丁目 全面	45m <sup>2</sup> 321m <sup>2</sup>	昭和61年12月16日 ～12月16日 昭和62年1月16日 ～2月16日	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 福光小学校長 技术職員 大平 庄	課長 北村幸久、文化財担当事務 副課長 畠山義一 技术職員 大平 庄	主 任 技術職員 浜守正五 技术職員 大平 庄	西播ナード 不動	870048
第6次	全面	下加茂1丁目	659m <sup>2</sup>	平成2年6月1日 ～9月26日	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 福光小学校長 技术職員 大平 庄	所長 兵田豊重、福所長 梶上忠治 副所長 小畠英俊 講師2名 技術職員 村上賀治	主 任 植生介 鶴崎地員 長瀬義司 西播ナード 不動	西播ナード 不動	900005
第7次	縦堀	加茂5丁目	16m <sup>2</sup>	平成3年5月15日	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 福光小学校長 技术職員 大平 庄	所長 内田義勝、福所長 鈴井 功 副所長 中島英一 講師2名 技術職員 村上賀治	主 任 木口富夫 甲田博子 鶴崎地員 長瀬義司 西播ナード 不動	西播ナード 不動	910044
第8次	全面	加茂5丁目	709m <sup>2</sup>	平成3年10月14日 ～11月12日	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 福光小学校長 中田義典 講師2名 技术職員 大平 庄	所長 内田義勝、福所長 鈴井 功 副所長 中田義典 講師2名 技术職員 大平 庄	主 任 古邊透仁 技术職員 長瀬義司 西播ナード 不動	西播ナード 不動	910045

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

川西市域は、北部を北摂丘陵が占め、その中を猪名川が北から南へ貫流して、険しい渓谷を刻んでいる。丘陵は小戸・小花の辺りで途切れ、池田から宝塚方面にかけて、有馬一高橿構造線に伴う直線的な低地帯となっている。

川西市南部は、西側に低位段丘が発達している。この伊丹段丘は、標高約30mの低平な台地となっており、東側の沖積地を見下ろしている。沖積地は猪名川と段丘に挟まれた700~800mほどの狭い範囲に展開しており、北西から南東方向に最明寺川が流れている。標高は15~25mで、現在はほぼ平坦な地形となっている。しかし、下加茂遺跡などでも下層に大礫を含んだ扇状地性の堆積物が検出されていることから、かつては比較的起伏に富んだ地形を呈しており、そのうちの微高地を選んで集落が営まれたとみられる。

### 第2節 歴史的環境

下加茂遺跡の位置する川西市南部は、猪名川が丘陵部から平野に流れ出た地点の右岸にあたる。そこには沖積地が形成され、猪名川の支流最明寺川やこれに合流する小河川が流れ。小河川沿いには多くの遺跡が分布し、一つの遺跡群を形成しているが、その代表的なものは、加茂遺跡、栄根遺跡、小戸遺跡等で、下加茂遺跡もこれに含まれる。このうち加茂遺跡は早くから知られていたが、近年の調査で他の3遺跡の実態も明らかになりつつある。また、各遺跡は弥生時代から中世にかけて併存するとともに、相互の関連性も問題となってきた。以下、これまでの調査成果をもとに、下加茂遺跡をとりまく歴史的環境を概観してみたい。

#### 旧石器時代

加茂遺跡でナイフ形石器、花屋敷で有舌尖頭器がそれぞれ採集されている。いずれも洪積台上であるが、発掘調査による資料でないため、遺跡の状態は明らかでない。

#### 縄文時代

下加茂遺跡で晩期、加茂遺跡で後期・晩期、栄根遺跡で晩期の土器がそれぞれ出土している。また、小戸で後期の石棒が出土しており、後・晩期の遺跡の分布が目立っている。各遺跡とともに集落の状態は明らかではないが、加茂遺跡では遺跡西部の径約50mの範囲で縄文後期の土器や遺構が集中して検出されており、小規模集落のあったことが明らかになりつつある。

#### 弥生時代

前期の遺跡は、沖積地の下加茂遺跡と栄根遺跡で新段階の土器が出土している。いずれも集



第1図 周辺遺跡地図

表2 周辺遺跡一覧表

Nu	遺跡名	時代	概要及び文献
1	下加茂遺跡	縄文時代後期～近世	本報告書
2	久代遺跡	弥生時代後期～	弥生土器・須恵器散布 亥野・瀬「考古資料」『川西市史』第4巻 1976年
3	大野遺跡	弥生時代～	弥生土器・須恵器散布
4	六つ塚遺跡	旧石器時代、弥生時代	旧石器・弥生土器散布
5	加茂西遺跡	弥生時代	弥生土器・石器散布
6	加茂東遺跡	旧石器時代、縄文時代後期～平安時代	永永雄「川西加茂」(関西大学文学部考古学研究第3回) 1968年 川西市教育委員会「川西市加茂遺跡第1号線建設にともなう発掘調査報告書」1983年 川西市教育委員会「川西市加茂遺跡第81～83、85～91次発掘調査報告書」1988年
7	柴根御絆出土地	弥生時代後期	柴原末治「網原の研究」1927年
8	柴根遺跡	縄文時代後期～中世	長谷川教育委員会・川西市教育委員会「柴根遺跡」1982年 川西市教育委員会「川西市柴根遺跡第8～11次発掘調査報告書」1983年 川西市教育委員会「川西市柴根遺跡第19次発掘調査報告書」1989年
9	柴根寺跡	奈良時代～中世	阿部慶造「柴根寺廃寺第1次調査」『兵庫県歴史文化財調査年報』昭和59年度 1987年
10	寺畠遺跡	弥生時代後期	弥生土器・石器散布
11	小花石棒出土地	縄文時代後期	亥野・瀬「考古資料」『川西市史』第4巻 1976年
12	小戸遺跡	弥生時代～中世	川西市教育委員会「小戸遺跡第6次調査報告書(現地説明会資料)」1988年
13	火打遺跡		須恵器散布
14	豆坂古墳群	古墳時代後期	岡野慶造「川西市花屋敷出土の須恵器」『兵庫考古』第14号 1981年
15	海福寺古墳	古墳時代後期	梅原末治「浜津火打村神坂古墳」『日本古文化研究所報告』1 1956年 亥野・瀬「考古資料」『川西市史』第4巻 1976年
16	森原古墳群	古墳時代後期	亥野・瀬「考古資料」『川西市史』第4巻 1976年
17	万難山古墳	古墳時代前期	宝塚市教育委員会「浜津万難山古墳」1979年
18	若狭丘古墳群	古墳時代後期	宝塚市教育委員会『若狭山の古墳群調査集録』1980年 関西学院大学考古学研究会『若狭山の古墳群Ⅰ』『関西学院考古』No.5 1979年
19	雲雀山古墳群	古墳時代後期	石野博信「宝塚市若狭山古墳群」宝塚市教育委員会 1971年 岡田・猪「宝塚市雲雀山古墳群一東尾根八支群・西尾根Ⅱ支群の調査」宝塚市教育委員会 1975年 関西学院大学考古学研究会「若狭山の古墳群Ⅱ」『関西学院考古』No.6 1980年 関西学院大学考古学研究会「若狭山の古墳群Ⅲ」『関西学院考古』No.8 1987年
20	鴨原寺	平安時代～	川西市教育委員会「川西市鴨原寺」1985年

落の状態は明らかではないが、遺物出土量より小規模集落であったと考えられる。

中期になると、下加茂・柴根遺跡が継続するほか、加茂・小戸遺跡が新たに現れる。特に、台地上の加茂遺跡は規模が大きく、この小地域の中心集落であったと考えられる。加茂遺跡の弥生集落の出現はII期であるが、III期には大集落となり、IV期に継続する。最大時の集落の大きさは、北限と東限を台地の崖とし、東西約800m、南北約400m、約20万m<sup>2</sup>もの広さである。また、東部には居住区、西部には墓地が営まれていたことが明らかになっており、最近居住区の中心地と考えられる現在の鳴神社隣接地で方形区画が検出され注目されている。

これに対して、他の柴根遺跡と下加茂遺跡では、方形周溝墓が検出されているだけで、集落の状態は明らかでない。また、小戸遺跡も土器の出土が確認されているだけであるが、おそらくこれらの小集落が加茂の大集落をとりまいていたと考えられる。

ところが後期になると、加茂の大集落は急に縮小し、東西二つの小集落となる。一方、柴根・小戸遺跡ではこの時期に始まる住居群が検出されており、他に下加茂・久代・寺畠遺跡でも土

器が出土している。特に大規模集落ではなく、多くの集落が併存する分布状況に変化したようである。また、各遺跡とも堅穴式住居の形態は、後期後半より方形になり、古墳時代初頭にかけて屋内高床部をもつ住居が現れる。

なお、銅鐸は突線縦2式のものが満願寺で、同5式のものが加茂1丁目で出土しているが、いずれも中期末～後期にかけてのもので、最明寺川水系にあたることは注目される。

#### 古墳時代

加茂・栄根・小戸・下加茂遺跡等の集落が古墳時代に継続し、分布状況は弥生時代後期と変わりがない。

古墳時代の集落環境がよくわかっているのは栄根遺跡である。栄根遺跡は、東西二つの微高地に弥生時代後期以降の住居群が営まれるが、微高地間の低地には自然河川が流れ水田が営まれる。自然河川は、洪水ごとに流れを変える不安定なもので、古墳時代前期～中期の水田も洪水により大きく浸食されている。なお、河川からは中期の木製扉や後期の木舟等木製品が多く出土している。

小戸遺跡では、弥生時代後期以降の住居群が営まれるが、古墳時代前期の鍛冶場が出土しており、鉄器生産が行われたことが明らかになっている。また、加茂遺跡では数箇所で小住居群が形成され、弥生時代中期の大集落とは集落構成が根本的に変化している。

古墳は、北方の長尾山丘陵に前期の前方後円墳万籠山古墳や後期の勝福寺古墳が見られる。また、長尾山丘陵では約300基からなる後期群集墳が営まれる。なお、集落内でも小戸遺跡では前期、栄根遺跡では中期の埴輪が出土しており、集落と古墳墓造の関係において注目される。

#### 奈良時代～平安時代

奈良時代から平安時代初めにかけての集落は、加茂・栄根・小戸・下加茂遺跡がある。栄根遺跡では、掘立柱建物が3棟検出されており、石鈴も出土している。また、自然河川からは、奈良時代の掛轡が出土しているが、西側台地上に隣接する栄根寺廬寺の建立時に用いられたものと考えられ、両遺跡より古代氏族の存在が想定される。また、小戸遺跡では、建物跡は検出されていないが、奈良時代の土馬が出土している。

沖積地の地形については、栄根遺跡ではこの時代に古墳時代までの自然河川や低地がほぼ埋没して地形が安定し、集落の位置が変化すると同時に耕地が増えたようである。当地域では、条里地割りが残されているが、このような大規模な耕地区画も沖積地の安定化に対応するものと考えられる。

なお、この時代猪名川右岸地域は摂津国川辺郡にあたり、川西市南部の集落群は「雄家郷」に該当すると考えられる。また、延喜式内社は加茂遺跡内の鶴神社、小戸遺跡東側の小戸神社が存在する。

#### 平安時代～中世

平安時代中頃より中世にかけての集落は、加茂・栄根・下加茂遺跡等である。平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物は、栄根遺跡で3棟、加茂遺跡で1棟、下加茂遺跡で9棟検出されているが、とくに加茂・栄根遺跡の建物は規模が大きい。

この時代の寺院址としては、多田院と満願寺がある。多田院は、源満仲が川西市中部の盆地を拠点として武士団を形成した際、天保元年(970)に建立した寺院で、天台系伽藍配置が推定されている。満願寺は、長尾山丘陵中の寺院で、近世初頭の本堂下層で平安後期以降の火災にあった3期の建物が検出されている。このうち、南北朝～室町時代の建物からは陶製花瓶・銅製花瓶等からなる地鎮具が出土している。

なお、この時期以降川西市中・北部の開発が進んだらしく、多田盆地では武士の集落と考えられる蓮源寺遺跡が見られる。

#### ま と め

以上のように、川西市南部の遺跡群は旧石器・縄文時代は不明であるが、稻作の始まる弥生時代以降一つの地域を形成しており、次のとおり変遷を読み取ることができる。

#### I期（弥生時代前期）

少数の小集落が分布する。この時期の集落では縄文時代晩期末の土器が出土することが注目される。

#### II期（弥生時代中期）

加茂遺跡の大規模集落を中心として、周辺に小集落が点在する。加茂遺跡を中心とした小地域社会が形成されていたと考えられる。

#### III期（弥生時代後期～古墳時代）

加茂遺跡の大規模集落が縮小し、多くの集落が併存する。万葉山古墳や勝福寺古墳からすれば、この地域を支配する首長の存在が考えられるが、首長の居館等はまだ明らかでない。

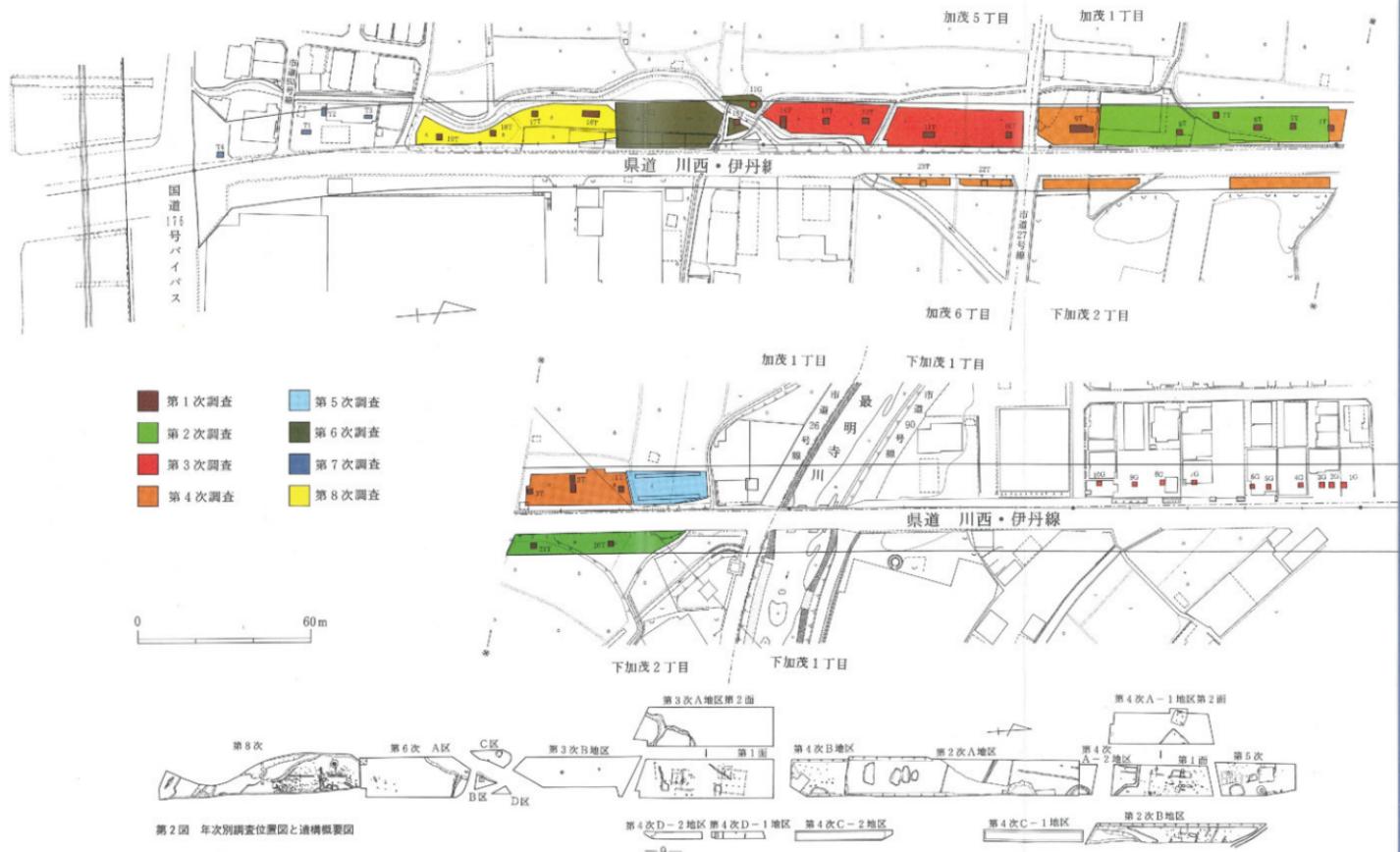
#### IV期（奈良時代～平安時代）

栄根遺跡の建物群や隣接する栄根寺廃寺より、この地域を代表する古代氏族の存在が考えられる。川辺郡内には、他に伊丹廃寺、猪名寺廃寺等の古代寺院址があり、栄根寺廃寺とともに、それぞれ川辺郡の有力氏族によって建立されたものと思われる。

#### V期（平安時代～中世）

栄根・加茂遺跡の大規模建物の出現より、平安時代中期以降有力名主層の出現が考えられる。莊園制の進展とともに、小地域のまとまりは崩壊していくと考えられる。

なお、以上の変遷に加えて、栄根遺跡の調査成果より沖積地の変化を見ると、I～III期までは地形の凹凸が激しく、自然河川の流路が定まらない不安定な時期であったが、IV～V期には平坦化したことが知られる。この地形変化は、水稻農耕と不可分な関係で、各集落や小地域社会形成の基盤となっていたと考えられる。



## 第3章 遺跡の調査

### 第1節 第1次調査

#### 1. 調査の概要

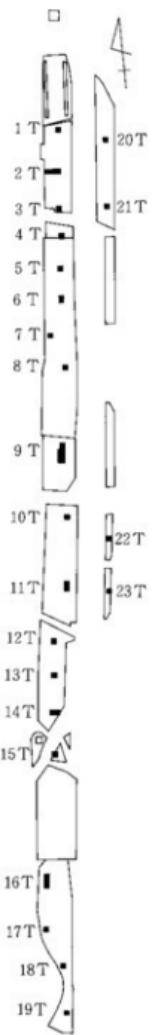
第1次調査は県道の延長約370mと幅30mにわたる範囲を確認調査の対象とした。調査は2m×2mを基本として県道の西側に1~19トレンチを設け、県道東側は20~23トレンチを設定し、遺構等の性格を確認すべく随時拡張し調査を行った。なお、最明寺川付近と中国縱貫自動車道付近の一部は未買収地のため調査対象から除外した。

#### 2. 遺構と遺物

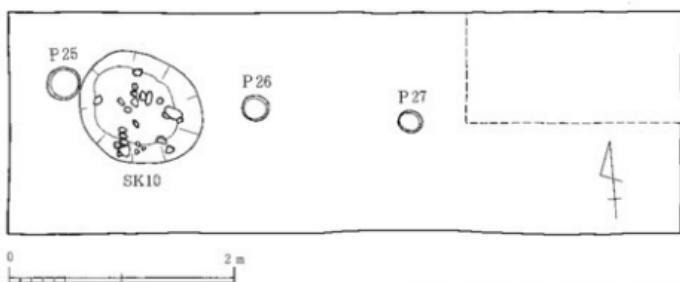
発掘調査の結果全域にわたって遺構や遺物包含層が検出された。発掘された遺物は縄文時代晩期から近世にまでおよび、遺構については古墳時代中期（5世紀）・平安時代末～鎌倉時代初頭（12世紀末～13世紀）・安土桃山時代（16世紀）ころの柱穴や土壙等がある。遺構面が重複する箇所も存在し、全域の遺構検出層位は一様ではないが僅かな上下関係で遺構面を構成している可能性が高い。以下各トレンチの状況について説明する。

遺跡の状況は13トレンチを境に南北の状況が異なる。1~8トレンチでは遺構や遺物は少ないものの、平安時代末～近世におよぶ遺構が検出された。2トレンチでは中世の柱穴及び土壙が検出され、一部の深掘りにて河川の中洲礫と自然堤防砂を確認している。6トレンチでは平安時代の柱穴と南北方向の溝を確認した。7トレンチでは淡黄色砂層から弥生時代前期の壺や臺の破片が出土した。9トレンチでは6層10YR7/8黄橙シルト質極細砂層上面にて2箇所の土器群を確認し、6層下面にて土壙や柱穴、集石等を確認した。おそらく平安時代末以降の掘立柱建物跡を含む集落の一部と考えられる。11トレンチでは黄色細砂層上面にて、柱穴を2箇所検出した。12トレンチでは遺構は検出されなかったものにぶい黄色細砂層から縄文時代晩期と考えられる土器片が出土した。

13トレンチから19トレンチにかけては未買収地があり、各トレンチの土層のつながりが判然としないところがあるが、平安時代～鎌倉時代を中心とする遺構が集中する箇所である。16トレンチでは6層2.5Y7/2灰黄シルト質細砂層上面にて掘方径2.6mの石組み井戸を検出した。遺物は出土

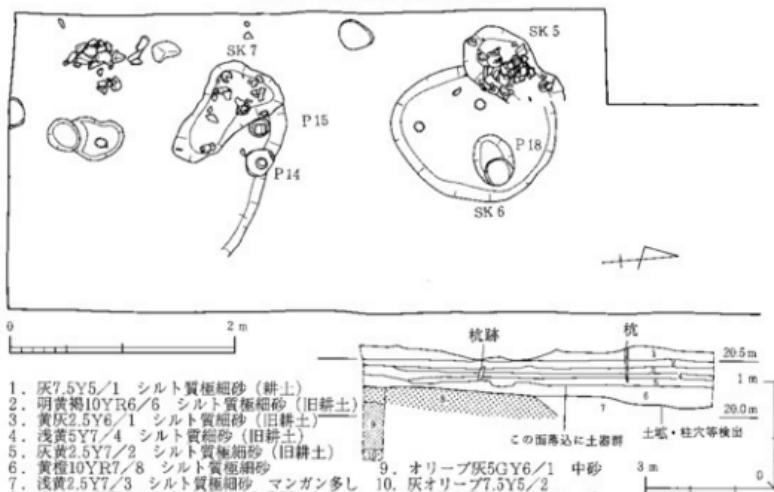


第3図  
第1次調査位置図

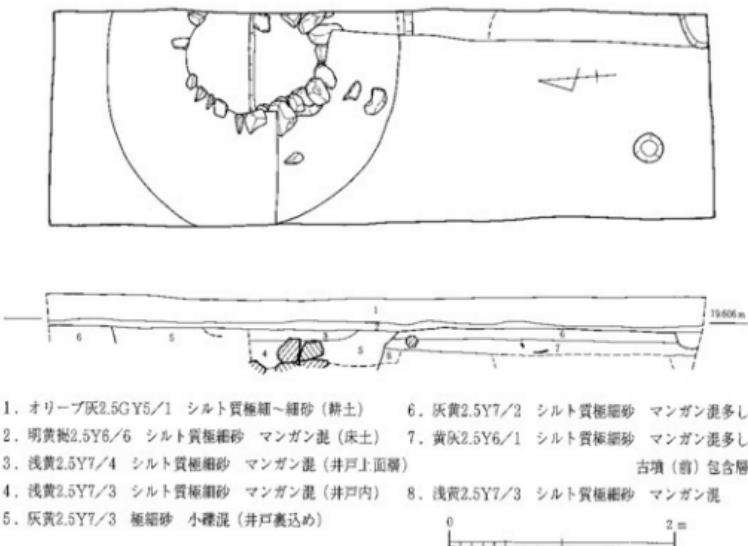


1. 極細砂（耕土）
2. シルト質極細砂小礫混じり（旧耕土）
3. 細砂層極粗砂混じり マンガン混 小礫混じり（旧耕土）
4. 灰黄2.5Y7/2 シルト質細砂 マンガン混 小礫混じり
5. 浅黄5Y7/3 中砂～粗砂 グレーディング
6. にぶい黄2.5Y6/4 中砂
7. にぶい黄褐10YR5/4 中砂～粗砂 グレーディング
8. 白灰2.5Y7/1 中砂 ラミナ
9. 褐10YR4/4 極粗砂 中礫混じり
10. にぶい黄褐10YR5/3 中砂～粗砂 グレーディング
11. にぶい黄褐10YR4/3 粗砂 中礫混じり
12. 黄褐2.5Y5/3 中砂 大礫 (200mmØ)混

第4図 2トレンチ平面図・断面図



第5図 9トレンチ平面図・断面図

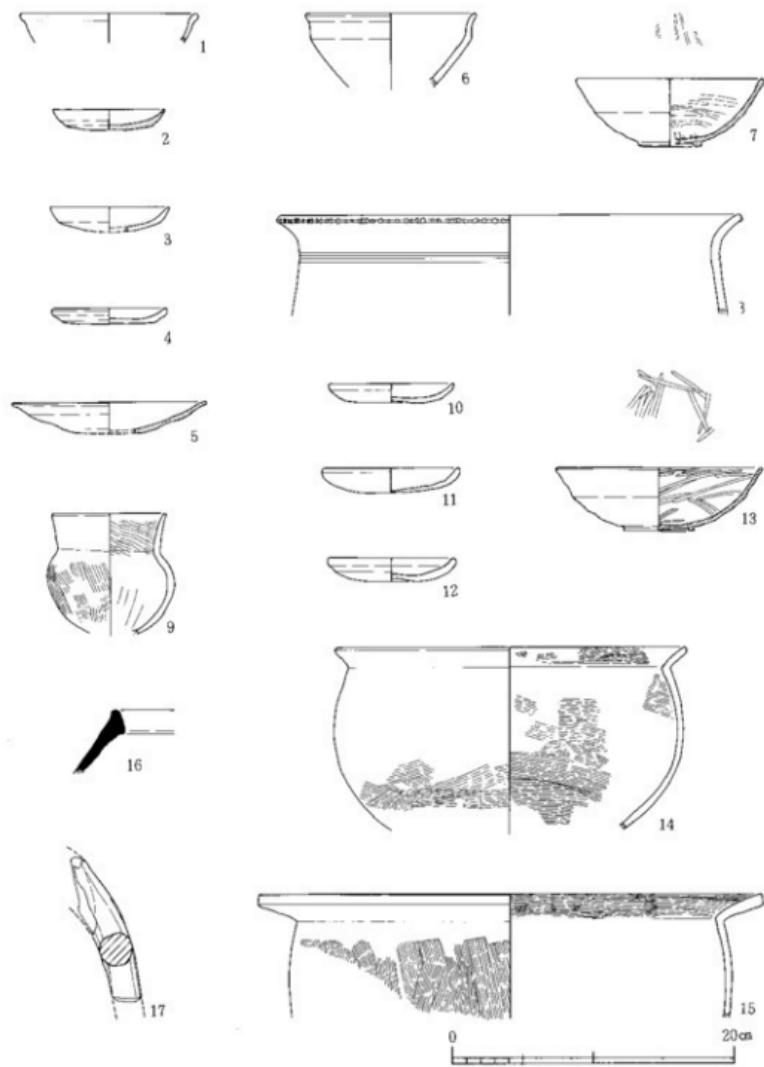


第6図 16トレント平面図・断面図

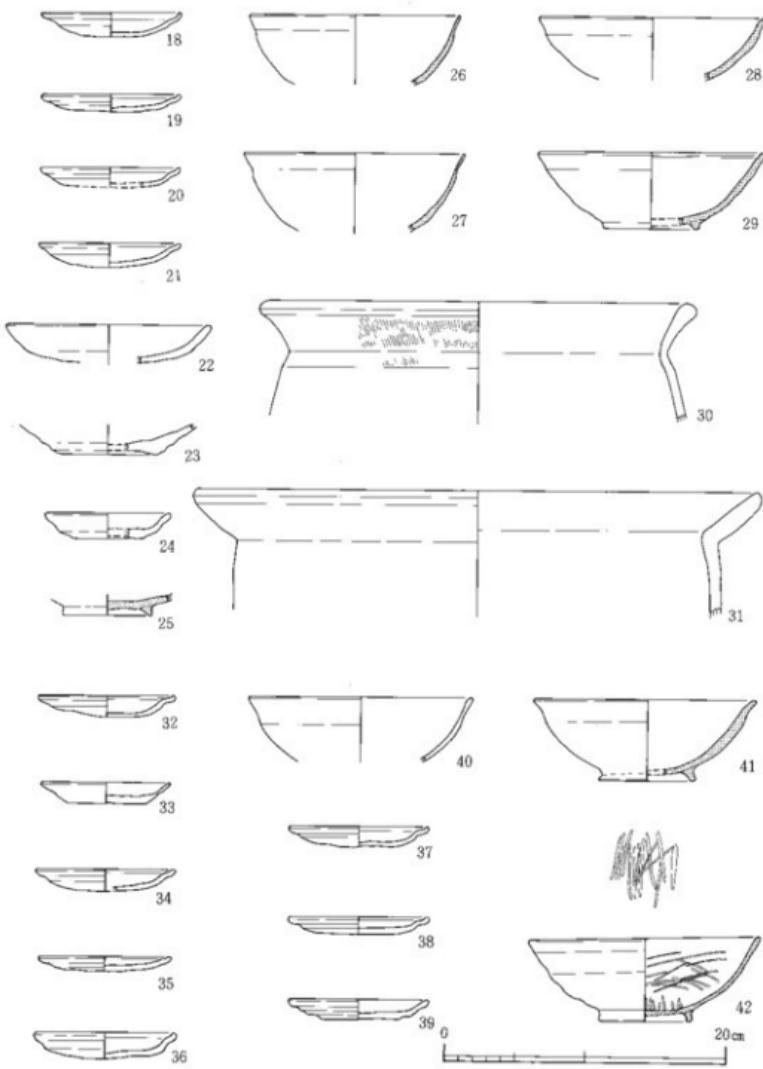
していないが形態から鎌倉時代以降のものと考えられる。また平安時代と考えられる柱穴を検出した他、古墳時代の土器も出土している。17トレントでは平安時代末～鎌倉時代の溝が検出され、壺等が出土した。18トレントでは幅20cm深さ15cmの小規模な溝状遺構が検出された。これら南部トレントでは、時期の隔たりはあるものの、遺構が集中する箇所であり、集落の中心に近いものと考えられる。

県道東側の調査は道路拡張規模等の制約もあり、20～23トレントの4箇所の試掘を行うにとどまった。20トレントでは耕土及び床土の直下で、溝と土壤状に落ち込む遺構を検出した。埋土は灰色細砂で、出土遺物は少なく、中世末か近世ごろのものと考えられる。この他、21トレントでは旧耕土及び床土の下層に遺物包含層が確認された。地形から考えると旧流路内の堆積と考えられる。また22・23トレントでは遺構はなく、遺物も少ないものの、遺物包含層が検出された。

以上のように第1次調査の結果、縄文・弥生・古墳・平安から近世に至る遺構、遺物が調査対象範囲の沖積地から検出された。また遺構・遺物の密度が疎らな部分があるものの、今回の未買収地を除く調査対象地の全ての範囲が遺跡であると考えられる。また南北方向に延びる事業地内に遺跡範囲が及ぶと考えられることから、さらに周囲の範囲確認が必要となった。



第7図 出土遺物(1)



第8図 出土遺物(2)

第1次調査の遺物はコンテナで約8箱出土し、その中で実測可能な遺物は50点をかぞえた。遺物は調査区のはば全域にわたって出土しているが、12トレンチで縄文晩期と考えられる小片の土器が出土した他、弥生～近世に至る各時期の遺物が出土した。

1トレンチではⅡ層の黄色細砂層から、僅かに外反する玉縁をもつ龍泉窯系の青磁碗(1)が出土した。また4トレンチではⅡ層の黄褐色土層から鉄釉を施した天目茶碗(6)が出土した。1は時期不明、6は中世のものと考えられる。

7トレンチのV層から弥生時代前期の壺や甕の破片が出土した。図化したのは8の甕のみで、口径32cmの中型品で口縁端部に細かい刻目をもち、体部にヘラガキ沈線2条が施されている。出土遺物が少なく細かな時期判定が困難であるが、前期前半のものかもしれない。

9トレンチからは多数の土師器や瓦器が遺構内と土器群からまとまって出土した。土器群1は18～31までで、土師器小皿、大皿、杯、甕、瓦器碗がある。18～21は「て」字状口縁をもつ精製された土師器小皿で口縁は弱く外反するタイプである。24は底部糸切りの土師器小皿で口縁は僅かに外反し、体部中央に段をもつ。22は精製された土師器大皿で、体部に一段ナデを施している。23は底部糸切りの杯である。30・31は大型の甕で胎土が粗いものである。25～29は瓦器碗であり、26・27は口縁端部を薄く仕上げ、28・29は僅かに外反する。底部の高台はやや低く、ふんぱりが少ない。小皿や大皿、瓦器碗等から時期は12世紀中葉頃と考えられる。

土器群2は土師器小皿・碗、瓦器碗がある。土師器小皿(37・38)は口縁が強く外反する「て」字状口縁をもつものである。39の土師器小皿は口縁が外反し体部に強いおさえがある特徴的な土器である。40は口縁が僅かに外反する土師器の碗である。42は高台が高く踏ん張り、体部も膨らみ器高も高くなる瓦器碗である。これらの土器は12世紀前葉と考えられる。土壙1からは「て」字状口縁の土師器小皿(32)と糸切り底をもつ小皿(33)や瓦器碗(41)が出土し、時期は12世紀前葉と考えられる。土壙2から出土した「て」字状口縁の土師器小皿(34)や、柱穴から出土した「て」字状口縁の土師器小皿(35・36)は12世紀前葉から中葉にかけての時期であろう。

11トレンチでは一段ナデの土師器小皿(3・4)や体部下半を押えた瓦器小皿(2)が出土し、時期は12～13世紀である。5は二段にナデされた和泉型の瓦器碗で、時期は14世紀前半であろう。

16トレンチでは土師器の小型丸底壺がⅧ層から出土。口縁部も短く5世紀代と考えられる。

17トレンチでは溝付近から土器群が検出された。10～12は一段ナデをもつ土師器の小皿である。14は体部が丸く口縁が短く外反し、15は体部の張りが少ない大型の甕である。また瓦器碗(7・13)があり、器高が低く高台も低く小さい。これらは13世紀前半とを考えられる。

18トレンチでは須恵器の鉢(16)があり口縁端部が拡張された、いわゆる東播系のもので13世紀後半と考えられる。17は瓦質の鏡の脚部で時期は12～13世紀であろう。

今回出土した遺物は時期幅が広いことから、各時期の遺構の存在を示すものと考えられる。また12～13世紀の遺物については細かな型式差がうかがえる資料がそろったことになろう。

## 第2節 第2次調査

### 1. 調査区の設定

第2次調査は県道の西側がA地区で80m×14mの範囲である。当所は確認調査時4~8トレンチにあたり平安時代~鎌倉時代の柱穴や溝等が発掘された箇所である。また県道東側がB地区で60m×7mの範囲である。当所は確認調査時20・21トレンチにあたり、土壤や溝が検出された。

これらの地区は下加茂遺跡の北部にあたり北西から南東に流れる瀬顧寺川の右岸にあたる沖積地に位置する。両地区共、標高は約21mである。

### 2. A地区の遺構と遺物

A地区では県道西側地区を道路センターを基準に5mグリッドを組み調査を行った。

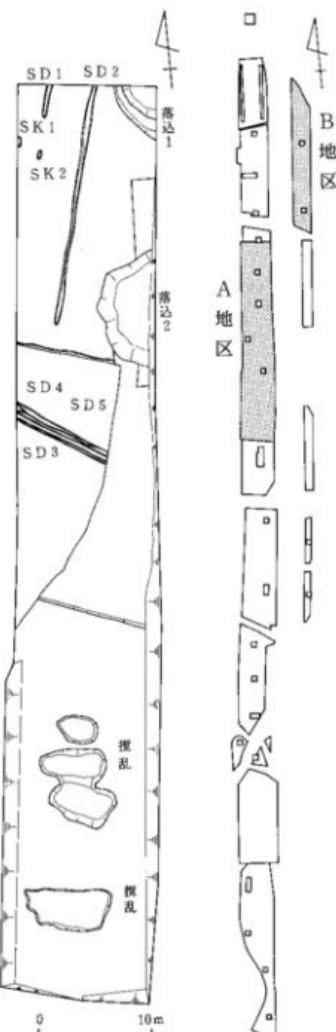
#### 基本土層

A地区的土層は各所によって多少違いはあるが、基本的には次の5つの層序が認められた。I層は灰色耕作土層、II層は淡褐色細砂層、III層は黄褐色細砂層、IV層は黄灰色細砂層、V層は黄色極細砂層、VI層は淡黄褐色細砂層である。

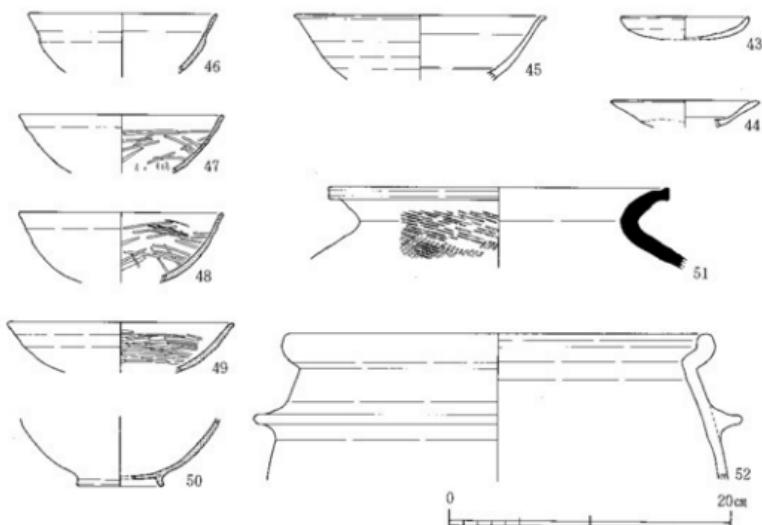
遺構についてはIV層上面で検出されたSD1・2等と、V層上面で検出された落込みなどの2面に重複しているが、いずれの面も遺構は疎らである。

#### 溝1・2(SD1・2)

上層の遺構として、IV層上面にて南北方向の溝(SD1・SD2)及び土壤(SK1)を検出した。SD1は南北方向にはしる溝で幅45cm、南北2.9m以上で、断面U字形を呈



第10図 A地区全体図  
第9図 第2次調査位置図



第11図 A地区出土遺物

する。SD 2も南北方向にはしり北は調査区外に出ており、その延長は22.3mにおよぶ。

#### 土壌1 (SK 1)

SK 1は120cm×30cm以上、東西方向の断面はU字を呈する。溝と同じIV層上面で検出された。遺構からは陶磁器などが出土し、近世に属するものと考えられる。

#### 溝3～5 (SD 3～5)

V層の下層では東西方向の溝SD 3～5の3本を検出した。いずれも幅40cm長さ9mで、西は調査区外に延び、東は後世に削平をうけているものである。また付近では同時期の遺構がなく性格は不明である。

#### 落込1・2 (SX 1・2)

調査区北東隅では弧状を呈する落込1を検出した。また落込1の南20mには落込2が検出された。平面は直径11m、深さ81cmで半円形部分のみ検出された。土層は3層からなり上層は茶褐色細砂層、中層は灰茶色極細砂層、下層は茶灰色細砂層である。またこの遺構からは平安時代末の遺物が出土した。これら落込については人為的なものより、自然流路などの影響を受け

た自然作用で生じた凹地であると考えられる。

なお確認調査時での調査区の黄色ベース面を形成する以前の旧流路を検出し、弥生時代前期の土器片が出土したが、今回確実な時期をおさえられる土器は出土しなかった。また調査区南方では前平や擾乱が著しく、明確な遺構は検出されなかった。

A地区の遺物出土量は少なく、図化できた遺物は僅か10点のみである。50は包含層出土でその他は全て落込2出土である。43は土師器小皿で口縁端部がつまみあげられ、精製されたもので、12~13世紀のものであろう。44は白磁小皿で外面に圈線の搔き取りがある。45は白磁碗で口縁端部が外反しており、時期はいずれも11~12世紀頃と考えられる。46~50は瓦器椀で49は器高が低いものの、いずれも12世紀代のものである。51は東播系の須恵器甕で時期は12世紀末~13世紀である。52は底地不明の土師器の羽釜であるが、河内や攝津に多くみられ15~16世紀のものであろう。

### 3. B地区の遺構と遺物

B地区は県道東側に位置し、満願寺川右岸の沖積地からなる北部と沖積地を流れる旧河道上に位置する南部に分かれる。なお調査は道路センターを基準に5m方眼で行った。

#### 基本土層

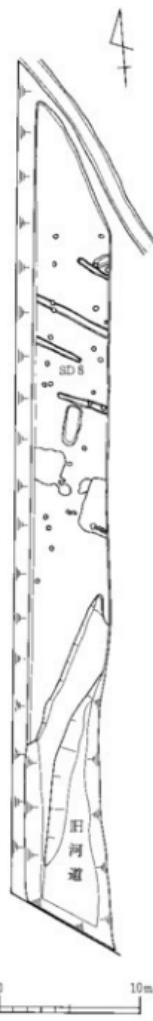
B地区的基本土層は南北で違いがあり、北部では4つの土層が認められた。I層は灰色耕作土、II層は淡褐色細砂層、III層は黄褐色シルト質細砂層、IV層は黄色シルト質極細砂層である。

北部の遺構はIII層上面で柱穴群を検出し下層であるIV層上面で溝や圍池と考えられる遺構や土壤を検出した。

調査区の南部の東側では弧状を呈する流路跡が検出され、最下層では古墳時代の遺物が混入するものの平安時代の堆積と考えられ、上層では近世~現代に及ぶことが判明した。長期間にわたって流路であったことを裏付ける資料である。

#### 柱穴

III層上面の遺構として、北部を中心で検出された柱穴がある。柱穴の南北方向の延びは推定できるのであるが、なにぶん東西方向の調査範囲が狭く、東西方向は全く不明と言わざるをえない。例えばP1~9は南北方向に並ぶが、柱間はそれぞれ若干の違いがあり、



第12図 B地区全体図

1.6m～2.8mが認められる。これらのすぐ東側には南北方向にP10～15があり柱間は2.2m～3.2mで、正確な規格をもった掘立柱建物跡かどうか不明である。また南北方向の横列の可能性もあるがこの数では判断がつかない。

#### 溝1～4 (SD 1～4)

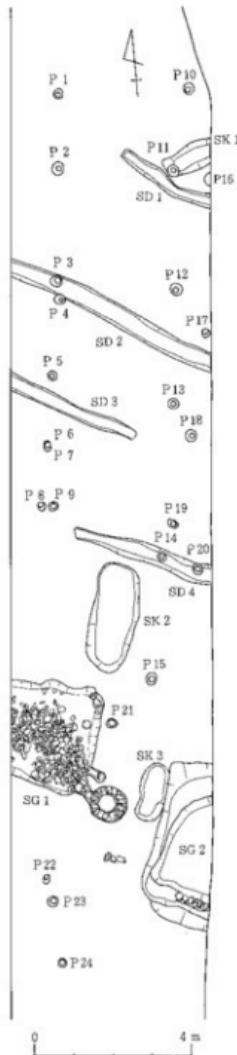
IV層上面で検出された溝はSD 1～4がある。これらの溝はいずれも幅50cmで北西から南東方向で検出され、埋土は黄褐色土である。また各溝の間隔は2.7mから3.5mでほぼ等間隔である。全体に溝の深さも浅く、遺物もほとんどなかったことから、性格等は不明である。

#### 土壤1～3 (SK 1～3)

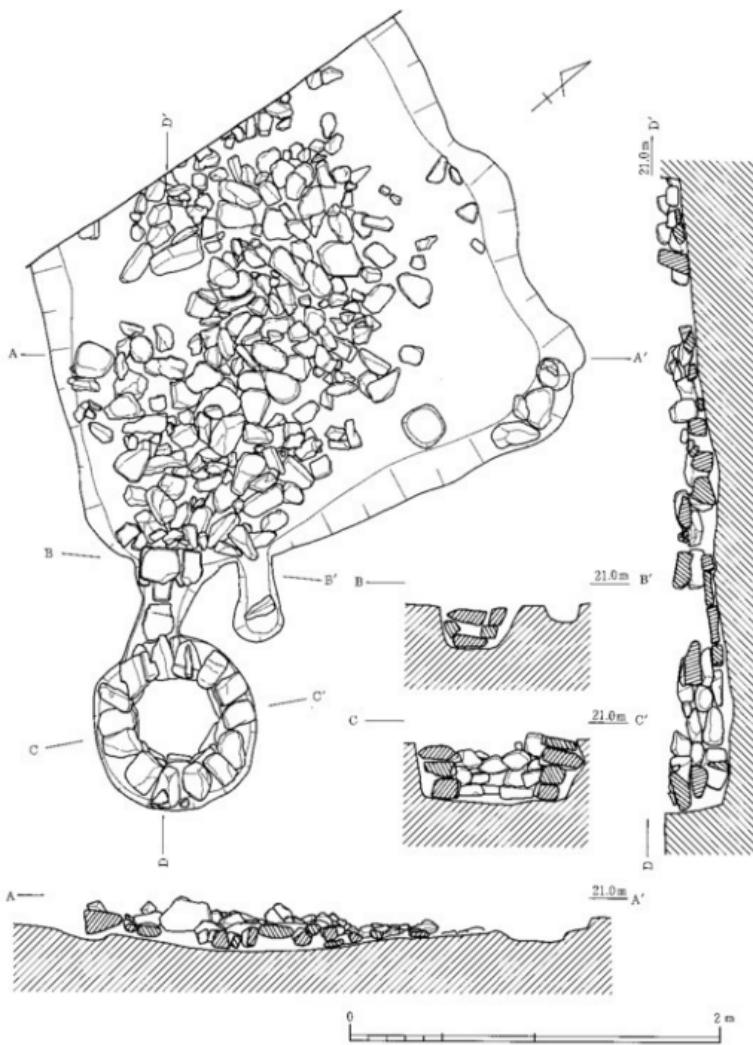
土壤は3ヶ所で発掘された。SK 1は北部の北東隅で検出された。規模は0.7m×1.3m以上のものである。SK 2は北部の中央付近にあり、規模は1.2m×2.8mと大きいが、深さは13cmと浅い。SK 3は北部の南寄りに位置し、規模は0.6m×1.6mと小型で深さ10cmと浅い。いずれの土壤も浅く性格の決め手になるような遺物の出土もなかった。

#### 園池1 (SG 1)

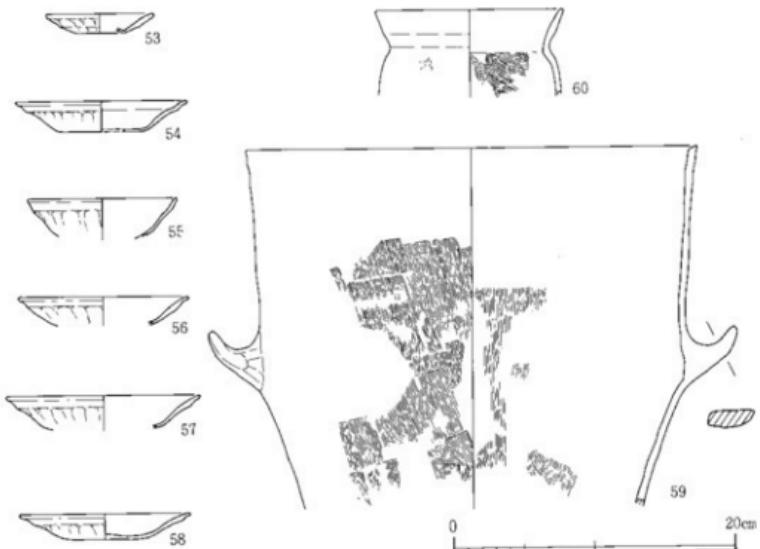
SG 1は北部の南寄りに位置する園池遺構である。その形態は南北2.8m、東西2.4m以上の方形部と南東隅に径0.8mの円形突出部を持つものである。遺構内には石材が敷きつめられており、方形容には5～25cmの砾が、円形容には20cmクラスで長方形の砾が見られた。方形容では北西から南東方向に石材の集中がみられ、周囲に石材のない部分もある。また方形容と円形容をつなぐ所には導入部があり、長さ35cm、幅25cmと小さいが周囲を石材で囲んで空間を作っている。最も南に位置する円形容は周囲に石材を3～4段で小口積みし、その内径は40cmを計り、小さなながらも井戸状を呈している。遺構底の傾斜は方形容から導入部、円形容にかけて約30cm低くなっている。そのため方形容にある水は導入部を通じて円形容に溜まることが考えられる。SG 1からは15～16世紀頃の遺物が出土していることから、中世末頃の庭園に関する園池遺構と考えられる。



第13図 B地区遺構配置図



第14図 園池 1



第15図 B地区出土遺物

#### 園池2 (SG2)

SG2はSG1の東に隣接しておりその位置関係も平行関係にある。規模は南北4.3m、東西は調査区外にでるため不明だが、1.9m以上を計り、平面形は方形と考えられる。掘方はおおむね2段に掘り込まれ、最も深い所で27cmを計る。SG2はSG1のように石材が殆どなく、南辺の掘込みの中段に20cm程度の石材が僅かに組まれている。遺構内からは中世末頃の遺物が若干出土しており、遺構の規模や時期からみて、中世末頃の園池遺構の可能性がある。

B地区的遺物出土量も少なく、図化できた遺物は僅か8点である。53は土師器のへそ皿で、時期は14~15世紀代。54~58は土師器皿で、口縁部外面をナデすることで口縁直下が肥厚している。肥厚部以下はタテ方向にユビナデが明確に残るもので、時期は16世紀代である。59は近世の柱穴によって削られていた土師器の底である。体部には2ヶ所に把手があり、口縁端部の内側は面取りされ内外面は細かなハケ目調整が施された6世紀代のものであろう。60は土師器の甕で頭部外面にナデを施し体部内面はハケ目調整されている。6世紀代のものであろう。

以上、第2次調査の結果A地区では南部の擾乱等が大きく北部を中心に12世紀頃の遺構が隙間にみられるのとどまつた。B地区では北部にて中世末及び近世の遺構が検出され、特に園池遺構は中世末の庭園研究に重要な資料となろう。

### 第3節 第3次調査

#### 1. 調査区の設定

本年度の調査範囲は第16図のとおりである。調査範囲内のほぼ中央に水路が存在しているため、A・Bの2つの調査区に分けて行った。北側のものをA地区、南側のものをB地区と呼ぶことにする。

第1次調査で、A地区には10・11トレンチ、B地区には12~14トレンチが設定され、すべてのトレンチで包含層が確認され、なかでも11トレンチからは柱穴がみつかったことから、掘立柱建物跡の存在が予想された。

#### 2. 層序

調査区内の土層は、基本的には6つの層序が認められる。

第I層は現耕土、第II層は暗灰黄色シルト混じり極細砂土、第III層は黄褐色シルト質極細砂土、第IV層は黄褐色中疊混じり極細砂質シルト土、第V層は灰黄色中~大疊混じり極細砂土、第VI層は砂疊土である。

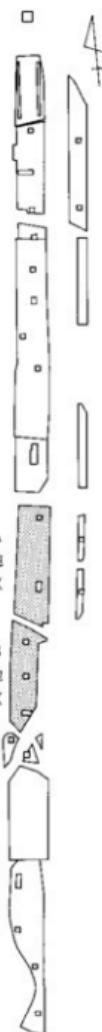
確認した最下層の第VI層の堆積状況は、A・Bの調査区の境付近で高く盛り上がって堆積しており、北側あるいは南側にゆくにしたがって下がっている。その後の堆積は、北側のA地区の方が、多くの土砂の供給を受けて比較的厚く堆積しており、弥生時代中期以前の旧地表面はA地区が高くB地区が低い地形を呈していたと考えられる。弥生時代中期以後には、A・Bの両地区の比高差はほとんど認められなくなるが、依然として境界部には高まりがみられる。

第II層は中世の遺物の包含が認められた。この土層はA地区にのみ見られ、B地区では削平されており存在しない。本来はこの層が中世の遺構面であったと思われるが、土壤化の影響を受けていたため、遺構を確認したのは第III層上面である。

第III層は中世の遺構検出面であるとともに、弥生時代の遺物包含層ともなっており、弥生時代の遺構はその下層の第IV層の上面で検出することができた。

#### 3. 調査の結果

調査区は水路をはさんでA地区とB地区に分かれている。いずれの調査区においても、上下2枚の遺構面についての調査を行った。その結果、第1面では中世の掘立柱建物跡と土壤、第2面では弥生時代の方形周溝墓と土壤を検出した。



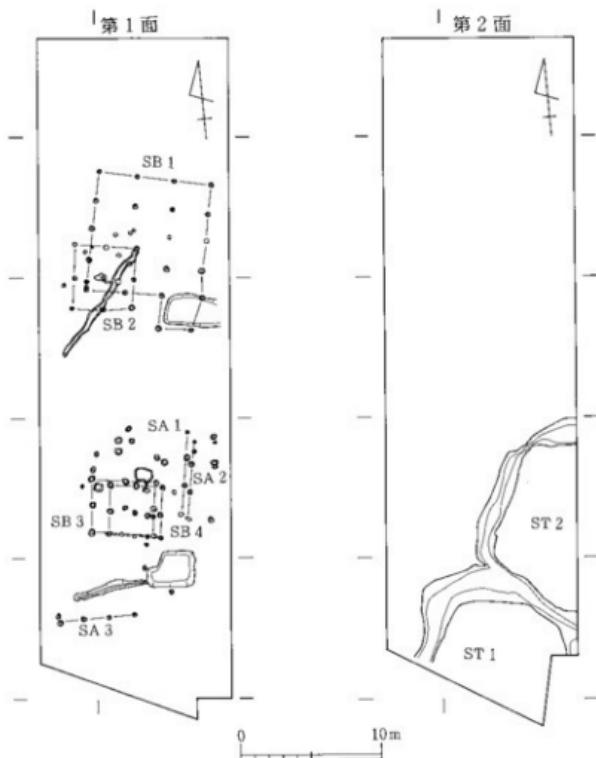
第16図  
第3次調査位置図

a. 第1面の遺構と遺物。

第1面で検出された遺構には、A地区では柱穴、土壤、横列、B地区では土壤などがある。遺構の密度としてはA地区に集中している。

このうち、A地区で検出された柱穴は、4棟の掘立柱建物跡と横列に復元された。掘立柱建物跡から出土した遺物は少なく、時期の決定は困難であるが、SB2・SB4より出土した瓦器の椀・土師器の小皿より12世紀の末頃の遺構であると思われる。

他の遺構からは、若干の須恵器・土師器の遺物を検出しているが、いずれも細片であり図化は不可能で時期も明らかではないが、同一面で検出されたことや埋土の類似性などから、掘立柱建物跡と時期的に大きく違いが認められるわけではない。



第17図 A地区全体図

### 掘立柱建物跡 1 (SB 1)

A 地区で最も北側で検出された遺構である。一部で SB 2 と切り合って検出されているが、先後関係は不明である。

N-22°-E に棟軸方向をとる、桁行 4 間、梁行 3 間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は桁行方向で 8.35m、梁行方向で 8.20m を測り、面積は 68.5m<sup>2</sup>である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が 2.09m、梁行が 2.73m である。

総柱のすべての柱穴を検出している。掘り方の直径は 20~45cm を測り、検出面からの深さは 15~53cm である。また柱の抜き取り痕の直径は 18~32cm である。柱穴内においては、柱根、礎板、結石などは検出されなかった。

遺物は P 8・9 を除く柱穴より土師器、瓦器が出土している。いずれも細片であり、図化は不可能であった。P 16 出土の鉄器を図化している。F 1 は長さ 13.6cm、幅 2.4cm の刀子である。先端部は欠損している。

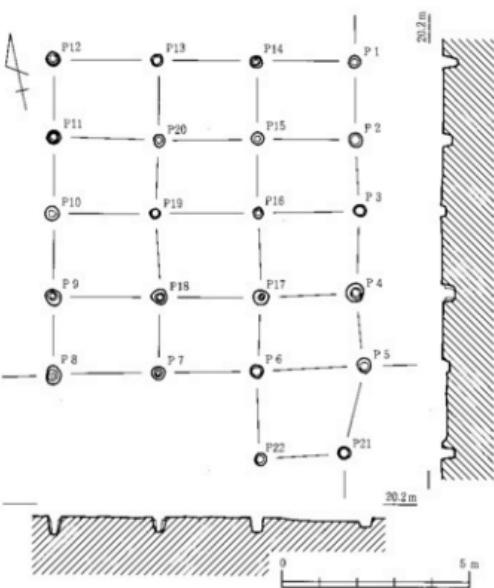
付帯施設

P 5・6 延長上に P 21・22 を検出した。柱穴の規模がやや小さいことなどから、身舎に付帯する庇のようなものが想定できる。

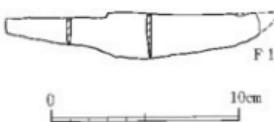
### 掘立柱建物跡 2 (SB 2)

A 地区で SB 1 と重複して検出された。N-20°-E に棟軸方向をとる、桁行 2 間、梁行 2 間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は桁行方向で 4.50m、梁行方向で 4.35m を測り、面積は 19.6m<sup>2</sup> である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が 2.25m、梁行が 2.18m である。

柱穴の掘り方の直径は 28~40cm を測り、検出面からの深さは 15~53cm である。また柱の抜き取り痕の直径は 20~30cm である。



第18図 掘立柱建物跡 1



第19図 出土鉄器

遺物は、すべての柱穴より出土しているが、ほとんどが細片である。

P 1 より出土した土器のみが陶化できた。62は瓦器の輪の底部である。磨滅が激しく調整の観察は困難であるが、内面にわずかに暗文がみられる。高台は粘土縫を張り付けた程度のものである。12世紀末のものであると考えられる。



第21図 出土遺物

#### 掘立柱建物跡 3 (SB 3)

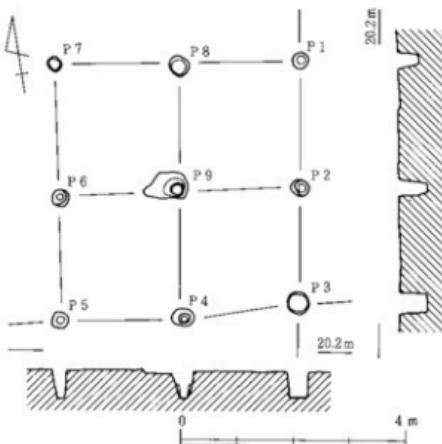
A地区の南側で検出された。N-Eに棟軸方向をとる、桁行2間、梁行2間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は桁行方向で3.90m、梁行方向で4.50mを測り、面積は17.6m<sup>2</sup>である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.95m、梁行が2.25mである。

柱穴掘り方の直径は27~48cmを測り、検出面からの深さは10~30cmである。

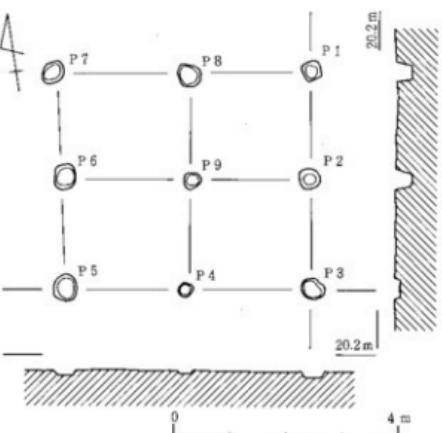
#### 掘立柱建物跡 4 (SB 4)

A地区の南側で検出された。N-Eに棟軸方向をとる、桁行2間、梁行2間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は桁行方向で3.55m、梁行方向で3.70mを測り、面積は13.2m<sup>2</sup>である。柱穴間の心々距離の平均値は桁行が1.78m、梁行が1.85mである。

柱穴掘り方の直径は26~45cmを測り、検出面からの深さは7~20cmである。



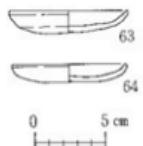
第20図 掘立柱建物跡 2



第21図 掘立柱建物跡 3

遺物は63がP 8、64がP 1より出土している。口縁部が直線的に立ち上がるるものと、内湾するものとがある。12世紀末のものであろう。

S B 3とS B 4の東にS A 1・2が南にS A 3が検出された。身舎と方向を同じくしていることから、これらの掘立柱建物跡に関連のある柵列と考えられる。



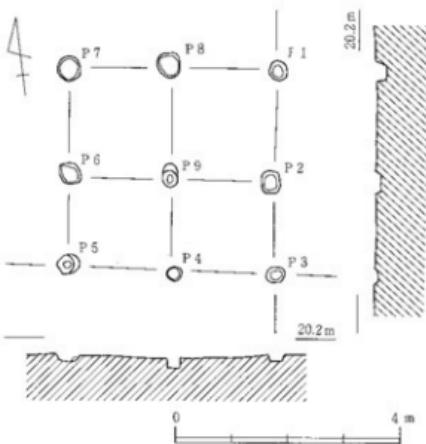
第24図 出土土器

#### 土壤1 (SK 1)

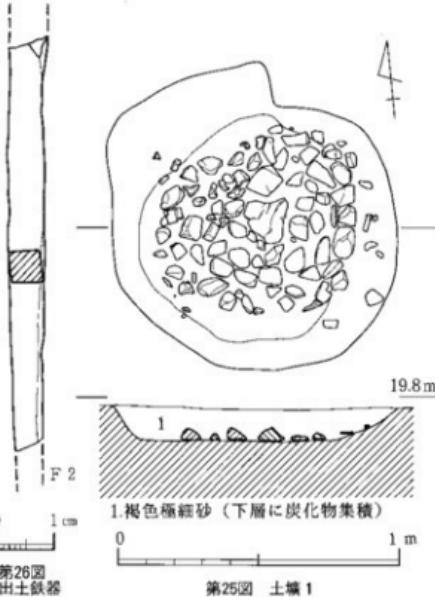
B地区の中央部西側で検出された土壤である。形状は、ほぼ円形を呈しているが、北側に幅65cm、長さ15cmの張り出しを持っているため、不整形を示している。規模は長軸方向に109cm、短軸方向に100cmである。深さは約12cmを測る。

埋土は基本的に1層である。褐色の極細砂が堆積しているが、土壤底には炭化物の集積が確認された。土壤底には、小礫～拳大の亜角礫が散かれており、火を受けたらしく赤化していた。

遺物は中世の土器の細片とともに図化した鉄釘(F 2)が出土した。折れているが、残存長7.4cm、幅0.7cmを測る。



第23図 掘立柱建物跡4



第26図 出土鉄器

b. 第2面の遺構と遺物。

第2面では、A地区で2基の方形周溝墓とB地区で土壙1基が検出された。遺構はA・B両調査区の境付近でのみ検出しており、北側と南側では検出されなかった。

この時期には以前に比べれば地表面が平坦化したといえ、より微視的に見れば、A・B両調査区の境付近は下層の第VI層の影響を受けて依然として高まりがみられる。このことは、調査区の北側や南側よりは洪水の影響を受けにくく高燥で比較的安定した条件の良い場所であったと考えられる。これが、遺構がA・B両調査区の境付近で検出された主な理由であると考えられる。

それぞれの遺構からは、図化可能な遺物が出土している。弥生時代中期の時期の遺構であると考えられる。

以下、遺構と遺物について説明を加える。

方形周溝墓1・2(ST1・2)

A地区的南側で検出した方形周溝墓である。そのうちで、南側のものをST1、北側のものをST2としている。

検出状況

ST1・ST2ともに調査区の制約を受けているため、全体を検出したわけではない。ST1・ST2ともに全体の約半分を検出しているに過ぎない。遺構は東側の現県道の下層に伸びていると思われる。ST1の南周溝はA・Bの調査区の境にあたり、現水路の削平を受けて消失していると考えられる。

遺構としては、周溝のみを検出した。一部で両者の周溝は重複している。断面において周溝の埋没状況を観察したが、重複部分に切り合い関係は認められなかった。ST1とST2は周溝を共有していたようである。主体部の存在が想定されたが、後世の削平を受けたためか、検出できなかった。

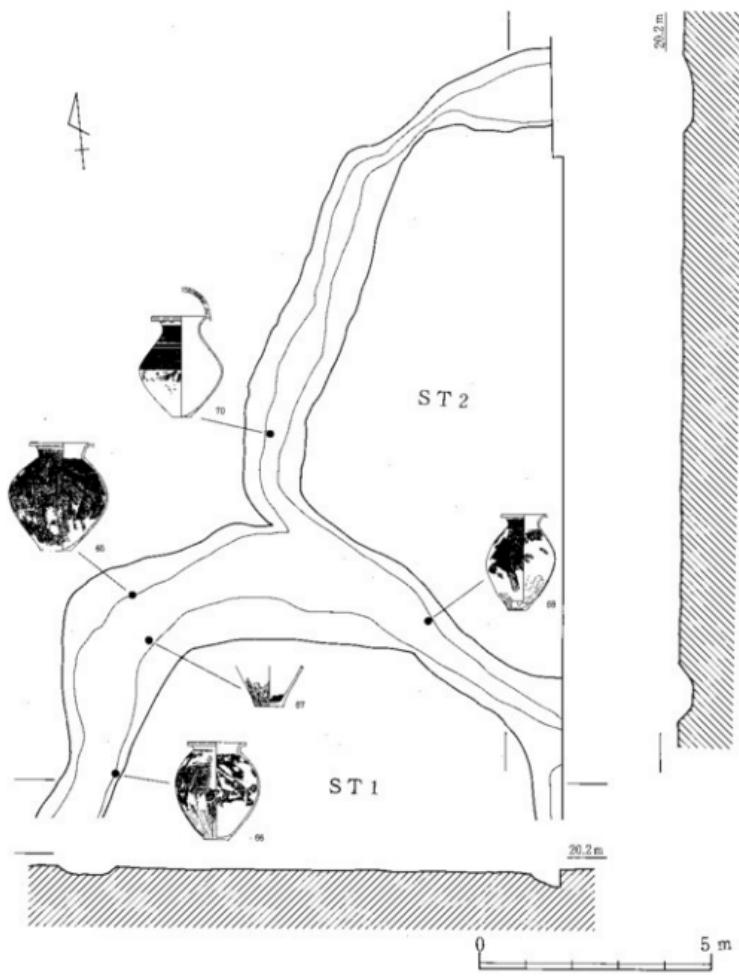
規模・形状

全体を検出していないので規模は明確ではない。形状はやや歪ながら方形を呈していると思われる。ST1は南北方向に8.6m、東西方向に11.0mを検出した。ST2は南北方向に12.5m、東西方向に8.0mを検出した。

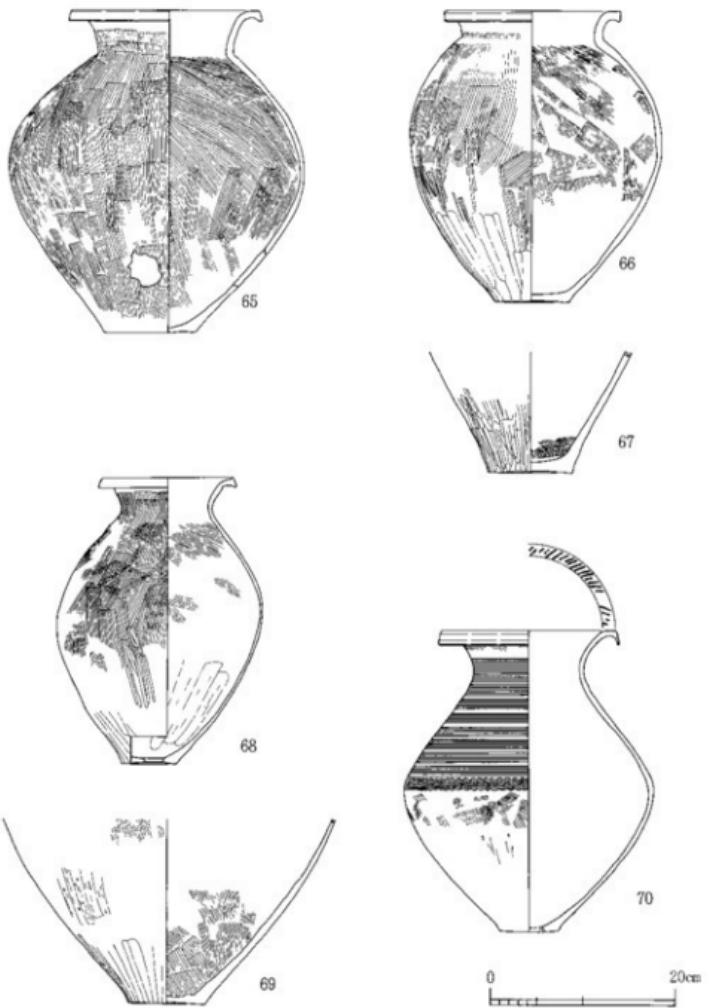
周溝の幅は45~270cmと差が大きい。特に、ST2の西周溝と北周溝との屈曲部は極端に幅が狭くなっている。深さは20~35cmと浅く、削平を受けた結果であると思われる。埋土は1層で暗灰色のシルト質極細砂の堆積がみられる。

出土遺物

遺物は周溝内より、土器と石器が出土している。そのうち、図化しているものは、土器が6点と石器が1点である。



第27図 方形闊溝墓



第28回 出土遺物

65はS T 1の西周溝から出土した壺である。

やや直線的にひらく頸部に下方に拡張した口縁部をもつ。外面に頸部～底部まで4条/cmで10本単位のハケ目を上→下方向に施し、内面は体部～底部まで4条/cmで7本単位のハケ目を下→上方向に施している。口縁部は内外面ともに横方向のナデの調整を加えている。体部下位には4.2cm×3.0cmの穿孔がみられる。法量は、口径が復元で19.8cm、器高が34.8cm、腹径が31.6cm、底径が9.6cmである。残存状況は、口縁部を除いてはほぼ完存である。焼成は良好である。色調は、にぶい黄橙色を呈する。

66はS T 1の西周溝から出土した壺である。

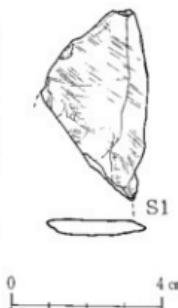
短い頸部に上下をわずかに拡張した口縁部をもつ。外面の調整は頸部下半から底部にかけて5条/cmで11本単位のハケ目を上→下方向に施した後、体部中位には幅3mmの縱方向のヘラミガキを一部に残す。底部には下→上方向の強いケズリが観察される。内面は体部以下を7条/cmのハケ目を施しているが体部下位から底部にかけては磨滅のために調整は不明である。口縁部は内外面ともに横方向のナデ調整を加えている。法量は、口径が復元で13.9cm、器高が31.2cm、腹径が22.1cm、底径が5.9cmである。残存状況は口縁部が約2/3欠損しているが、他はほぼ完存している。焼成はやや甘く、磨滅が認められる。色調は外面がにぶい橙色、内面が褐灰色である。

67はS T 1の西周溝から出土した底部である。

平底の底部から直線的にのびる体部をもつ。外面の体部下位から底部にかけては、幅3～4mmの縱方向のヘラミガキが施されているが、上部は磨滅のために観察できない。内面も磨滅が著しいが、底部付近に6条/cmのハケ目が観察される。法量は、残存高が13.3cm、底部が復元で9.2cmである。残存状況は底部が約1/3、体部はごくわずかである。焼成はやや甘く、磨滅が認められる。色調は外面がにぶい橙色、内面が灰白色である。

68はS T 1とS T 2の共有溝から出土した壺である。

やや直線的にひらく短い頸部に上下にわずかに拡張した口縁部をもつ。4と比べて体部に張りがない。外面に頸部～体部中位まで5条/cmで11本単位のハケ目を上→下方向に施し。体部中位にはその後、幅3mmの縱方向のヘラミガキを施している。底部付近は磨滅が著しいが、縱方向のケズリが観察される。内面は体部上半にハケ目、体部下半に縱方向のヘラケズリが観察されるが磨滅が著しい。口縁部は内外面ともに横方向のナデで調整している。底部には径1.8cmの穿孔がみられる。法量は、口径が13.9cm、器高が31.2cm、腹径が22.1cm、底径が5.9cmである。残存状況は、底部の一部を欠いているが、ほぼ完存している。焼成はやや甘く、磨滅が認められる。色調は、にぶい黄橙色を呈する。



第29図 出土石器

69はS T 2の西周溝から出土した壺の底部から体部にかけてのものである。

平底の底部からやや内湾ぎみにのびる体部をもつ。外面は体部中位に一部縦方向のハケ目が観察される。体部下半から底部にかけては下→上の縦方向のヘラケズリが施されている。内面の体部は磨滅しているが、底部付近は5条/cmのハケ目が観察される。法量は、残存高が20.1cm、底部が8.3cmである。残存状況は底部が完存しているものの、体部はごくわずかである。焼成は甘く、磨滅が認められる。色調は外面がぶい橙色、内面がぶい黄橙色である。

70はS T 2の西周溝から出土した壺である。

体部中位に張りをもち、ゆるやかにひらく頭部をもつ。口縁端部は下方に拡張して面をもっている。頭部上位に一部6条/cmの縦方向のハケ目が残り、頭部から体部上半にかけては10本単位の櫛描き直線文、体部中位には10本単位の櫛描き波状文を施している。体部中位には6条/cmの不定方向のハケ目、以下底部までは、下→上の縦方向のヘラケズリが観察される。口縁端部内面には9個単位の列点文が施されている。口縁部は内外面ともに横方向のナデで調整している。頭部以下の内面は磨滅のために観察不能である。法量は、口径が復元で18.5cm、器高が復元で32.4cm、腹径が復元で26.9cm、底部が復元で8.3cmである。残存状況は約1/2である。色調は外面が浅黄橙色、内面が橙色である。

S 1はS T 2から出土した石庖丁の破片である。長さ5.1cm、幅2.8cm、厚さ0.4cmの粘板岩製である。全体に磨滅しているが一部研磨痕がみられる。片刃である。

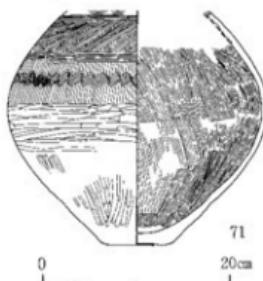
#### 土壤2 (SK 2)

B地区の北西部で検出された不整形の土壤である。規模は1.42m×1.31mで深さは19.0cmを測る。埋土は1層で黄褐色の極細砂～シルト質極細砂が堆積している。

遺物は土器が1点出土している。71は頭部から上を欠失している。外面は体部中位に5mmのやや幅の広い横方向のヘラケズリ、体部上半と下半には幅3mmの縦方向のヘラミガキを施す。その後、体部上半には、横方向の櫛描き直線文と斜格子文、波状文を施している。内面は7条/cmのハケ目が全体に観察される。法量は、残存高25.0cm、腹径は復元で27.8cm、底径は復元で7.8cmである。約1/2が残存している。



第30図 土壌2



第31図 出土遺物

## 第4節 第4次調査

### 1. 調査区の設定

本年度の調査は、第30回のとおりA～Dの4つの地区に分けて行った。各地区は通路や水路によって分断されているため、県道をはさんで計7つのブロックに分かれている。それぞれA-1地区、A-2地区、B地区、C-1地区、C-2地区、D-1地区、D-2地区と呼ぶこととする。

第1次調査において、A地区には第1～4トレンチが設定され、その内の第2トレンチから土壤・柱穴が見つかったことから、掘立柱建物跡の存在が予想されていた。B地区に設けられた第9トレンチからも土壤・柱穴が見つかっており、やはり掘立柱建物跡の存在が予想されていた。D地区は第22・23トレンチによって、他の地区と同様の堆積状況が確かめられ、また遺物の出土もみられた。この地区では第3次調査で見つかった方形周溝墓の延長の存在が期待された。C地区では確認調査は行われなかったものの、付近の状況から当然遺構面が続くものと判断された。

### 2. 層序

調査区内の土層は、各地区によって多少の相違はあるものの、基本的に次の5つの層序が認められる。第Ⅰ層は現耕土、第Ⅱ層は淡黄灰色砂質土、第Ⅲ層は黄褐色粘質土、第Ⅳ層は灰褐色砂質土、第Ⅴ層は砂礫である。

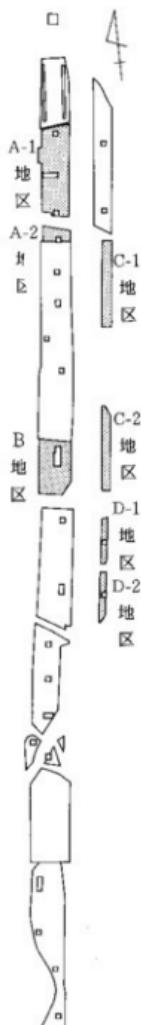
近世の遺構は耕土直下の第Ⅱ層上面から掘り込まれていたが、土壤化を受けていたため、遺構を検出したのは第Ⅲ層上面である。第Ⅲ層は中世～古墳時代の遺物包含層ともなっており、遺構はその下の第Ⅳ層上面で検出することができた。また同じ面で縄文時代晚期の遺構も検出した。

### 3. A地区的調査

A地区は農道をはさんでA-1地区とA-2地区に分かれている。A-1地区では上下2枚の遺構面について調査を行った。その結果、第1面では近世の集落、第2面では古墳時代の住居跡および縄文時代の遺構を検出した。一方、A-2地区ではA-1地区の第二面にあたる遺構面で、中世の遺構を検出した。

#### a. 第1面の遺構と遺物

A-1地区第1面の調査で検出した遺構には近世の溝・柵列・土壤のほか多数の柱穴がある。これらの遺構のはほとんどが、調査区の南端を通る溝(S D 1)およびその内側に並ぶ2本の柵列(S A 1・2)の北側に集中することから、この溝・柵列は集落の南限を示すものとみられる。



第32回  
第4次調査位置図

### 溝1 (SD 1)

調査区の西壁から入ってきた後、一度南へ屈曲してから、また45°折れ曲がって調査区の東南隅へ抜ける。幅約1m、深さ約35cmを測り、断面は逆台形を呈する。遺物は須恵器・土師器・施釉陶磁器の細片が出土している。

### 溝2～5 (SD 2～5)

いずれも幅20cm、深さ15cm程度の細くて浅い溝であり、方向性はSD 1に直交している。遺物は須恵器・土師器・丹波焼の細片が出土している。

### 柵列1・2 (SA 1・2)

東西方向の柵列が、SD 1の北側に2列平行に並んでおり、SA 1は4間分、柵列2は2間分が検出された。柱間は、1.4m～2.2mまでややばらつきがみられる。遺物は土師器の細片が出土したのみである。SA 2は第1次調査の2トレンチで、掘立柱建物跡と推定されていたものである。

### 土塙1～3 (SK 1～3)

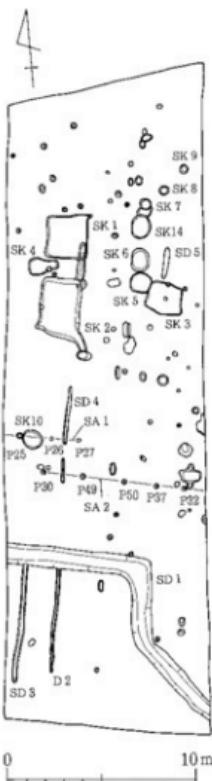
土壤の中に方形の輪郭をもったものが3基ある。

SK 1は南北2.3m、東西2.1mの矩形を呈し、深さ4cmを測る。遺物には備前焼の擂り鉢(76)がある。口径19.0cm、底径12.5cm、器高8.6cmを測り、内面に1単位11本のオロシメを施す。

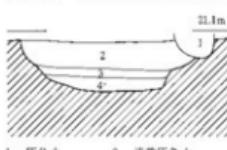
SK 2は南北3.1m、東西2.1mの長方形を呈し、深さ15cmを測る。埋土は灰色砂質土で、拳大の礫を多数含んでいる。掘り方の東南隅には幅40cmの溝が取り付き、約1m先に設けられた円形の穴に落とし込むようになっている。出土遺物には土師器・瓦片・砾石の他、ササ入りの焼土などがある。75は土師質の花瓶で、口縁部と裾部を欠失する。残存高15.8cm、胴部幅5.8cmを測る。胴部外面にはS字状のスタンプ紋が施される。

SK 3は南北1.6m、東西1.8mの矩形を呈し、深さ6cmを測る。遺物には備前焼の擂り鉢(77)がある。底径13.0cmを測り、内面に1単位7本のオロシメを施す。

以上の遺構・遺物の年代は、擂り鉢(76)が備前V期にあたるところから、16世紀初頭から中頃に押さええることができる。他の遺物についても、ほぼこれと矛盾しないものである。



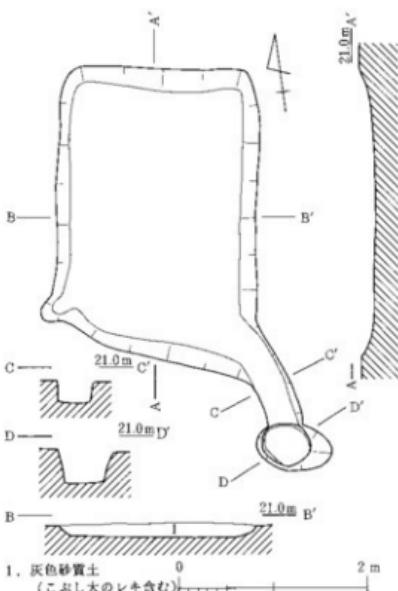
第33図 A-1地区第1面全体図



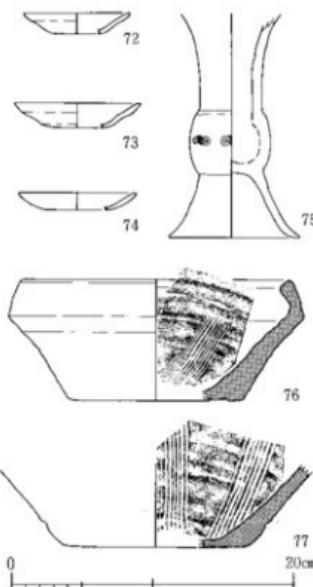
1. 灰色土 2. 淡黄灰色土  
3. 黄褐色細砂 4. 黑灰色細砂～細砂



第34図 溝断面図



第35図 土壌2



第36図 A-1地区第1面出土遺物

#### b. 第2面の遺構と遺物

A-1地区では、古墳時代後期の竪穴住居跡2軒を検出した。地形は住居跡から北へ向かって緩やかに下がり、そこに堆積した砂層が古墳時代後期の遺物包含層となっている。また他に縄文時代晩期の土壌1基を検出した。A-2地区では、中世の土壌状の落ち込みを検出した。

さらに調査の最終段階に、重機による断ち割り調査を行った。その結果、第2遺構面以下の層位は、細砂～中疊からなる砂疊層となっており、かつては層状地性の堆積物によって起伏に富んだ地形を呈していたことが窺える。

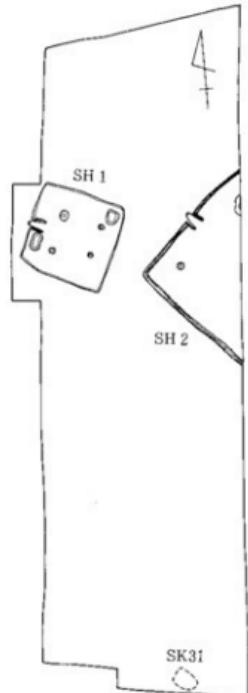
#### 土壌13（SK13）

土壌13は第2次調査A地区北端の凹地の続きで、両者を併せた規模は南北約8m、深さ約35cmになる。その性格は旧河道の埋まりきれなかった箇所と考えられる。遺物は須恵器と土師器の細片が出土したのみで、平安時代末頃に埋没したものと考えられる。

#### 竪穴住居跡1（SH1）

平面矩形で、規模は一辺4.7m、現存の深さ20cm、平面積約22m<sup>2</sup>を測る。主柱穴は4本で、直径30～50cm、深さ20～28cmを測る。周壁溝は部分的に認められる程度である。主軸はN66°

Wで、北西側の壁のほぼ中央に造り付けのカマドを設けている。



カマドは残存長103cm、焚口の幅63cm、最大の深さ30cmを測り、内壁は熱を受けて、焚口付近を中心に赤化している。カマドの下層には打ち削られた台石(S3)、須恵器杯身(83)、土師器などが意識に入れ込められ、さらに台石の破片の上には須恵器の杯蓋(80)や高杯(86)が伏せて置かれるなど、カマドの廃棄に伴う祭祀の様子が窺われる。

この他、カマドの左脇と住居の東隣に、それぞれ貯蔵穴らしい土壤が設けられている。またカマドの反対側の壁際には、大きめの台石(S2)が使用面を下に向かって置かれていた。

出土遺物には須恵器杯蓋(78~82)・杯身(83~85)・高杯(86~88)、土師器甕、台石(S2・S3)などがある。須恵器杯蓋のうち78はやや大きめで、口径15.3cm、器高5.1cm、79~82は口径14.1~14.6cm、器高3.8~4.5cmを測る。86・87は高杯の杯部で、いずれも口径13.4cm、杯部高4.8cmを測り、脚部には三方に透かしをもつ。88は高杯の脚部で、三方に透かしをもつ。台石S2は大きさが29.3×20.4cm、厚さ10.6cmを測る。台石S3は10枚に割られていたが、24.1×11.9cm、厚さ4.3cmの大きさに復元できた。いずれも使用面には、金属によると思われる多数の擦痕が認められる。

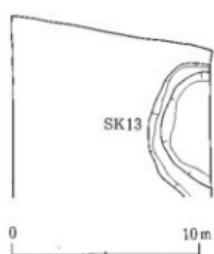
#### 堅穴住居跡2(SH2)

全体の堅弱を調査した結果、平面矩形で4本柱をもち、一辺の長さは8m余りになるとみられる。遺構の残りは悪く、検出面からの深さは僅かに4cmに過ぎない。主軸はN44°Wで、北西側の壁に造り付けのカマドを設けている。

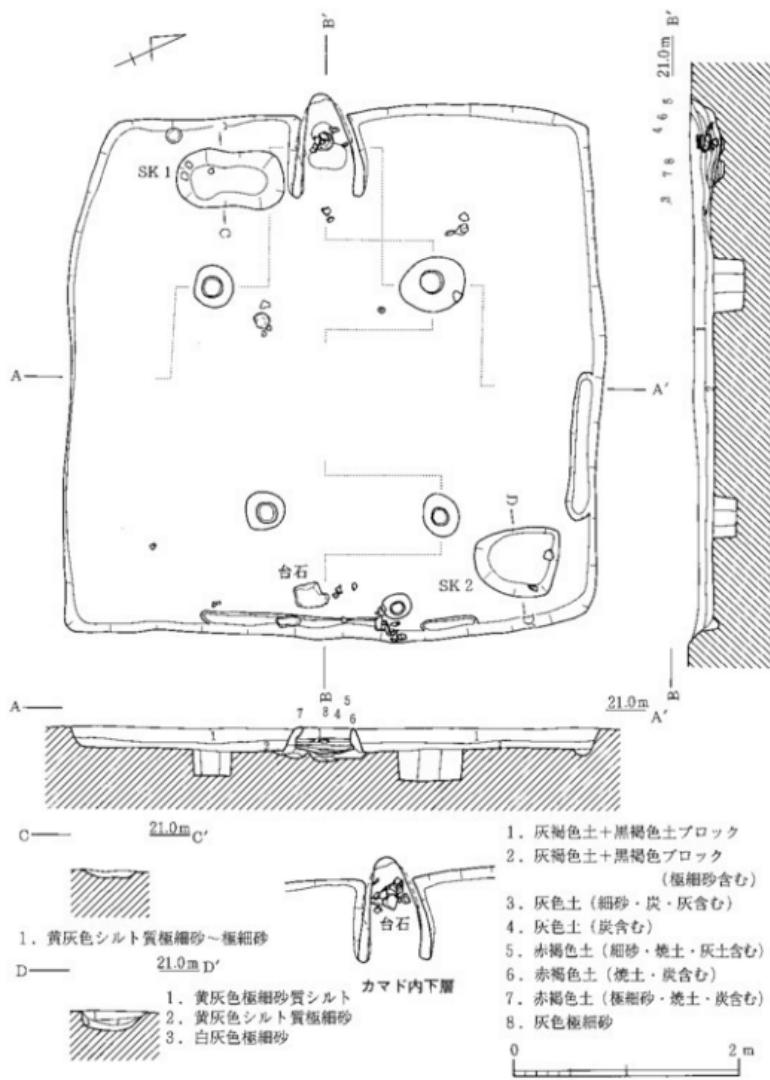
カマドは、残存長103cm、焚口の幅74cm、最大の深さ12cmを測り、熱を受けて、全体に赤っぽく発色している。

出土遺物には須恵器杯蓋(89・90)・杯身(91)・甕などがある。89はやや大ぶりな蓋で、口径15.4cmを測る。天井部にカキメを施してあるのが特徴的である。91はカマド内から出土で、口径12.3cm、器高4.8cmを測る。

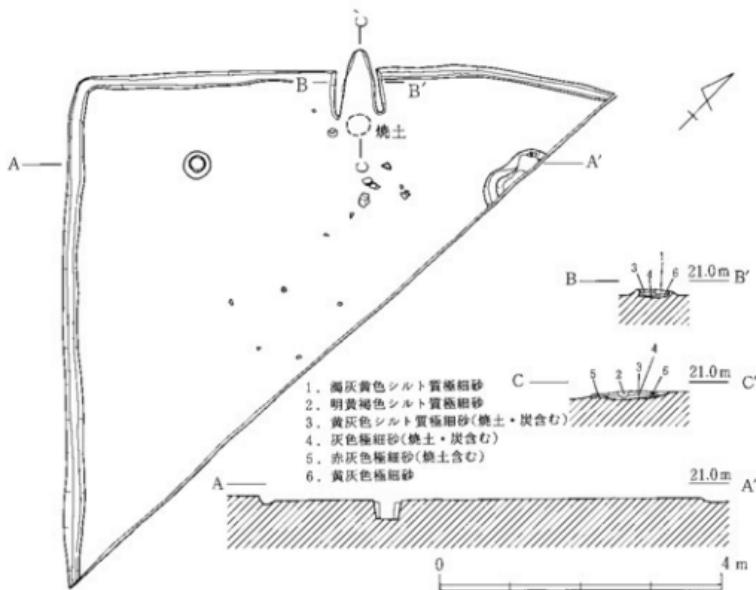
2軒の住居跡の年代はほぼ同じで、6世紀後葉である。



第37図 A地区第2面全体図



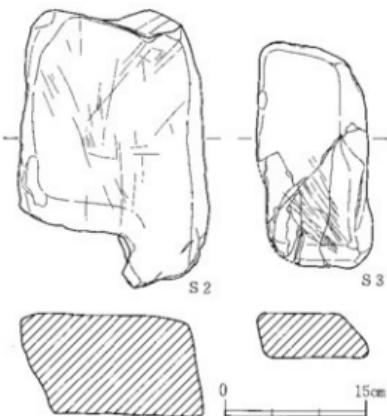
第38図 穴住居跡 1



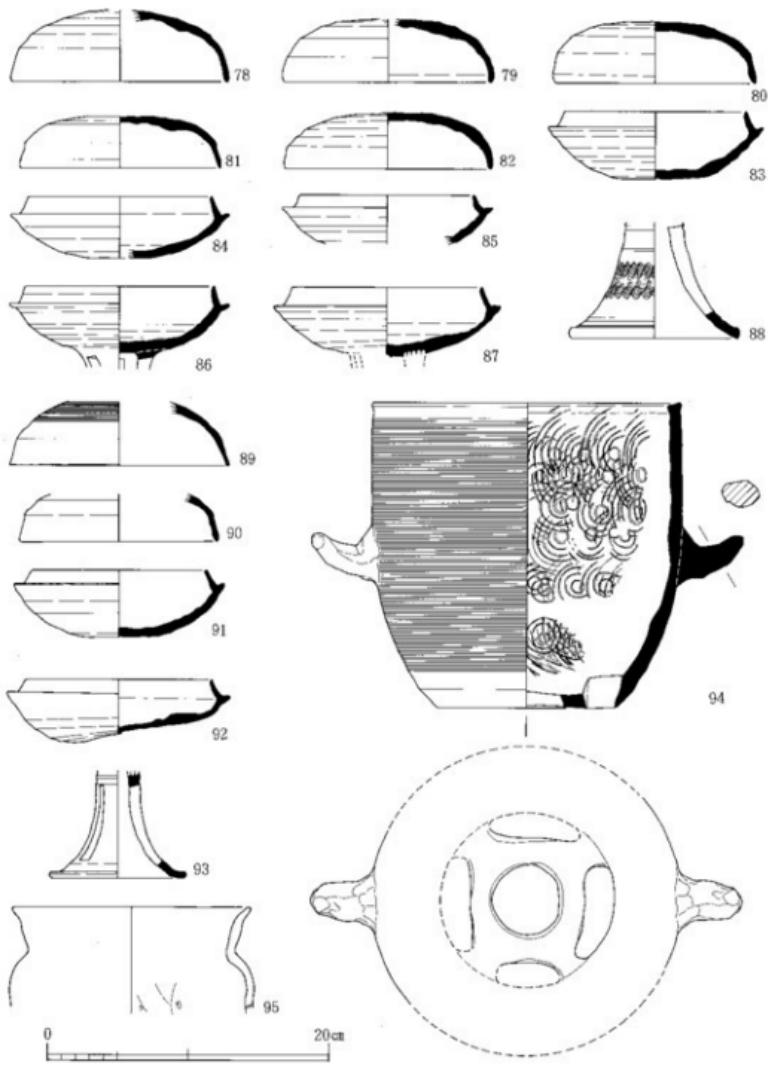
第39図 竪穴住居跡 2

#### 包含層出土の遺物

須恵器杯身（92）・高杯（93）・瓶（94）、土師器壺（95）を図示した。92は完形で、やや焼け歪んでいる。口径13.1cm、器高4.5cmで、底部内面には同心円タタキがスタンプされている。94は須恵質の瓶である。体部はバケツ形を呈し、体部下端をヘラケズリで調整する。底部には5つの穴が穿たれる。口唇部は半らな面をもち、ヨコナデで仕上げる。外面はカキメで調整し、内面には同心円タタキが残る。焼成はやや甘く、灰白色～黄灰色を呈する。口径21.8cm、底径12.6cm、器高21.6cmを測る。遺物の年代は、住居跡に併行するものと考えられる。



第40図 竪穴住居跡 1 出土石器

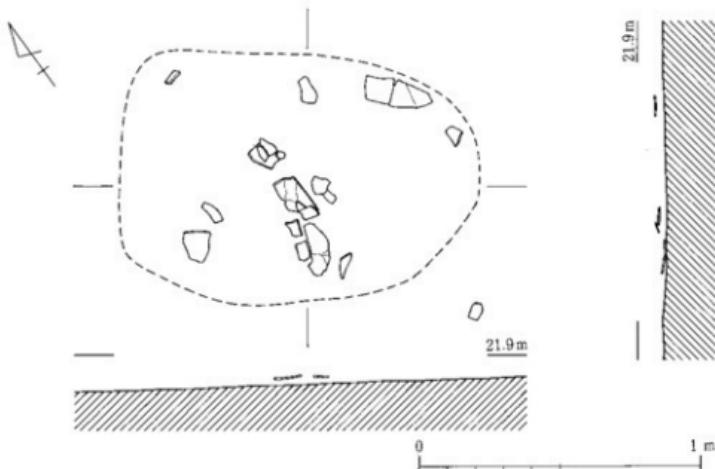


第41图 A-1地区第2面出土遗物

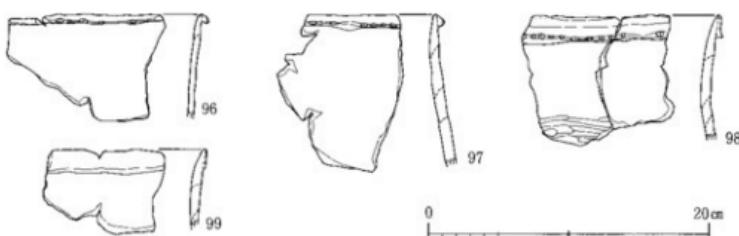
### 土壤31 (SK31)

A-1地区の南東隅で、縄文時代晩期の土器が集中して出土したため、調査区を南側へ一部拡張してその広がりを確認した。精査の結果、土壠状の落ち込みは認められなかったものの、およそ $120 \times 80\text{cm}$ の範囲に土器が集中していた。この状況から見て、おそらくは合わせ口土器棺のような遺構のほとんどが削平されて、底面の土器が若干残存していたものと想定できる。

出土した土器は、4個体分の深鉢である。96・97は口縁部外面に断面△形の突帯をめぐらし、O字のキザミメを施す。胎土には角閃石や金雲母を多量に含み、黒褐色を呈する。口径38~44cm程度に復元できる。98・99は口縁部外面にL形の突帯を垂らす。98はO字のキザミメをもち、



第42図 土壠31



第43図 土壠31出土遺物

外面にヨコ方向のミガキ調整を施す。99は磨滅のため不明である。胎土には僅かに角閃石を含むが、金雲母は含まず、石英粒が目立つ。灰黄褐色を呈する。口径26~28cm程度に復元できる。他に体部の破片があるが、肩部突帯をもつものは無い。土器の年代は、長原式の範疇に属する。

#### 4. B地区の調査

B地区では第IV層上面で中世の柵列・土壤・柱穴などを検出した。また断ち割り調査の際、調査区の東南隅に北東から南北に向かう旧河道の落ちを検出した。埋土の下層では有機物を含んだシルトと砂が互層をなして堆積しており、中層以上には数面の水田面が認められた。水田を覆う洪水砂からは、弥生土器の細片が出土している。この落ちは中世になんでも埋まりきらずに、大きな凹地（SK1）となって残存していた。

##### 柵列1（SA1）

北北東から南南西方向に4間分の柱穴の並びを検出した。1間の間隔は2.1cm~2.2cmを測る。

##### 土壤1~7（SK1~7）

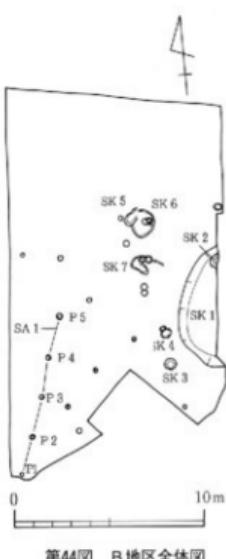
SK1は前述したように旧河道の埋まり残しとみられるもので、南北6.3m、深さ10cmを測る。出土した瓦器碗（100）は、口径15.7cm、底径6.1cmを測る。

SK4は円形を呈し、径50cm、深さ15cmを測る。土壤内からは、炭や焼土塊が出土した。遺物には瓦器碗（101）、土師器甕（102）がある。101は口径13.8cm、底径5.7cm、器高5.7cm、102は口径12.7cmを測る。

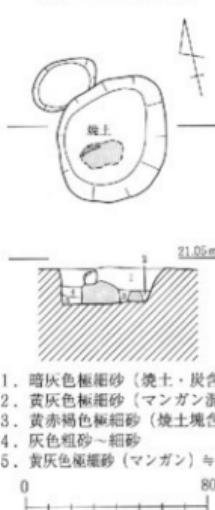
またSK5~7は第1次調査の9トレンチで検出されていたもので、瓦器碗（25~29・40~42）、土師器小皿（18~21・24・32~39）などが出土している。

##### 包含層出土の遺物

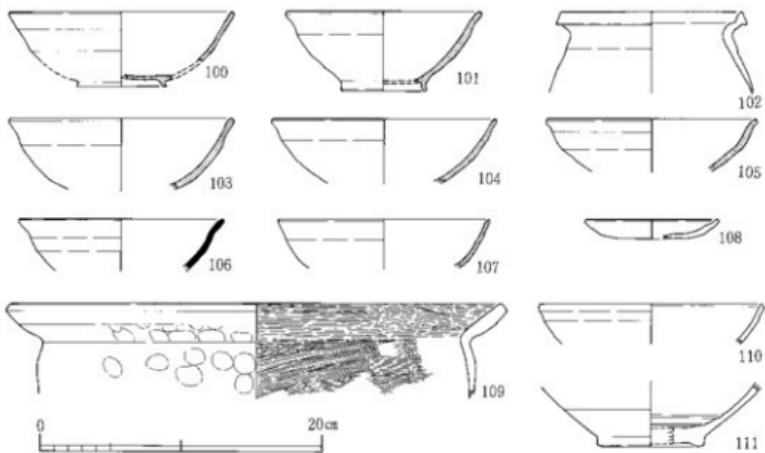
この他、第2~4層中より、瓦器碗（103~105・107）、須恵器碗（106）、土師器小皿（108）・甕（109）、白磁碗（110・111）などが出土している。103~105・107は口径14.7~15.7cmで、器面の残りが悪く、調整は観察できない。108は手捏ねの小皿で、口径9.3cm、器高1.4cmである。109は口径34.6cmを測る。内面は



第44図 B地区全体図



第45図 土壌4



第46図 B地区出土遺物

ハケメ調整を施し、外面には指頭圧痕を残す。110は玉縁状の口縁部で、口径15.7cmを測る。白磁II類に属する。111は削り出し高台をもち、内面および外面上半部に釉を施す。底径7.6cmを測る。白磁IV類に属する。

以上の遺物からみて、B地区的遺構・遺物の年代は12世紀前半～中頃と考えられる。

#### 5. C地区の調査

C地区は間に工場の入口があるため、C-1地区とC-2地区に分けて調査を行った。調査の結果、どちらの調査区においても第Ⅱ・Ⅲ層から中世～古墳時代の遺物が出土したが、顕著な遺構は認められなかった。

#### 6. D地区の調査

D地区は市道をはさんでD-1地区とD-2地区に分かれている。この地区では第3次調査で見つかった方形周溝墓の延長の存在が期待された。調査の結果は、第Ⅱ・Ⅲ層から中世～古墳時代の遺物が出土し、第Ⅲ層上面で小溝数本が見つかったのみで、方形周溝墓はここまで続いてこないことが判明した。

## 第5節 第5次調査

### 1. 調査区の設定

本年度の調査は、第4次調査区の北に隣接した地点から最明寺川までの、畠地2面分と工場前の駐車場を対象とした（第47図）。

まず、遺跡の北への拡がりを確認するため、畠地部に道路と平行したトレレンチ2本（1m×22m・1m×23m）と、駐車場（北地区）に坪1箇所（4m×4m）を設定した。

確認調査では、第1・2トレレンチにおいて中世の土壌・柱穴・井戸および古墳時代の堅穴住居跡等の遺構を検出した。一方、北地区の坪では遺構面を検出できなかった。

この結果、遺跡の北限はトレレンチ設定の畠地部までであることが明らかとなり、現河道に近い北地区には遺構は存在しないと考えられた。そこで、畠地部までを調査の対象地とし、

引き続き全面調査を行った。

### 2. 層序

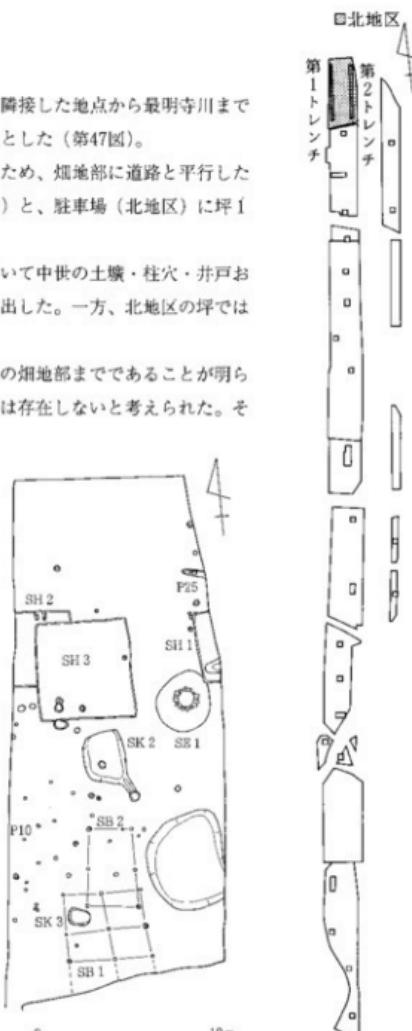
調査区内の堆積土層は、基本的に4つに分層できる。第I層は耕作土、第II層は黄褐色床土、第III層は茶灰色砂質土、次いで第IV層は黄灰色砂質土ベースとなる。

中世の遺構は第III層の上面で検出した。第III層は古墳時代の遺物包含層であるが、あまり堆積はない。次いで、第IV層上面において古墳時代の遺構を検出している。

### 3. 調査概要

全面調査で発見した遺構は、室町時代後期の土壌2基、平安時代末～鎌倉時代の井戸1基と掘立柱建物跡2棟、古墳時代後期の堅穴住居跡である。

以下、時代ごとに主な遺構と遺物について説明する。



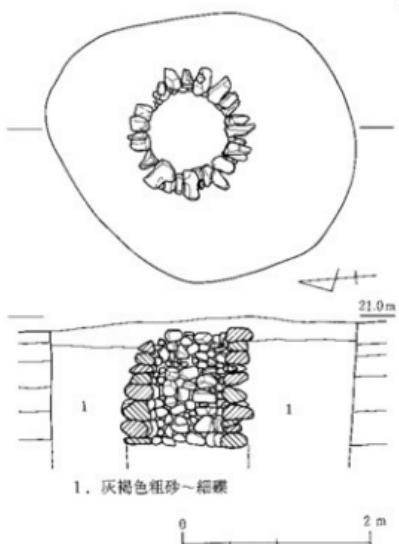
第47図 調査区全体図

### 土壤2 (SK2)

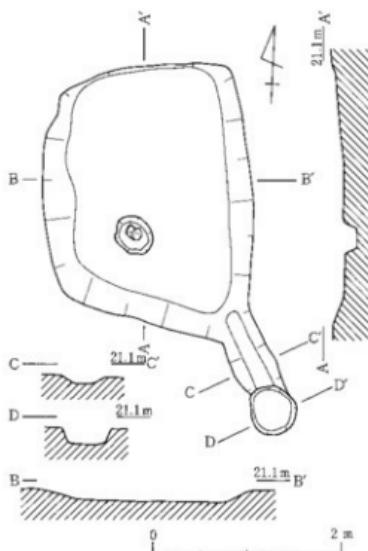
この遺構は、今回調査地のほぼ中央部に位置する。

平面形は、南北約2.80mと東西約2.20mの長方形で、その東南角に長さ約1mと幅約40cmの溝をもち、さらにその先に径約50cmの円形の穴が取りつく特異な形態を呈する。深さは、長方形部が約10cm、溝部も約10cm、円形の穴部が約20cmを測る。埋土は灰褐色土で、長方形部に拳大の礫を多數含んでいた。

遺物は出土していないが、調査区が隣接している第2・4次調査でも同様の遺構を検出していることから、おそらく室町時代後期頃の、同性格の遺構と考えられる。



第50図 井戸1



第49図 土壌2

### 井戸1 (SE1)

井戸1は、土壌2の北東約5mに位置する河原石組井戸である。

掘方は梢円形を呈し、長軸約3.30m、短軸約2.80mを測る。裏込めは砂利混じり土である。井戸底は、断割りの結果、確認面からの深さが約2.90mであった。

井側の最下部は丸太材を井桁に組み、その上に長さ20~30cmの自然石をほぼ垂直に積み上げている。井側に使用した河原石の上部は破壊され、井戸内に落ち込でていた。石組内径は84cmである。

遺物は出土していないが、第8次調査の井戸と酷似するため、平安時代末~鎌倉時代の所産と考えておく。

### 掘立柱建物跡 1 (SB 1)

調査区の南部に位置する建物跡である。

梁間 2 間、桁行は現状で 2 間の総柱であり、南にもう 1 間分拓がる可能性が高い。棟方位は N 4° W である。

柱心々間は北梁間約 2.10m、桁行は約 2.10m と約 1.50m を測り、掘方の規模は径約 15~20cm、深さ約 10~15cm である。

埋土は、茶褐色砂質土。

### 掘立柱建物跡 2 (SB 2)

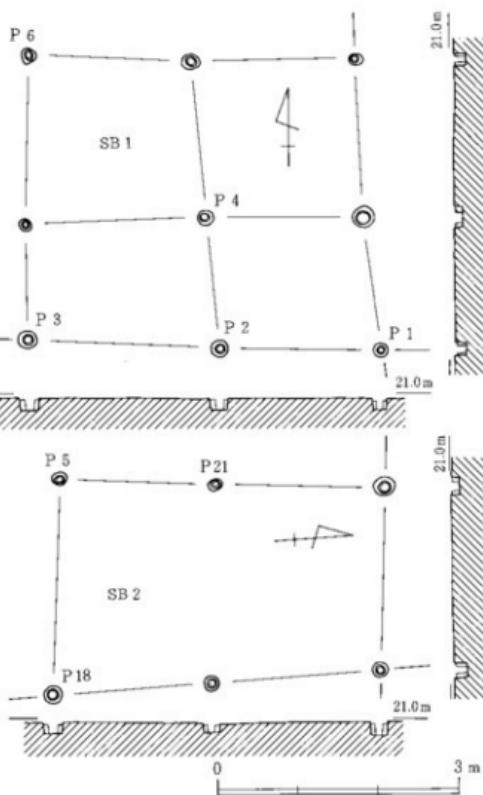
SB 1 の北に位置し、南の身舎が一部重複する。

梁間 1 間、桁行 2 間で、棟方位は N 6° E である。

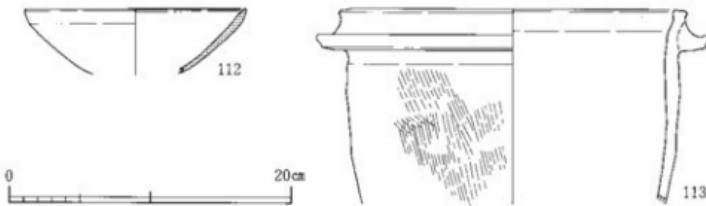
柱心々間は北梁間約 2.40m、桁行は約 2.10m を測る。掘方の規模は SB 1 と同様である。

#### 出土遺物

建物に伴う遺物はないが、同埋土のピットに瓦器碗(112)と土師器羽釜(113)がある。



第51図 掘立柱建物跡 1・2



第52図 柱穴内の遺物

### 豎穴住居跡 1 (S H 1)

調査区の北半部で検出した住居跡である。大半は現道路下にあり、西端の一部を検出いただけである。床面の標高は20.86mを測る。

平面形態は方形を呈し、調査部の規模は南北約3.90m、東西1.10mである。壁高は最大値10cmを測り、床面には部分的に壁溝を確認している。

また、南西側に楕円形を呈する土壙の一部を検出した。規模は現状で長軸50cm、短軸50cmである。調査範囲内では、柱穴を確認できなかった。

出土遺物には、土師器甕(117)がある。年代は、この遺物から6世紀後葉と考えている。

### 豎穴住居跡 2 (S H 2)

本住居跡は、豎穴式住居跡1とは約7.00mの距離を隔てている。

平面形態は西端部が調査区外のため、竈部を北辺の中央と考え復元すると、南北約3.90m、東西約3.60m（現状値3.00m）の方形を呈する。残存壁高は最大値10cmであり、床面には部分的に壁溝を確認したが、柱穴は見つからなかった。床面の標高は20.84mを測る。

北壁には、東端から約1.80mの位置に造り付けの竈がある。竈の規模は、焚口部幅約40cmと奥行き約60cmを測り、残存高は袖部で約10cmである。竈内には、灰層と若干の土師器片がある。

出土遺物には、土師器と須恵器片がある。年代は、これら遺物から6世紀後葉と考える。

### 豎穴住居跡 3 (S H 3)

豎穴住居跡2を切る関係にあり、今回調査したなかでは最も大きな住居跡である。床面の標高は20.78mを測る。

平面形態は方形を呈し、規模は南北約5.30m、東西約5.10mを測る。壁高は最大値18cmであり、周壁溝は確認できなかった。その他、付属の遺構も認められない。

柱穴は、南西部に1ヶ所（径35cm・深さ20cm）の掘り込みを検出ただけである。

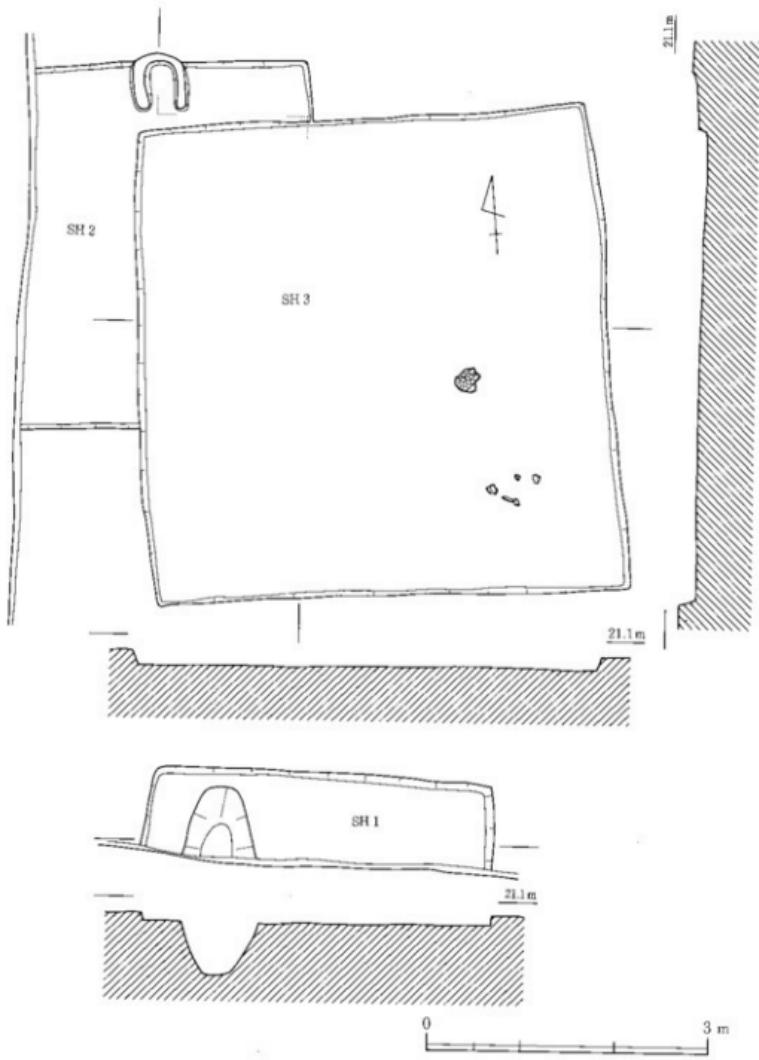
出土遺物には、須恵器杯蓋(114・115)、土師器甕(116)・甕(118)などがある。115は天井部と口縁部を分ける四線が残る。口径14.6cm。116は内湾しながら延びる甕の上半部である。口径20.6cm。118は長胴形の甕の体部である。最大部の径は24.4cm、高さ34.8cmを測り、内外面ともハケメ調整を施す。年代は、これら遺物から6世紀後葉と考える。

### 包含層出土遺物 (119 ~127)

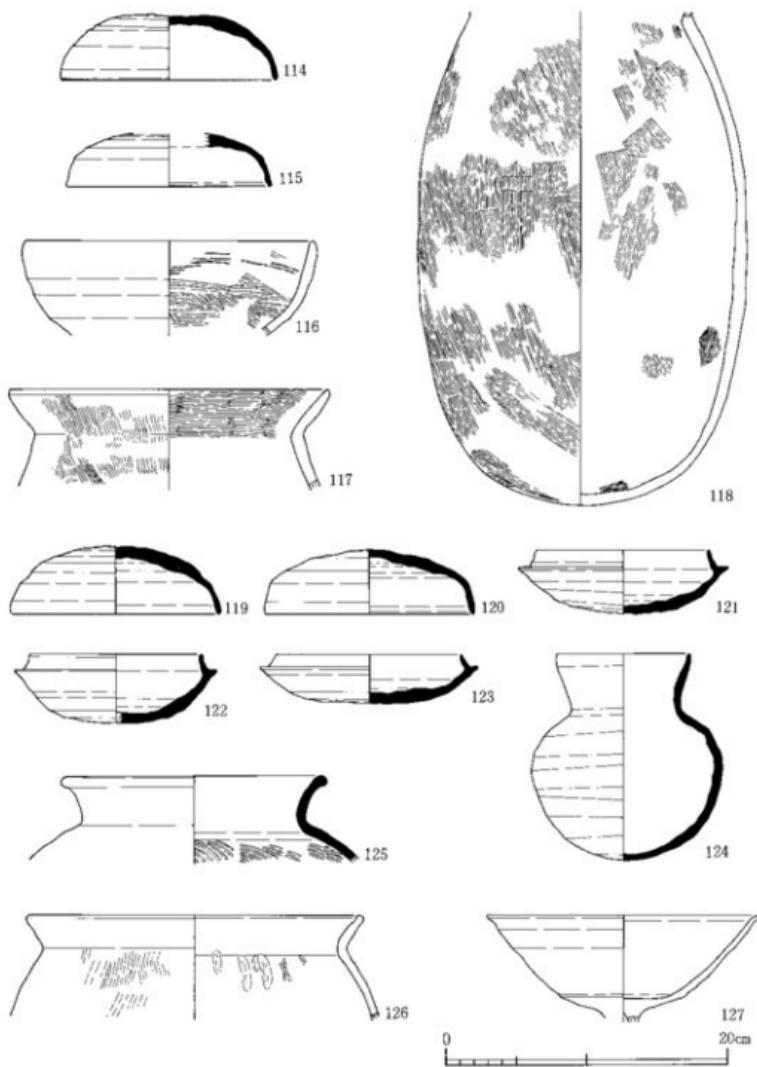
須恵器杯蓋(119・120)・杯身(121~123)・短頸甕(124)・甕(125)、土師器甕(126)・高杯(127)等がある。

119は天井部と口縁部の境界に浅く広いくぼみをもち、120は天井部と口縁部の境界に鈍い稜をつくる。杯身はたちあがりが低く、内傾の度合いが大きい。

126はくの字状口縁部をもち、口縁端部を肥厚させ丸くおさめる。127は杯部のみであるが、底部と体部の境に稜と段をもち、口縁部はつまみだすように外反させる。



第53図 穴住居跡 1～3



第54図 古墳時代の遺物

## 第6節 第6次調査

### 1. 調査区の設定

第6次調査区は、第3次調査区の南側に位置している。調査区は小河川および水路により4分割されているため、各小地区をA～D区と呼称している。A・B・D区は小河川の左岸に、C区のみ右岸に位置し第3次調査区に南接している。

本調査区は第1次調査時には大半が未買収地であったため、B地区に15トレンチが設定されたのみであった。15トレンチでは、遺構は検出されなかつたものの、本調査区に南接する位置に設定された16トレンチでは鎌倉時代の井戸等が検出されていることから本調査区内にも当然遺構面が続くものと予想された。

### 2. 調査区の地形

調査区は、大きく微高地と低地の2つに分けることができる。このうち、A・B区は微高地に立地する。この微高地は南に接する第8次調査区へ統き、さらに本調査区の東側へも延びていくものとみられる。また、この微高地の縁辺がA区北西隅からB区西端にかけて検出されている。B区は西へ緩やかな傾斜をもち、西端は小河川により微高地縁辺が浸食され、崖状を呈している。第6次調査で検出した遺構はすべてこの微高地上に位置している。

C・D区は微高地をはずれ、氾濫原にあたっているとみられる。D区は砂層によって構成され、A・B区の微高地上で遺構面を構成していたようなシルト層は全く認められなかった。

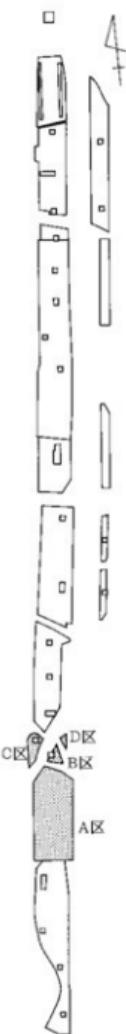
C区は東端および南半で部分的な粗砂・細砾の堆積と浸食によるとみられる凹地が認められる。ここは小河川の影響を受けしばしば流水にさらされていたものと考えられる。C区北半ではベースが次第に上がり気味となり、A・B区とは別の微高地の裾に相当するものとみられる。ここで柱穴を1個検出したが、遺構の広がり、所属時期、性格等の詳細は不明であった。

### 3. 調査の概要

遺構はA・B地区に疎らに分布している。検出された遺構の大半は中世に属するとみられるが、同一遺構面で弥生時代中期と推定される土壙を検出している。

#### a. 中世の遺構と遺物

検出された遺構は、柱穴・土壙・溝である。



第55図  
第6次調査位置図

### 柱穴群

柱穴は調査区の東南隅に集中しており、合計15個検出した。規模は、径10~40cm、深さ10cm程度である。掘立柱建物・柵列等を復元することはできなかったが、さらに調査区の東側へ広がっている可能性が考えられる。なお柱穴内から遺物は出土しなかった。

### 土壙

土壙はA区で2基、B区で1基検出している。平面形が梢円を呈し、深さ8~10cm程度である。この3基は比較的近接して位置していることから、密接に関連しているとみられる。土壙から遺物は出土していないが遺物の出土した他の遺構の時期が中世であることから、これらも同様に中世に属している可能性が高い。ただし、土壙2（SK2）が溝1を切っていること、また土壙3（SK3）は低地が埋没していく過程で掘り込まれていることから、両者はある程度の時期幅を想定することができる。

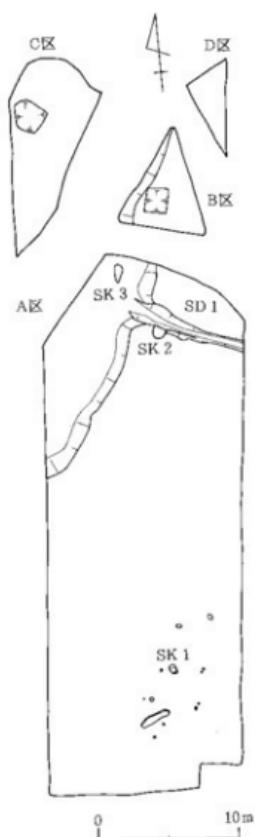
B区では調査区南壁断面で土壙を確認した。径60cm、深さ20cmを測る。ただし、遺構は調査区外へ続いているため断面観察にとどまった。埋土内に土師器小皿(128)等を包含していた。

### 溝（SD1）

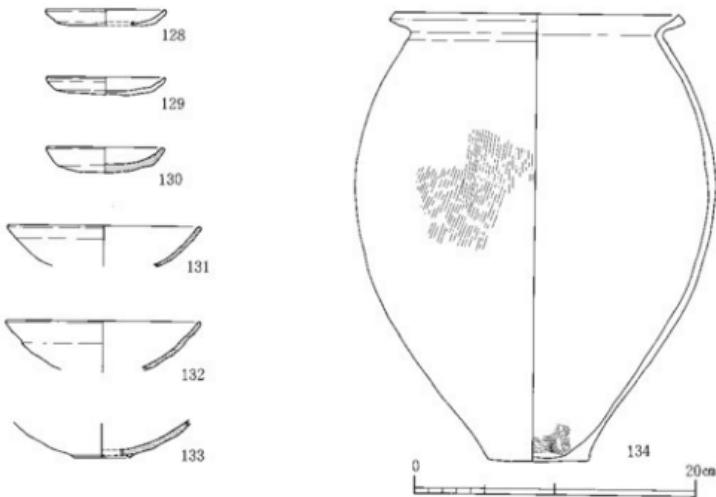
調査区東北隅で検出した。検出長8.2m、幅0.7~1.2m、深さ15~33cmを測り、東西にはば直線的に延びている。東端は調査区外へ続き、西側は微高地縁辺で消滅する。

溝内からは土師器・瓦器を中心に比較的多くの遺物が出土している。

土師器小皿(129)は口縁部が外反して立ち上がり、端部はわずかに内彎し、丸みをもって終わる。底部は未調整である。瓦器小皿(130)は口縁部がゆるやかに外反し、端部は丸みをもって終わる。瓦器碗(131~133)は体部外面は未調整、口縁部に横ナデを施している。高台は粘土紐貼付によって作り出されており、断面は逆三角形を呈している。内面は磨滅しているため暗文等確認できない。



第56図 調査区全体図



第57図 A・B地区出土遺物

b. 弥生時代の遺構と遺物

A区遺構検出面上で壺片が1個体分出土し、それと重複するように土壙1(SK1)を検出した。平面が指円形を呈し、長径70cm、短径55cm、深さ10cmを測る。この土壙から他の遺物は出土しなかったため断定できないが、上面で出土した壺がこの土壙に伴うとするならば弥生時代中期に属する可能性が高い。その他、第6次調査区内で同時期の遺構・遺物は全く認められなかった。

壺(134)は口径20.1cm、器高31.4cmを測る。体部から「く」字状に屈曲する口縁部をもち、端部は肥厚しつつ、上方にわずかにつまみ上げて收まる。体部は全面にわたり磨滅しているが、体部中ほどに刷毛目調整、下半に縱方向のケズリが認められる。

## 第7節 第7次調査

### 1. 調査区の設定

第7次調査を実施した地点は、第8次調査区の南側約30mの地点である。本調査区は、第1次調査の際未買収地であったため調査できず、その後も調査が行われていなかったため、地下の状況が把握されていなかった。そこで西宮土木事務所の直接執行でトレンチによる確認調査を実施した。

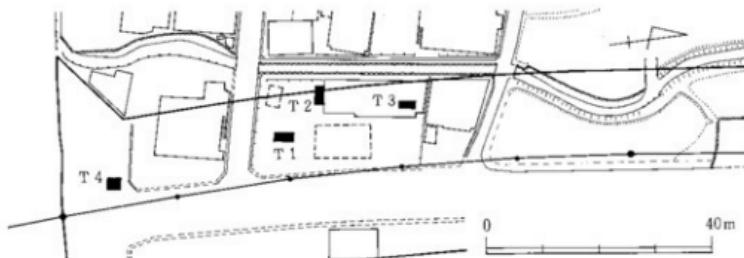
調査地点は、ガソリンスタンド跡地のため貯蔵タンクによる攪乱が地下深くまで及んでいることが予想された。そこでトレンチ1～3は攪乱の及んでいないと思われる敷地の隅3か所に設定した。また、遺跡の広がりを確認するため、事業対象地南端の国道176号線との交差点の北西隅にトレンチ4を設定した。

### 2. 調査の概要

トレンチ1～3はいずれも3m程掘削を行ったが、攪乱が地下深くまで達しており、安定した層序をなす層はほとんど存在しなかった。ただ、トレンチ3のみ現地表から約1m下で旧水田面とみられる層を確認したが以下砂礫層が続き、第8次調査区以北で遺構面を構成していたような層は確認できなかった。

トレンチ4は設定箇所が狭くしかも盛土が叩き締められており、掘削は不可能と判断し中止した。ちょうど調査時に隣接地で掘削工事を行っており、その断面を観察したところ、地表以下砂礫層が読いており、トレンチ1～3の成果とあわせるとトレンチ4も同様に砂礫層が厚く堆積しているとみられ、遺構面を構成するような層の堆積はないものと判断した。

なお、第7次調査区から遺物の出土はみられなかった。



第58図 第7次調査位置図

## 第8節 第8次調査

### 1. 調査区の設定

第8次調査区は第6次調査区に南接している。本調査区については調査区が分断されることがなかったため、小地区割りは行っていない。

本調査区内には第1次調査において、16~19トレンチが設定されている。このうち、16トレンチでは鎌倉時代の井戸および古墳時代の包含層が確認されている。また、17・18トレンチでは平安時代の遺物を含む溝が検出されており、本調査区の全域にわたり遺構面が広がっていることが予想された。

### 2. 調査区の地形

第8次調査区は大きく微高地と氾濫原で構成されている。微高地は調査区北半に位置しており、ほぼ調査区の北西端付近から東端中央付近にかけて斜めに検出され、上面は北東から南西に傾斜をもっている。こうした状況からみて、この微高地はさらに東あるいは南東方向に広がっているものとみられる。なお、微高地と低地の比高差は約90cmである。

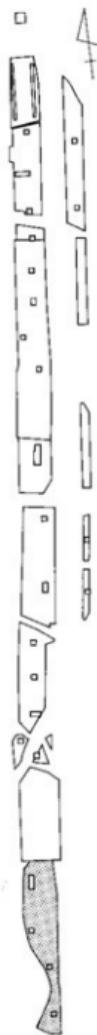
微高地上では弥生中期・平安～鎌倉時代の遺構を一面で検出している。微高地上の基本層序は、I層盛土 II層旧耕土 III層床土 IV層黄褐色シルト層であり、遺構面の大部分を構成しているのは第IV層の黄褐色シルト層である。また、微高地の西端は遺構面構成土が黄褐色シルト層から暗灰色シルト層に乗り変わっている。この暗灰色シルト層は断面観察によると旧河道状落ち込みの最終埋土とみられ、弥生土器・古墳時代土師器を包含している。

調査区南半から北西隅にかけては、微高地から下がった低地で、現表土以下黄褐色系の床土と灰褐色系の旧耕土が互層となり、以下は旧河道状となって砂礫が厚く堆積している。低地では中世の遺物を包含する自然流路を検出した他、少量の遺物の出土をみたが遺構は検出されなかった。

### 3. 調査の結果

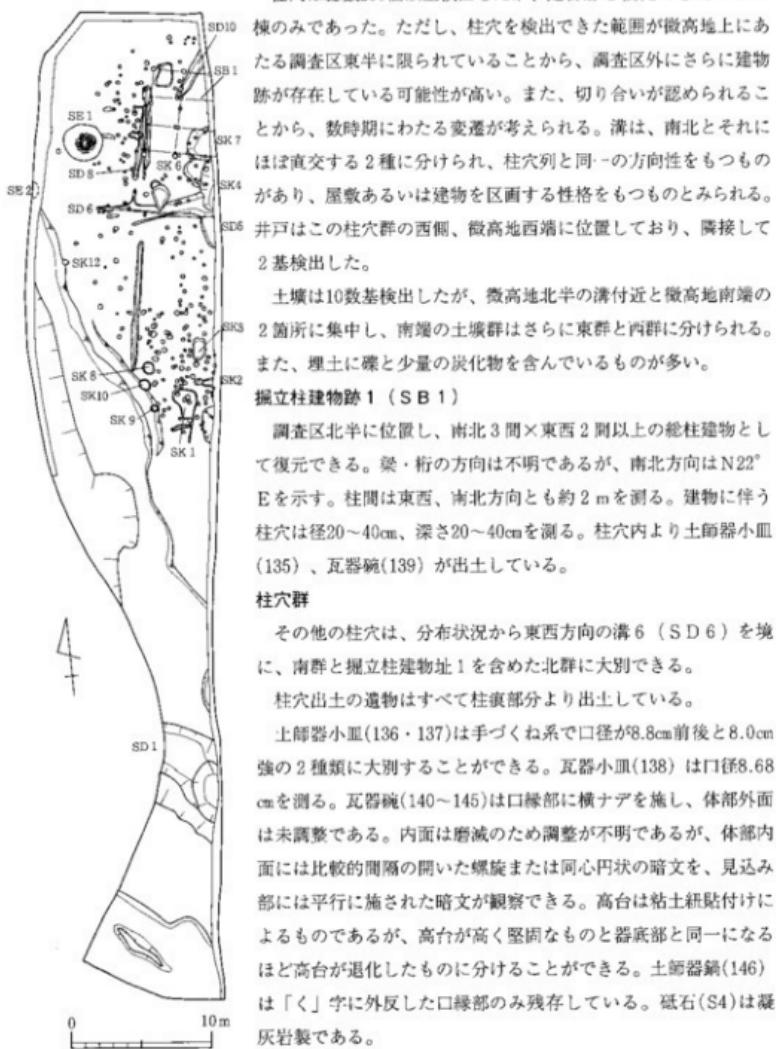
#### a. 中世の遺構と遺物

中世に属する遺構は掘立柱建物址・井戸・土壙・溝等があり、すべて微高地上に位置している。また、これらの遺構とほぼ同時期に存続したとみられる自然流路を低地で検出している。出土遺物から遺構の時期は12世紀後半～13世紀と推定される。

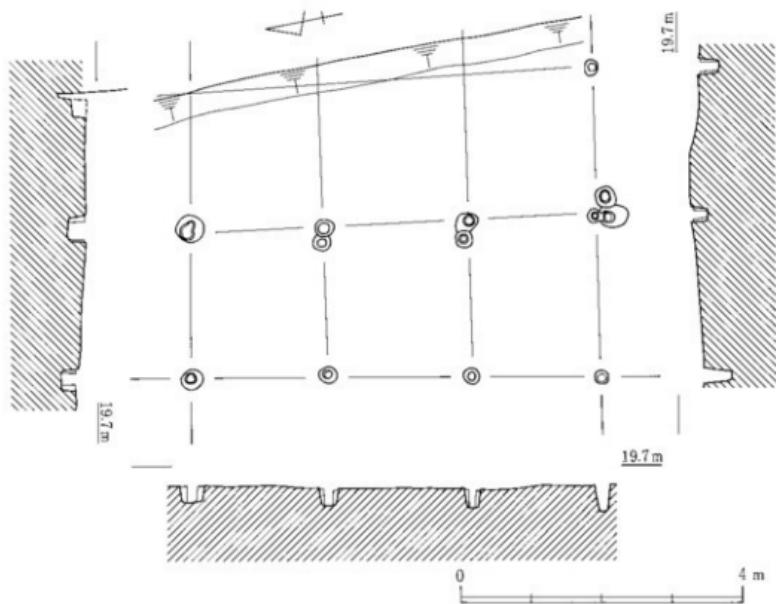


第59図  
第8次調査位置図

柱穴は総数200個以上検出したが、建物跡を復元できたのは1



第60図 調査区全体図



第61図 掘立柱建物跡1

#### 溝6 (SD 6)

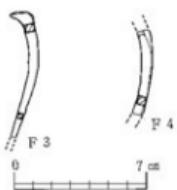
微高地上中央付近に位置する東西方向の溝である。最大幅1.6m深さ24cmを測り、西端は次第に幅を減じて消滅し、東端は溝4に切られている。溝6は本調査区内では最大規模であり、他の遺構との関係から屋敷地あるいは建物を区画する性格のものとみられる。

#### 溝4 (SD 4)

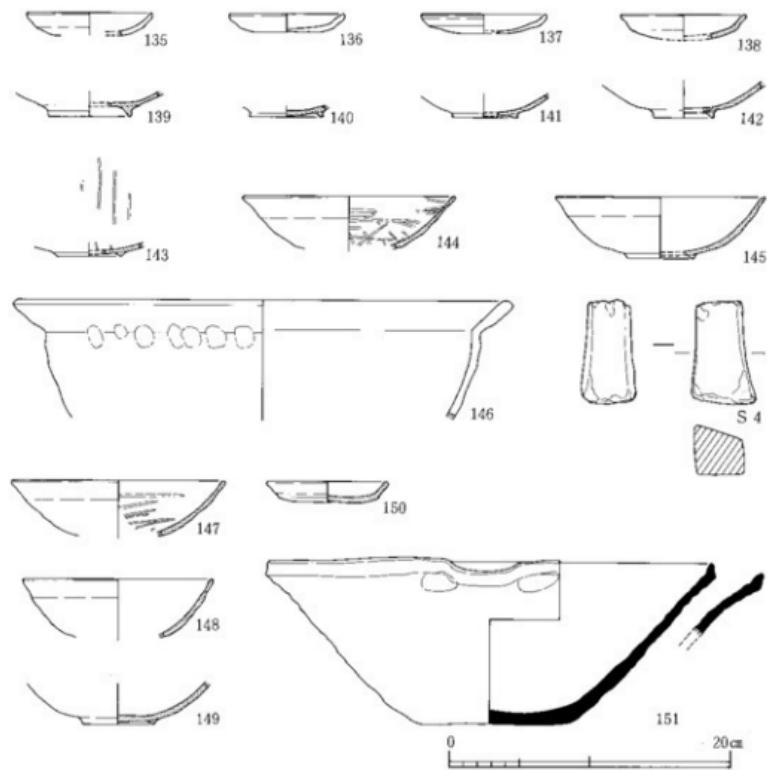
調査区端で一部を検出したのみで規模や性格は明らかではない。溝4からは鉄釘(F3・F4)、溝6から瓦器小皿(150)が出土している。溝6・4の切り合ひ付近からは瓦器碗(147・148)、須恵器捏鉢(151)等が出土しているが、どちらの溝に伴うものか判断できなかった。

#### 溝8 (SD 8)

掘立柱建物跡1に西接し、溝6には直角に合流している。建物跡と方向性が同一であり、雨落ち溝となる可能性がある。遺物の出土はみられなかった。



第62図 溝4出土鉄器



第63図 柱穴・溝出土遺物

#### 井戸1 (S E 1)

円形の掘り方に石積みの井戸側を構築し、底に曲物を入れ水溜としている。掘り方は径260cm、水溜の底までの深さ約260cmを測る。掘り方は地表から約150cm下で段が設けられ、ここから底へ擂鉢状に掘り、底中央には復元径約26cmの曲物を設置している。石積みは河原石を小1積みにし、水溜の縁から行い、擂鉢状の掘り方部分では順次上に聞くように積まれ、掘り方がほぼ垂直に変わると上は石積みもほぼ垂直に立上げている。井戸側の内法は約75cmを測る。

石積みのうち、西側の上半部は積石間に隙間があり、断面観察でも掘り方を掘り直した形跡があることから、石の積み直しを行っているようである。

遺物はすべて井戸の埋土内より出土した。平瓦(152~154)、丸瓦(155)、瓦器小皿(156)、土師器小皿(157・158)、瓦器碗(159~161)、青磁碗(162)、須恵器捏鉢(163)・碗(164)等が出土している。  
井戸2(SE2)

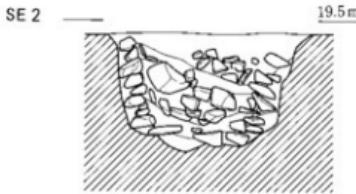
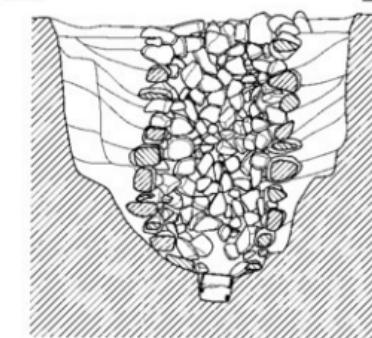
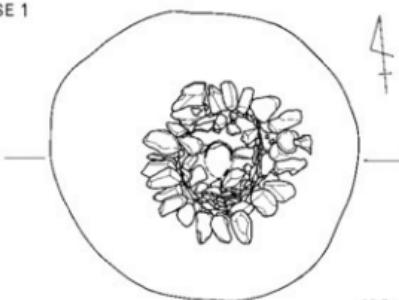
井戸1の西側に位置している。井戸1と同様、掘り方内に石積みの井戸側を構築しているが、大半が調査区外になるため断面観察のみ行った。掘り方は径約160cm、深さ約100cmを測る。石積みは河原石を掘り方の壁に接するように積み、上方が聞く塗鉢状を呈する。井戸側上面での内法は115cmを測る。断面を観察する限り底に水溜の施設の痕跡は認められない。また遺物の出土はみられなかった。

微高地南端西土壤群

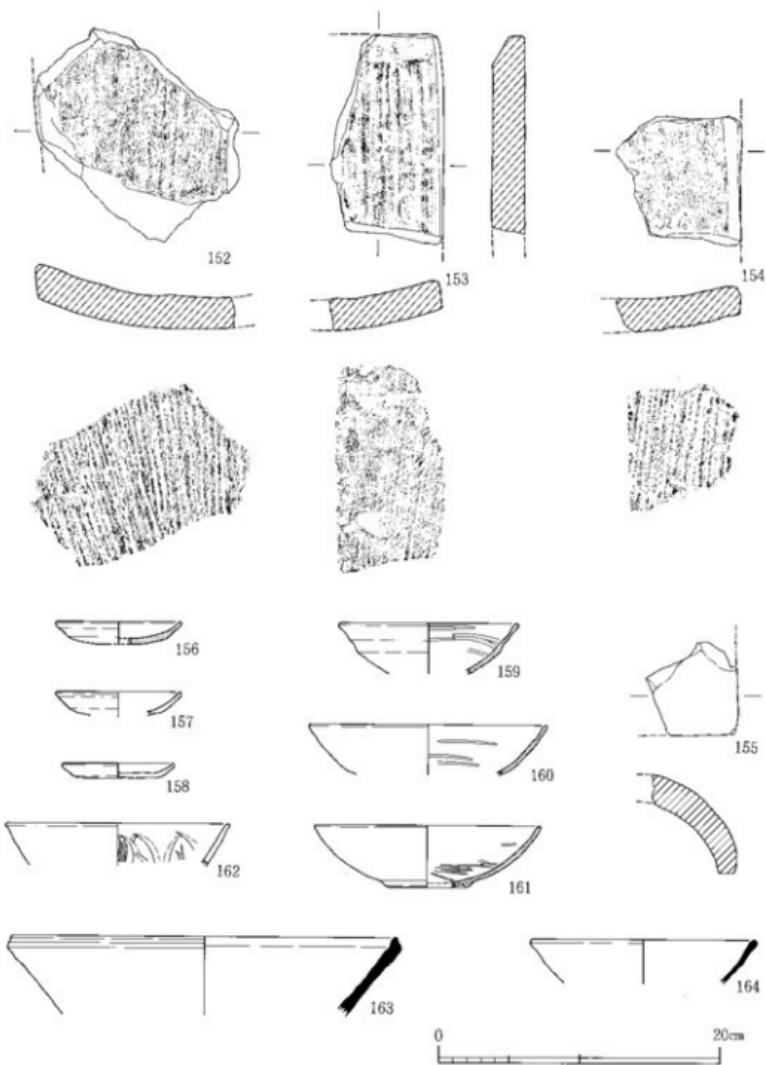
#### 土壤8~10・12(SK8~10・12)

いずれも前半のため、残存状況は良好ではないが、径60~90cm、深さ25cm程度の円形の土壤である。土壤12はやや離れて単独に位置するが、規模・平面形ともこの群の土壤に類似している。

土壤9からは瓦器羽釜(170)等が、土壤12からは瓦器碗(168)、石鍋(S5)、雁股鉄鎌(F5)等が出土している。石鍋は滑石製で、口縁部が若干残存していただけであったが、割れ面に磨き痕がみられる事から再利用品とみられる。

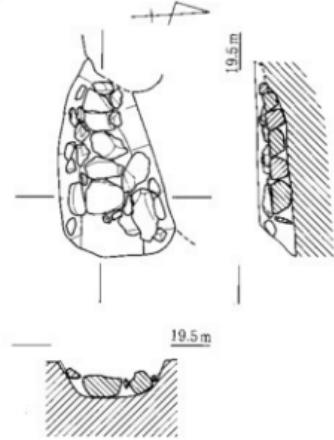


第64図 井戸1・2

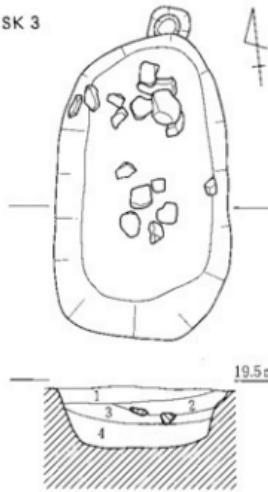


第65図 井戸1出土遺物

SK 2

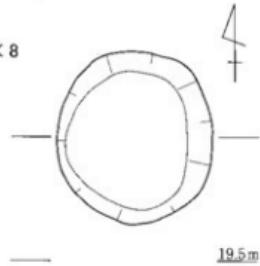


SK 3

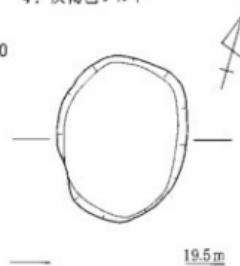


1. 灰褐色シルト
2. 灰褐色シルト
3. 灰褐色シルト（雜・炭化物等含）
4. 灰褐色シルト

SK 8



SK 10



1. 灰褐色シルト
2. 灰褐色シルト（シルト質強い）
3. 灰褐色シルト（黄褐色シルト混）
4. 灰褐色シルト（シルト質強い）
5. 灰褐色シルト

0

2 m

第66図 土壌 2・3・8・10

### 微高地南端東土壤群

**土壤1 (SK1)** 不整形な平面を呈し、微高地南端へ溝が延びる。瓦器碗(165~167)が出土した。

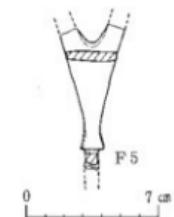
**土壤2 (SK2)** 西端は柱穴に切られ、東端は調査区外へ延びるため全容は明らかではないが、全長150cm以上、幅60cm、深さ20cmの平面長椭円を呈する。底には河原石利用の礫敷がある。この礫敷上には一面に炭・灰屑が堆積し、南北の壁は焼土化しており、火を用いる行為に関する施設と思われる。遺物は出土していない。

**土壤3 (SK3)** 南北160cm、東西90cmの平面椭円を呈する。土師器小皿(169)等が出土している。

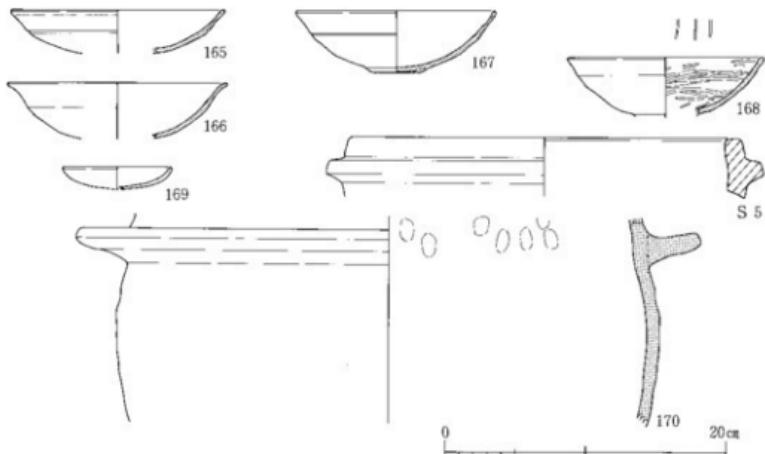
### 微高地北半土壤群

**土壤6 (SK6)** 東半が溝4、北端が土壤7によって切られているが、残存部分の形状から本来は平面円形の土壤であったものと思われる。断面は浅い皿状を呈する。埋土内より土師器皿(172)、瓦器碗(171~173)、砾石(S6)等が出土している。

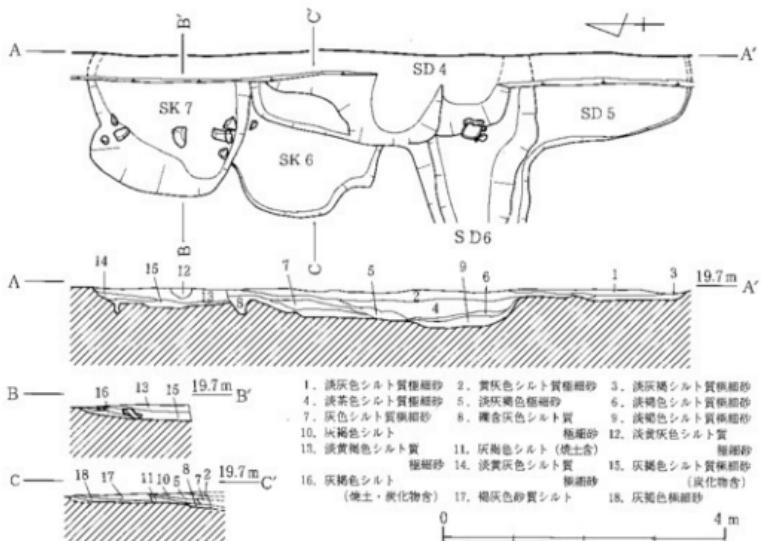
**土壤7 (SK7)** 東半が調査区外へ延びているが、土壤6を切って設けられている。平面は不整形な円形を呈し、断面は皿状となる。埋土内より瓦器碗(174~183)、土師器皿(184)、土師器小皿(185~191)、土師器甕(192~193)、土師器羽釜(194)、青磁碗(195)、白磁碗(196)等多量の遺物が出土している。



第67図 土壤12出土鉄器



第68図 土壤1・3・8・10出土遺物



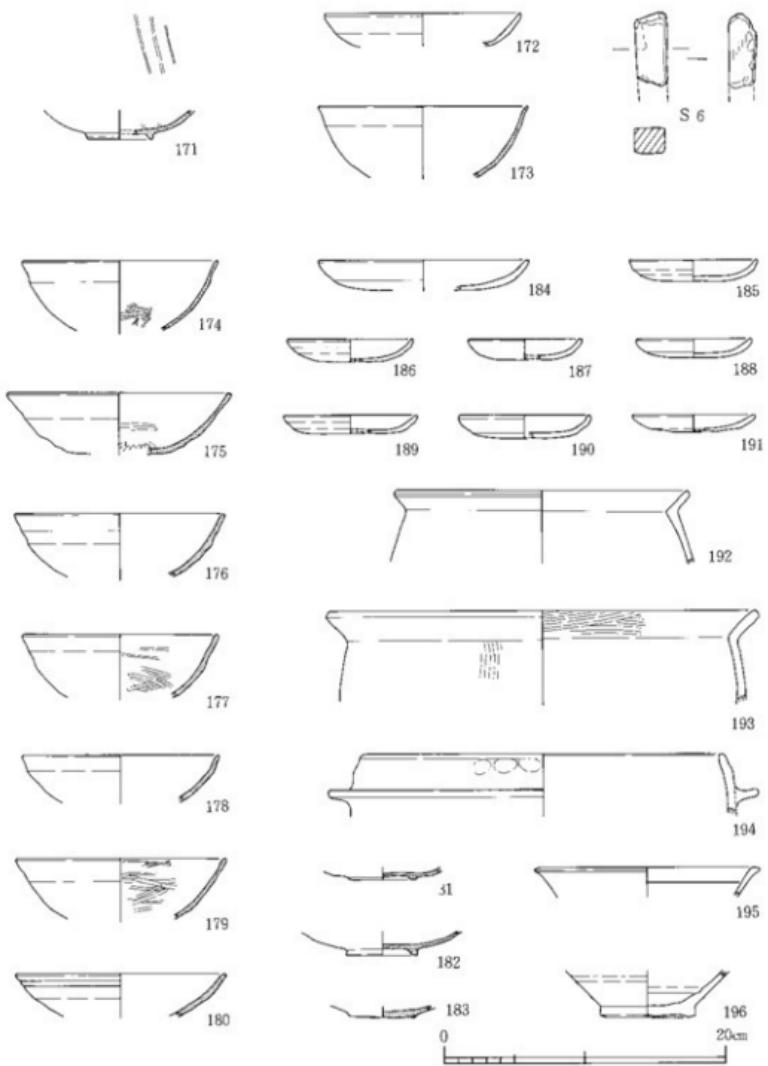
第69図 土壌6 · 7, 溝4 ~ 6

#### 自然流路 (SD 1)

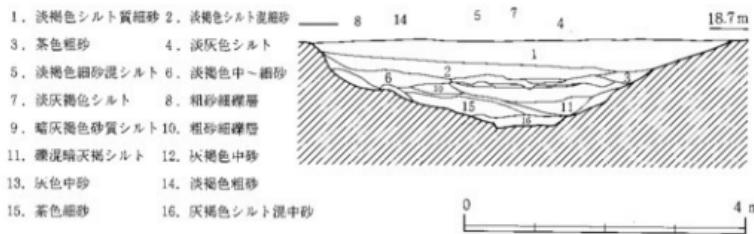
調査区南半の低地に位置している。東西方向に延び、幅6m、深さ1.2mを測る。

出土遺物のうち197~201は上層より出土した。瓦器三脚付き羽釜(197・198)は口縁部が内側に傾き、鉢は197がほぼ水平に取りつき、198は大きく上反する。鉢直下から断面円形の足が取り付く。土師器小皿(199・200)は手づくね系で口径8.4cmを測り、外面は未調整、内面はナデ溝整が施されている。瓦器碗(201)は口縁部に横ナデが施され、体部外面は未調整である。内面は磨滅のため調整は確認できない。高台は粘土縫貼付けにより断面は逆三角形を呈する。

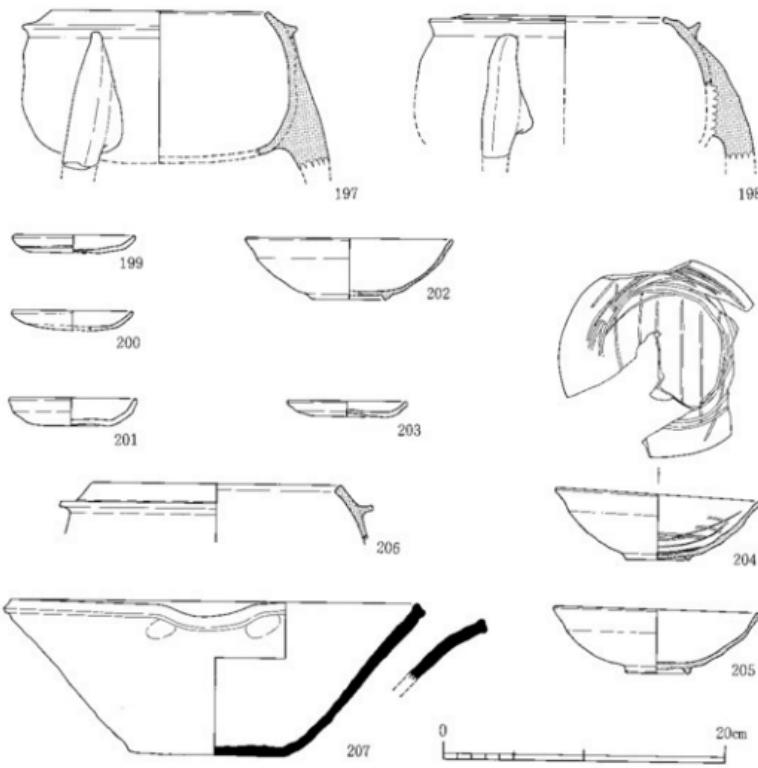
出土遺物のうち202~207は下層より出土した。土師器小皿(202・203)は手づくね系である。瓦器碗(204・205)は口径14.4cmを測り、体部外面は未調整で口縁部に横ナデを施している。204には体部内面に螺旋状の、見込部に平行の暗文が観察される。瓦器羽釜(206)は鉢がほぼ水平に取り付き、体部は丸みを帯びているとみられる。須恵器捏鉢(207)は流路の最下層から出土している。



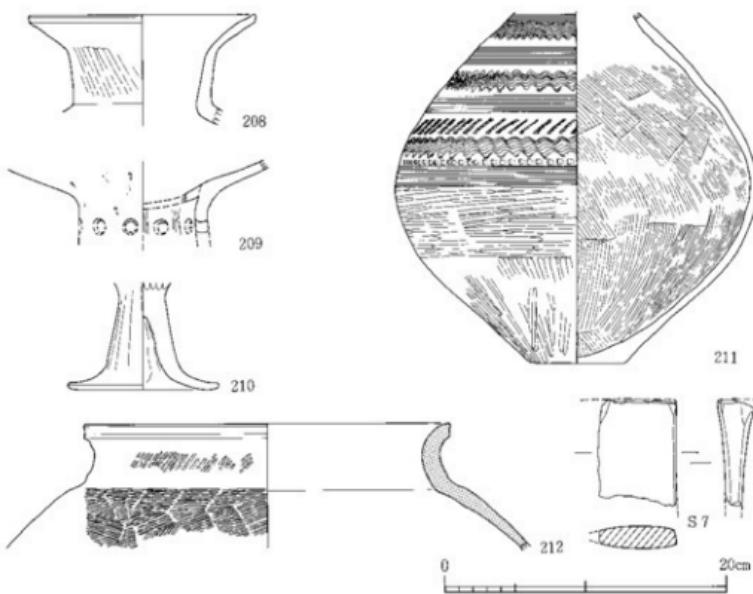
第70図 土壌6・7出土遺物



第71図 自然流路断面図



第72図 自然流路出土遺物



第73図 溝10・包含層出土遺物

b. 弥生時代の遺構

溝10 (S D 10)

深さ20cm、幅70cmを測る。東側は調査区外へ続き、西端は東壁から3.5mの地点で途切れている。この溝は全容が明らかとなっていないため、性格等は不明である。溝内より横転した状態で頭部を欠いた壺が1点出土している。壺(211)は体部中央から上に櫛描きの直線文、波状文、列点文が施され、畿内第Ⅳ様式に属するとみられる。

c. 包含層その他の遺物

弥生～古墳時代の遺物の多くは微高地西端の暗灰色シルト層からの出土である。特に井戸1南側の不整形な落ち込みからは古墳時代前期～中期に属するとみられる土師器壺(208)、土師器高杯(210)等が出土している。また、奈良時代の須恵器細片が低地の砂疊層から若干出土している。

微高地東側から高杯あるいは器台(209)、瓦質壺(212)、砥石(S7)が出土しているがこれらは遺構に伴うもの可能性がある。209は脚上部に10箇所の穿孔がみられる。

## 第4章 まとめ

### 第1節 各次調査の成果

この節では、各調査ごとに発掘成果の簡単なまとめを行い、8次にわたった下加茂遺跡の発掘調査を概観したい。

#### 1. 第1次調査

計23箇所のトレンチによる確認調査の結果、全てのトレンチから遺構や遺物包含層を検出したため、調査対象地全域について全面調査の必要性を認め、さらに周囲の範囲確認が必要であると判断した。

遺跡の年代は縄文晩期・弥生・古墳・平安・鎌倉・室町・江戸の各時代にわたっている。特に2・9・11・13~19トレンチでは、柱穴・土壙・井戸などといった遺構が見つかり、土壙の一括資料を含む多くの遺物が出土した。遺物の年代からみて、12~13世紀の集落の存在が予想された。

#### 2. 第2次調査

A地区については、遺構・遺物の分布は比較的希薄であったと言えよう。

一方、B地区では室町時代後期の圍池とみられる遺構（SG1・2）や柱列などが見つかり、屋敷地の一部であったとも考えられる。また古墳時代後期の遺物も出土しており、周辺に集落が存在していると考えられた。

#### 3. 第3次調査

A・B両地区において、上下2面の調査を行った。その結果、第1面では平安時代末~鎌倉時代初頃の掘立柱建物跡・樹列・土壙、第2面では弥生時代中期の方形周溝墓・土壙などを検出した。

掘立柱建物跡は4棟を復原することができた。建物跡は2棟ずつが重複しているため、2時期に細分することが可能であるが、遺物が僅少であったため、細かい時期差や先後関係については言及できなかった。遺構の年代は、遺物からみて12世紀末頃とみられる。

方形周溝墓はA地区の東南隅で2基検出したが、B地区や第4次調査のD-2地区では見つかなかったため、墓域はあまり大きくならない見込みである。周溝墓の時期は供獻土器からみて、弥生時代中期後半（IV様式後半）にあたるものである。

なお、同時に最明寺川北側の未調査地について確認調査を行ったが、遺構・遺物は得られなかつたことを付け加えておく。

#### 4. 第4次調査

検出した遺構・遺物は、大きく室町時代後期・平安時代後期・古墳時代後期・縄文時代晩期の4つの時期に分けることができる。

A-1地区の第1面では、室町時代後期の溝・柵列・土壙などを検出した。調査区を東西に横断する溝（SD1）は区画を意図したものとみられ、敷地内には柵列（SA1・2）や方形の土壙（SK1～3）などが存在した。遺構の年代は、出土した土師器・懐前焼などからみて、16世紀初頭～中頃とみられる。

B地区では平安時代後期の柵列・土壙などが見つかった。調査区内では掘立柱建物跡は検出できなかったものの、土壙4の焼土塊などから、作業工房などの存在も考えられる。遺物のほとんどは土壙内から出土しており、特に確認調査で見つかっていた土壙5～7からは、良好な一括資料が得られた。出土した瓦器椀・土師器小皿からみて、12世紀前葉を中心とした年代を与えることができる。

A-1地区的第2面では、古墳時代後期の豊穴住居跡2軒を検出した。いずれも矩形で、造り付けのカマドをもち、特にSH1ではカマド廐棄に伴う祭祀の跡が認められた。住居跡の時期は、出土した須恵器からみて、6世紀後葉とみられる。

A-1地区ではまた、縄文時代晩期の土壙（SK31）も見つかった。4個体の深鉢が一括に出土したことから、合わせ口の土器棺のような遺構があったものとみられる。

#### 5. 第5次調査

検出した遺構・遺物には、室町時代後期・平安時代末～鎌倉時代・古墳時代後期のものがある。

室町時代後期の土壙（SK2）は、第2・4次調査で見つかった圍池遺構に類似する形態を呈しており、一連の遺構であると考えられる。

平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物跡は2棟の復原を行った。両者はプランが重複しているため、建て替えたことが窺える。なお井戸（SE1）からは遺物が出土していないものの、石の組み方が第8次調査のSE1と共通しているところから、この時期に帰属するものとみて差し支えないであろう。

古墳時代後期の住居跡は非常に残りが悪かったため、全体の構造を明らかにできたものはなかった。しかし基本的には第4次調査で見つかったものと同じく、方形プランに造り付けのカマドをもつものであろう。

#### 6. 第6次調査

第6次調査ではA・B区の微高地上で中世の集落または屋敷地の一端とみられる若干の遺構を検出したのみであった。検出した遺構が少なく、しかも疎らに分布しているため各遺構の性格、規模等は明らかにできなかったが、微高地がさらに東側へ続いていること、検出された溝

が確実に東へ延びていることから遺跡は本調査区のさらに東側へ広がっていると考えることができる。また、弥生時代中期の遺物および同時期と推定される土壙が検出されていることからこの微高地上に弥生時代の集落が立地している可能性が指摘できる。

第6次調査では全体的に遺物の出土量が少なく、各遺構の所属時期を求めるることは困難であるが、遺物の出土がみられた溝およびB区土壙は出土遺物の形態から12世紀後半から13世紀代に属するものとみられる。したがって遺物の出土がみられなかった他の遺構もほぼ同時期のものと推定する。

出土した遺物は少量であったが、弥生時代の甕以外はすべて中世に属しており、第6次調査区の主体となる時期は中世ということができる。中世の遺物は陶磁器類の出土は皆無、須恵器が極少数で、椀、皿を主体とする瓦器・土師器が中心となる傾向にある。

#### 7. 第7次調査

坪と工事箇所の断面観察から、第7次調査区は遺構面を構成する層が認められず、砂礫層が厚く堆積していることから氾濫原にあたるとみられ、少なくとも川西・伊丹線の路線内については本調査区は下加茂遺跡の範囲内にあたるもの、遺構等は存在しない。

#### 8. 第8次調査

第8次調査では弥生時代・平安～鎌倉時代の2時期の遺構が検出された。これらの遺構は調査区北半の微高地上で検出されたが、微高地は縁が北西から南東方向であること、上面が北東から南西に傾斜していること等から、東あるいは南東方向に広がりをもつものとみられ、今回の調査区は微高地の西端付近にあたる。

微高地上で検出された遺構は調査区の東半に集中すること、第6次調査区でも遺構が検出されていること等から、本調査区の遺構は微高地の広がりと同様、東あるいは南東方向に広がりをもつものと思われる。また平安～鎌倉時代の遺構のうち、柱穴群と溝には方向性を同じくするものがあること、土壙群にまとまりがみされること等、遺構の配置に有機的な意図が窺える。

検出された遺構のうち、弥生時代のものは極僅かで大半が平安時代末～鎌倉時代のものであった。出土遺物も同様の傾向であるため、本調査区の主体となる時期は平安時代末～鎌倉時代ということができる。同時期の遺物は土器を主体に少量の砥石、鉄製品がある。土器の種別の傾向をみてみると、供膳具（椀・皿・小皿）・煮沸具（鍋・羽釜）がほとんど瓦器・土師器で占められており、磁器は少量みられる程度である。須恵器は調理具（捏鉢）・貯蔵具（甕）に限られるようである。なお煮沸具として、滑石製の石鍋が1点出土している。

また、少量ながら比較的の良い弥生・古墳時代の遺物が出土しており、第6次調査の成果とあわせ、本調査区外の微高地上に同時期の集落が位置している可能性がある。

## 第2節 下加茂遺跡の時期別変遷

前節までに、各年次ごとの調査成果をまとめてきた。しかしながら、道路の拡幅部分のみの発掘調査という性格上、調査範囲は地形を無視した細長いトレンチ状とならざるをえなかった。そのため各調査区で検出された遺構も、その広がりや、他の遺構との有機的な関係を追えることがほとんどなく、集落全体の構造を明らかにするには至らなかった。それでも、見つかった遺構・遺物は、縄文時代晚期から弥生・古墳・平安・鎌倉・室町の各時代にわたっており、わずかな手掛かりをつなぎ合わせることによって集落の変遷を辿り、遺跡の性格を探ってみたい。

### 1. 地形区分（第74図1）

集落の変遷を述べるのに先立って、集落の立地する微高地と、旧河道の位置についておおまかに触れておきたい。ただしここでは、時間的な先後関係を加味していないことを断わっておく。

まず集落の立地に適した微高地もしくは段丘は、第2次調査B地区・第4次調査A-1地区・第5次調査区（以下、微高地Aと呼ぶ）、第4次調査B地区（同、微高地B）、第3次調査A地区（同、微高地C）、第6次調査A地区・第8次調査区（同、微高地D）の4箇所に認められる。

次に旧河道は、加茂橋付近で最明寺川から分かれ、県道を大きく東に迂回して、市道27号線を境に二股に分流している。そのうちの西の流れは、第3次調査B地区の南端から第6次調査区を経て第8調査区の南部へ通じており、北西方向から流れてくる別の旧河道と合流して、第7次調査区へ南下している。

この他にも、第2次調査B地区南端から第4次調査A-2地区・第2次調査A地区をかすめるものと第4次B地区の南東隅をかすめる小さな旧河道が、各微高地を分断するように走っている。

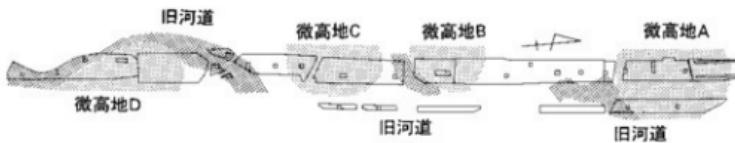
### 2. 縄文時代晚期～弥生時代前期（第74図2）

微高地Aの南端付近において、縄文時代晚期（長原式）の深鉢4個体が一括で出土しており、おそらく合わせ口の土器棺のような遺構があったものと考えられる。この時期の遺跡は、付近では伊丹市口酒井遺跡などが知られ、弥生時代前期の土器を伴出す例が多い。当遺跡では、弥生時代前期の土器は第1次調査の7トレンチにおいて細片が出土した他、市教委の第4次調査でも少量の土器が出土しており、周辺の微高地上に集落が立地する可能性が高い。

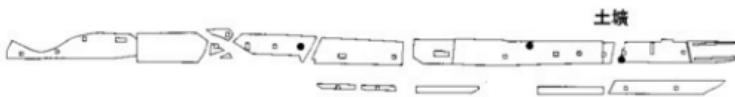
### 3. 弥生時代中期（第74図3）

微高地Cにおいて方形周溝墓2基が見つかり、主体部は削平されていたものの、周溝内から供獻土器が出土した。方形周溝墓の広がりは周辺の調査区で認められなかつたことから、墓域

### 1. 地形区分



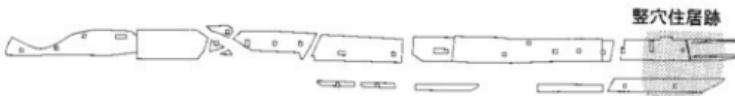
### 2. 縄文時代晚期～弥生時代前期



### 3. 弥生時代中期



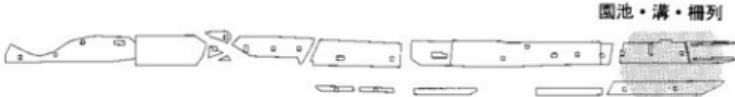
### 4. 古墳時代後期



### 5. 平安時代後期～鎌倉時代



### 6. 室町時代後期



第74図 地形区分と集落の変遷

は小規模なものに留まるとみられる。

これ以外には微高地Dで単発的に遺構・遺物が見つかった程度で、集落の本体は調査区外の微高地に存在する可能性が高い。また市教委の第4次調査では、微高地Aの西側にあたる流路から大量の後期の土器が出土しており、集落が後期まで維続するのは確実である。

#### 4. 古墳時代後期（第74図4）

微高地Aにおいて住居跡5軒が見つかっており、調査範囲外の西側に向かって集落が広がっているものとみられる。住居跡の遺存状況は概ね良くなかったが、第4次調査のSH1が典型となるだろう。住居跡は一辺5m弱の方形を呈し、4本柱で、北か北西側に造り付けのカマドを設けている。

年代は6世紀後葉を中心で、ちょうど群集墳造営の時期に当たっている。遺跡から北へ約2kmの長尾山丘陵には大群集墳があるが、直接的な関係をもつかどうかは不明である。

#### 5. 平安時代後期～鎌倉時代（第74図5）

この時期の居住地は、微高地A～Dの全てで見つかっている。この調査結果は、第1次調査（確認調査）の所見を裏付けることとなった。

微高地Bでは横列・土壙などが見つかっている。年代は、瓦器椀の高台がまだ高いところから他の3地点よりもやや古く、12世紀前～中葉頃とみられる。

微高地Cでは4棟の掘立柱建物跡が2棟ずつ重複して見つかった。いずれも棟軸方向をほぼ同じくしており、連続して建て替えられたことが判る。年代は、瓦器椀の高台がかなり退化しているところから、12世紀末頃とみられる。

微高地Aでは掘立柱建物跡2棟と井戸跡1基が見つかっている。遺物が少ないため年代は判定しにくいが、12世紀末頃としておく。

微高地Dでは特に第8次調査区に遺構が集中していた。見つかった遺構には掘立柱建物跡1棟、井戸跡2基の他、溝・土壙・柱穴多数があり、4地点の中でも中心的な存在である。出土遺物の量も他の3地点を圧倒しており、瓦が出土している点にも注意を要する。遺物の年代には、12世紀末～13世紀にかけての幅がみられる。なお県道を挟んだ東側の、市教委第7次調査地点においても掘立柱建物跡が見つかっており、集落は東方に広がっているようである。

以上の4地点は地形上の制約を受け、間隔を置いて立地しているかのように見受けられる。実際に4地点相互がどの程度の関連をもっていたかは不明であるが、微高地Aと微高地Dについて言えば、建物に井戸が付属するというパターンが共通しており、それぞれがひとつの屋敷地として捉えられるであろう。

#### 6. 室町時代後期（第74図6）

微高地Aを中心に遺構が分布している。中でも第2次調査で検出した圍池遺構（SG1）は極めて特異なもので、方形の掘り方の南東隅に溝が取付き、円形の掘り込みに水を落とし込む

という構造を有している。さらに石材の有無という違いはあるものの、同様な遺構が第4次調査・第5次調査でも集中して検出されており、円形の掘り込みの無いものまで加えると、計5基を数えることになる。これらの遺構は、明らかに一連のものであり、しかも第4次調査のSD 1より北側に限られていることから、溝によって区画された屋敷地内の庭園に当たる部分ではないかと推測される。

### 第3節 結　　び

川西市南部の西半部に延びる加茂の台地上には、弥生時代中期の大集落としてついに有名な加茂遺跡がある。最近ではクニの中心部の存在を窺わせる方形区画が発見され、全国的に注目を浴びたばかりである。

この加茂遺跡の東方の眼下に広がる、猪名川右岸の沖積地から段丘にかけての一帯は、これまで遺跡の存在があまり知られていなかった。調査地付近の現状は水田や畑地で、非常に平坦な地形となっている。周辺には古くからの人家は見当たらず、集落は台地上あるいは台地の裾部といった小高い場所にかたまっている。これは水害を避けるためであるとともに、少しでも可耕地を広く確保するためであるかと思われる。

しかし8次にわたる一連の調査の結果、縄文時代晩期～中世にかけての遺跡の存在が明らかとなった。現在は平坦に見える地形もかつてはより起伏に富んでおり、沖積地の真ん中であっても、中世以前には微高地を選んで集落を営んでいたようである。遺跡は調査範囲から東西方向へさらに広がりを見せており、沖積地に立地しているという点からも、遺構が良好に遺存し



第75図 加茂台地より下加茂遺跡周辺を望む

ている確率が高いと考えられる。

今回の発掘調査の中で特筆すべきは、弥生時代中期の方形周溝墓群が見つかったことである。検出した範囲は墓域をわずかにかすめたに過ぎないが、これによって加茂遺跡を背景とした分村的な集落・墓域・水田などの存在を想定しうるという大きな収穫であった。加茂遺跡は、川西市はもとより浜津の中でも屈指の大集落であるところから、今後の調査の進展によっては、重要な発見の可能性も秘められていると言えよう。

また中世以降ともなると、伊丹と川西を結ぶ交通路に面しているという意味合いが増してくる。平安時代後期～鎌倉時代にかけての聚落地は、各時期の中で遺構・遺物の量が最も豊富で、長期間継続して居住したことを物語っている。さらに室町時代後期の聚落地も見つかっており、近世になって集落が現在の場所に落ち着くまで、居住地としての利用は続いていたとみられる。

現在の都市計画道川西・伊丹線は、中世以降あるいはそれ以前から尼崎・伊丹周辺と川西から丹波を結ぶ要路としての役割を担ってきたのであろう。工事終了後、道幅はかつての倍以上に広がり、見違えるように整備された。

一方、この下加茂遺跡を含む平野部は、市街化が進む川西市内にあって、比較的農村の面影がよく残っている地域である。それだけに今後、付近が開発の対象となることも増えてくるであろう。その際は、今回の調査成果を踏まえ、地域の景観・歴史的環境に配慮をもった慎重な対応が望まれる。



第76図 調査地点の現況

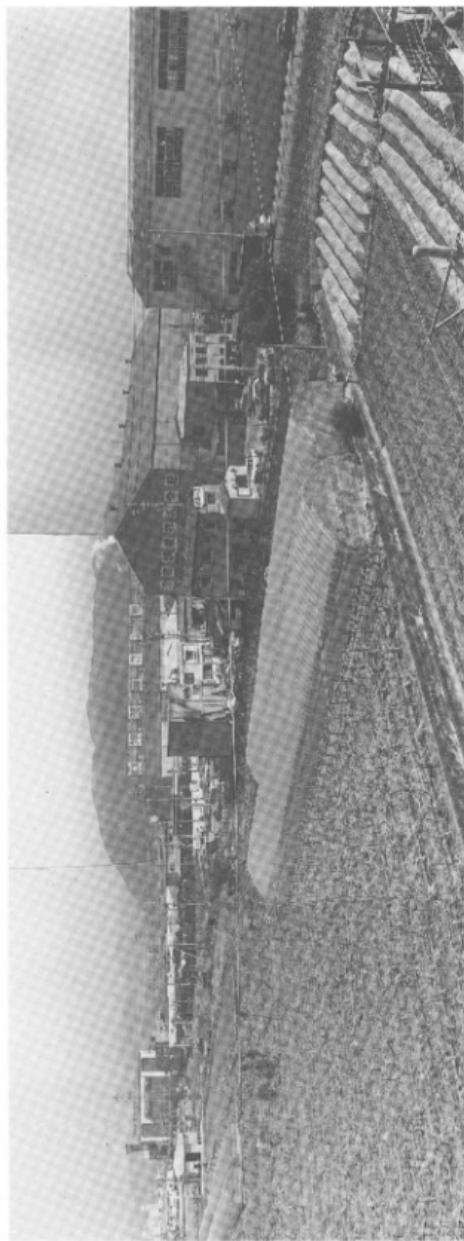
図版1 航空写真



第1次調査

図版2

確認調査



1. 第1次調査地区全景



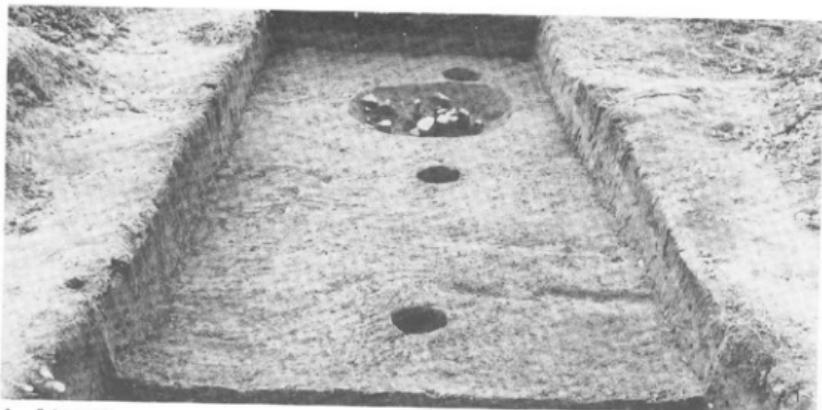
2. 6トレンチ



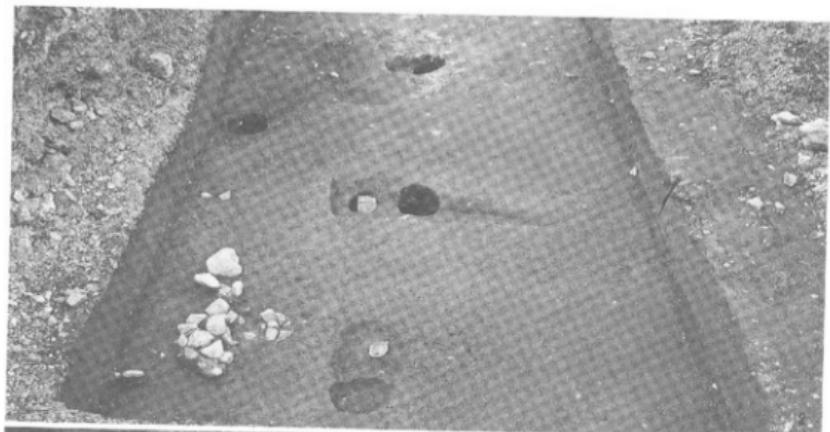
3. 16・17トレンチ



4. 22トレンチ



1. 2トレンチ



2. 9トレンチ



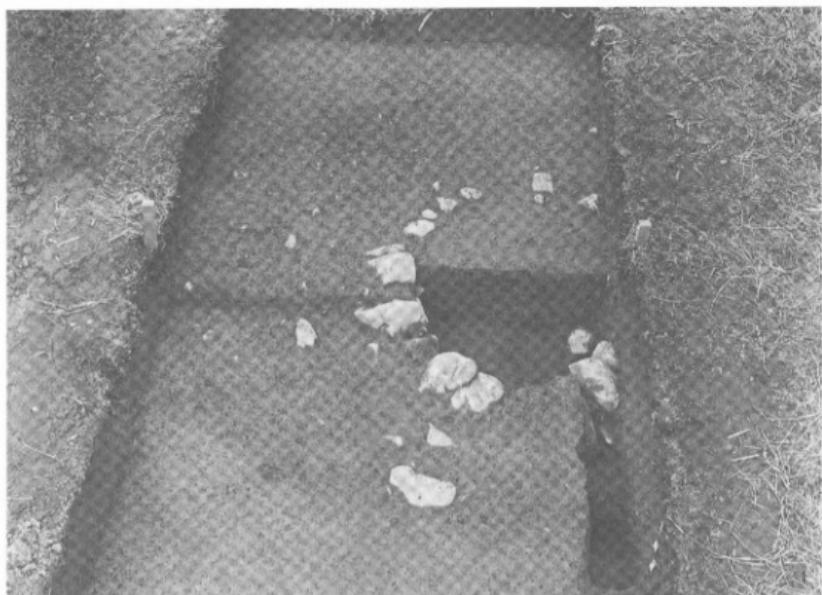
3. 9トレンチ第1土器群

4. 9トレンチピット出土の土師器小皿

第1次調査

図版4

16・17トレンチ



1. 16トレンチ井戸全景

2. 16トレンチ井戸



3. 16トレンチ土師器小型丸底壺



4. 17トレンチ



5. 17トレンチ土師器壺



32



36



21



18



19



39



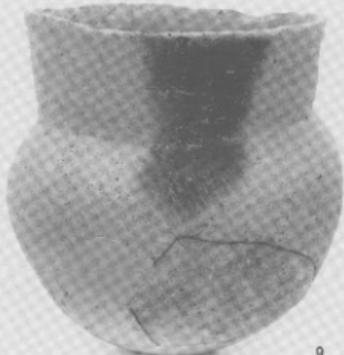
41



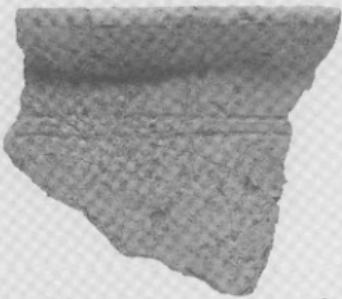
42



14



9



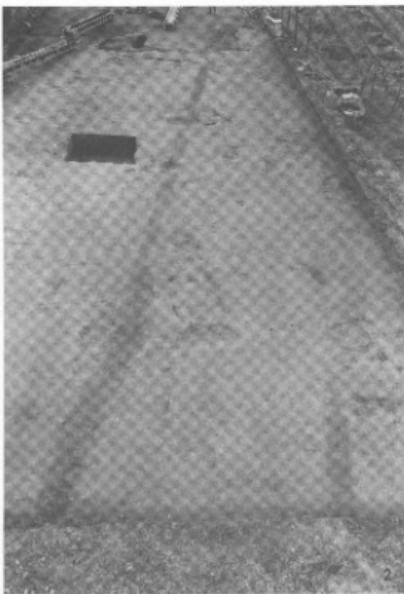
8

第2次調査

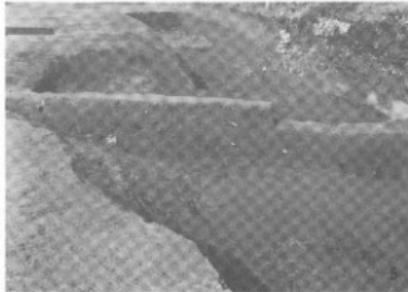
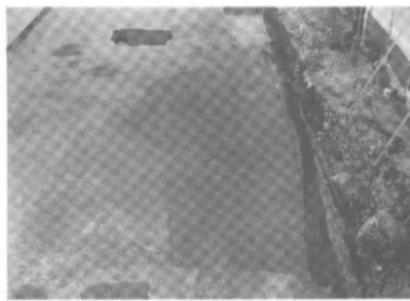
図版 6  
A地区遺構



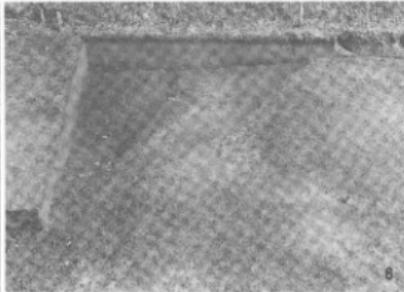
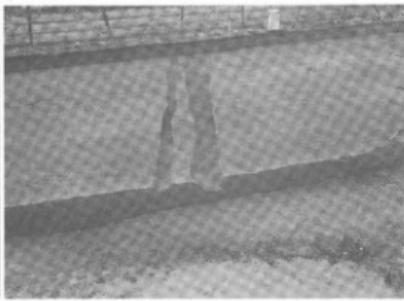
1. 全景（北から）



2. SD 1・2（北から）

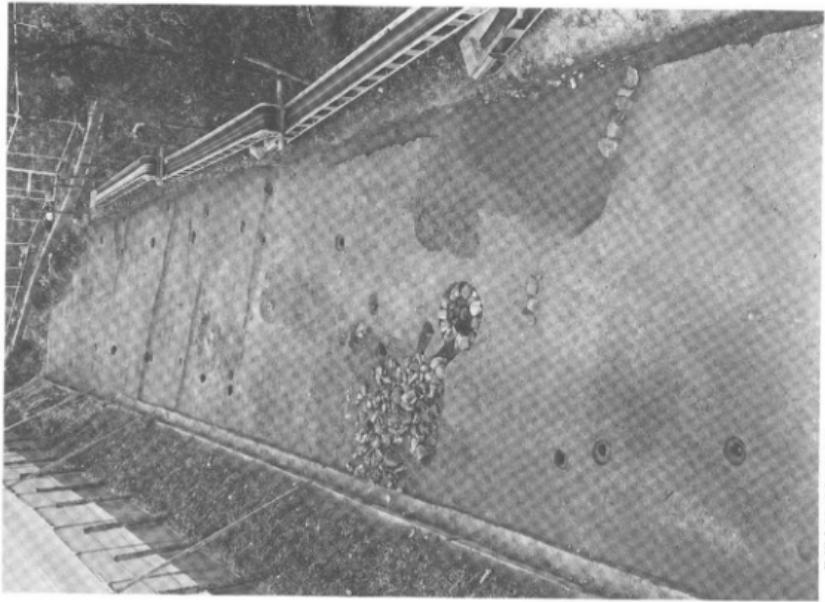


3. SD 3・4・5（東から）  
5. 落込 2 断面

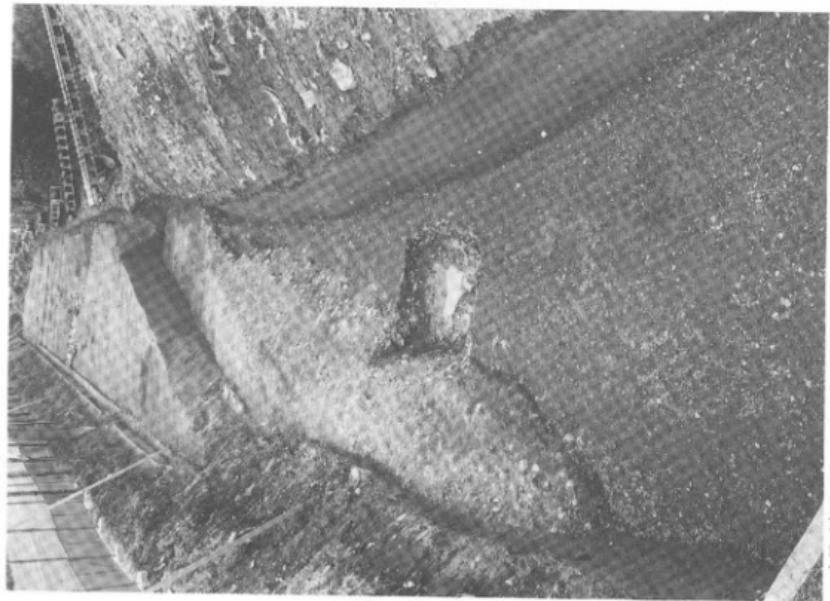


4. 落込 2（南から）  
6. 落込 1（西から）

北部全景(南から)



全景(南から)



第2次調査

図版8

B地区遺構(2)



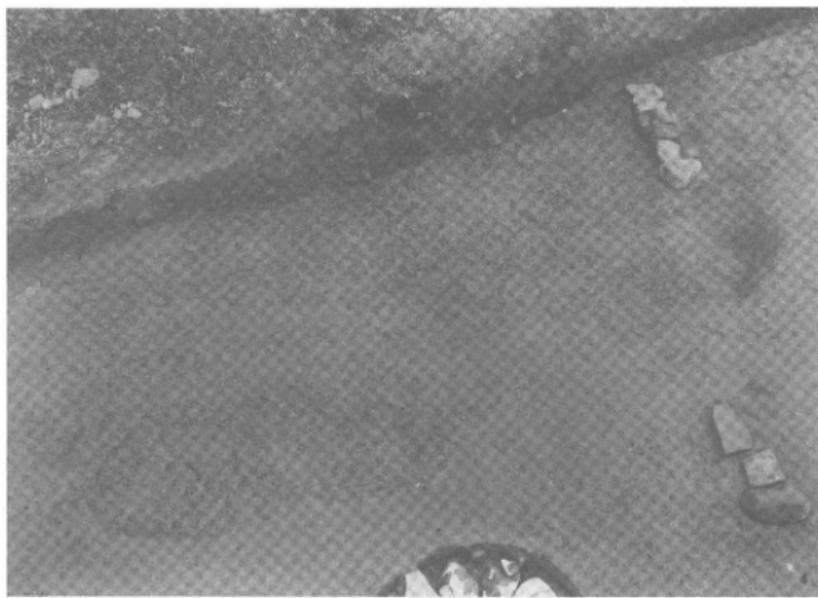
1. 溝・ピット群（北から）



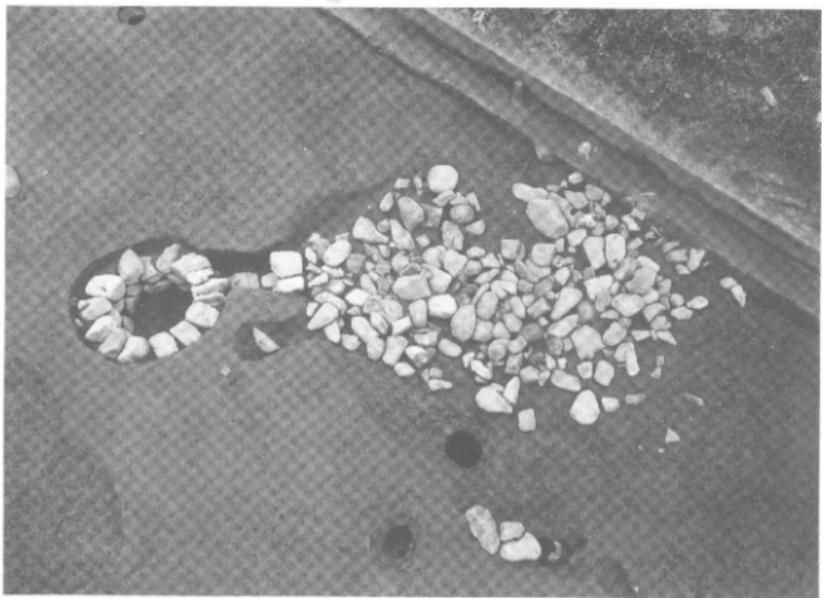
2. ピット1に切られた瓶



3. SG2の集石



4. SX2全景（西から）



1. SG 1 園池全景（北東から）



2. SG 1 園池の円形石組



3. SG 1 園池の円形石組導入部

第2次調査

圖版  
10

遺物



54



57



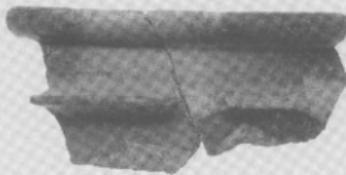
46



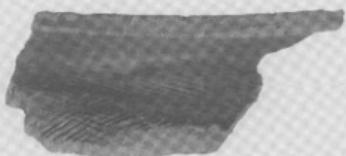
50



48



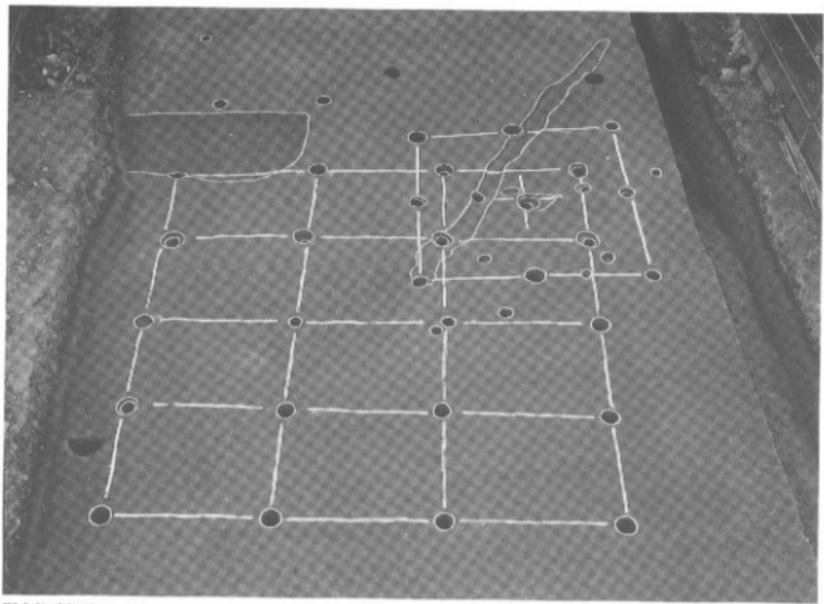
52



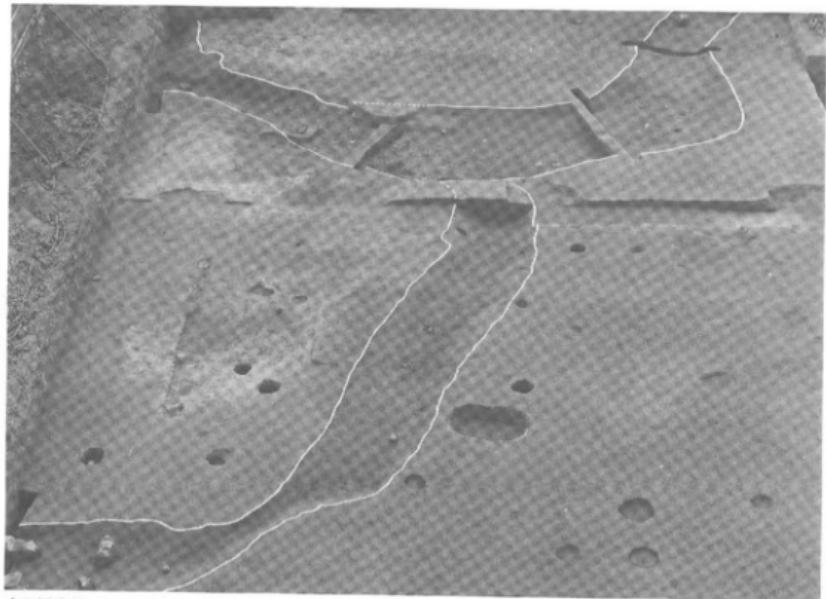
51



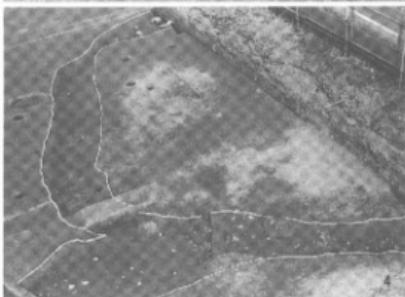
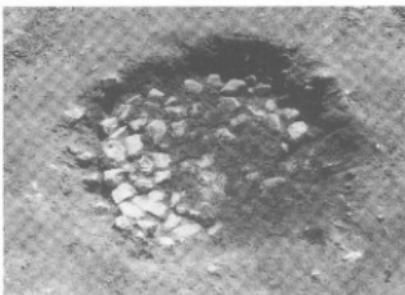
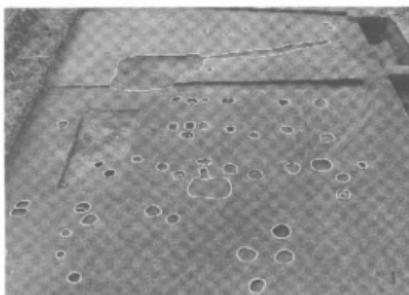
59



掘立柱建物跡 1・2

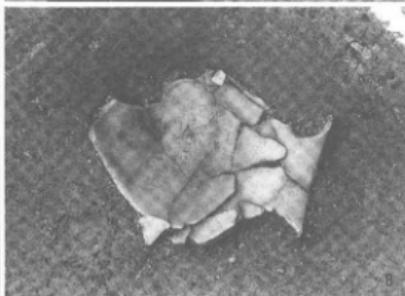
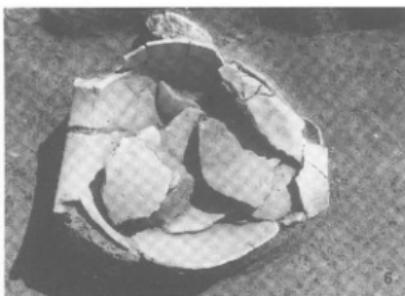


方形周溝墓 1・2

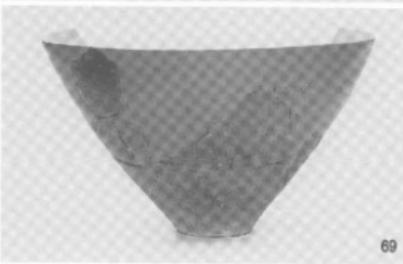
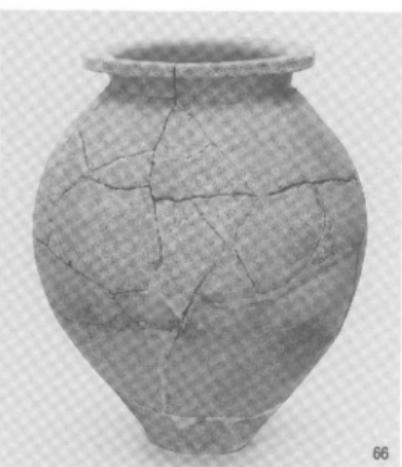
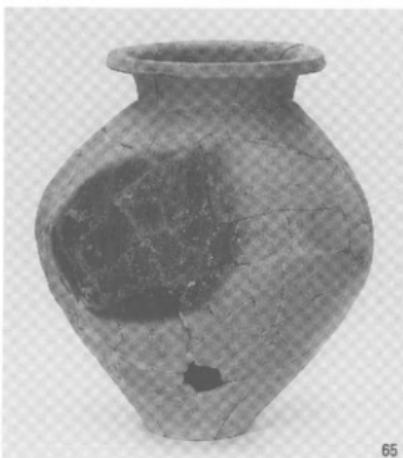


1. 挖立柱建物跡 3・4  
3. 土壙 2

2. 土壙 1  
4. 方形周溝墓 2



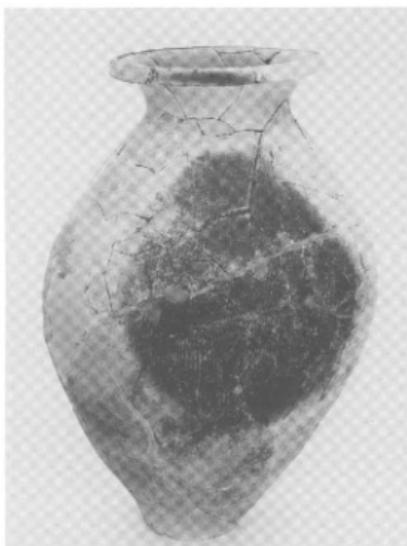
5～8. 方形周溝墓出土遺物



第3次調査

図版  
14

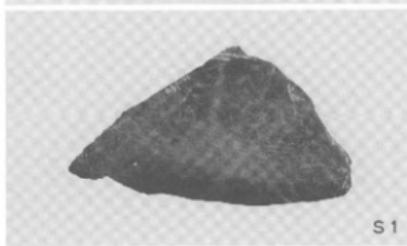
遺物  
(2)



68



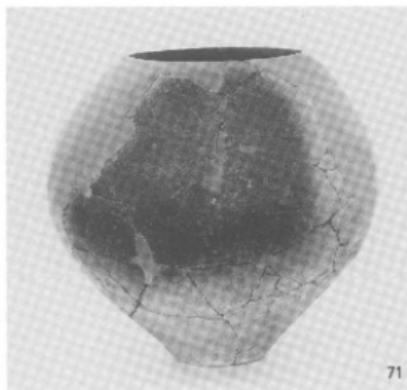
67



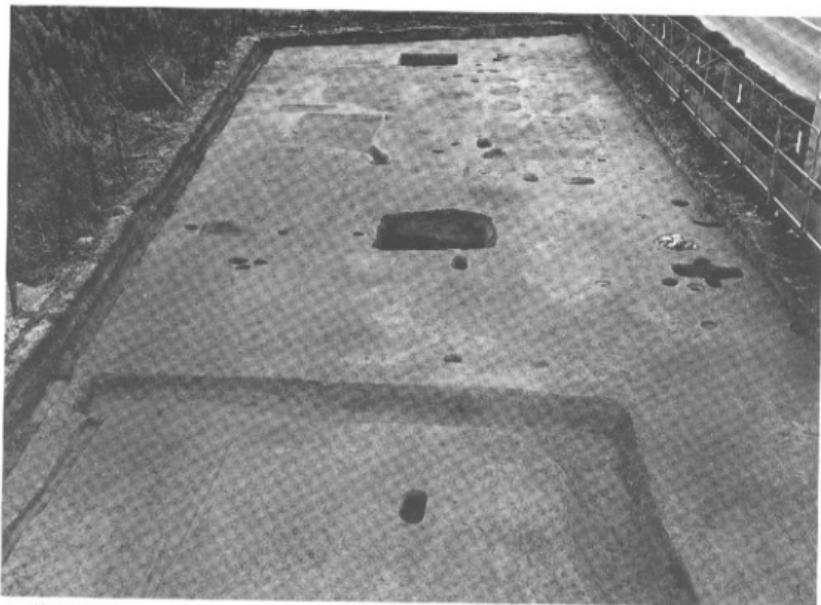
S 1



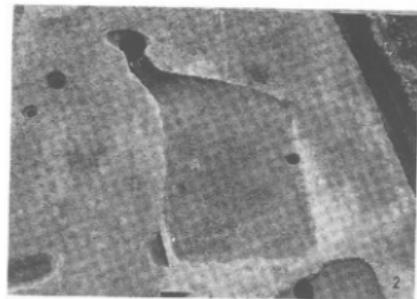
70



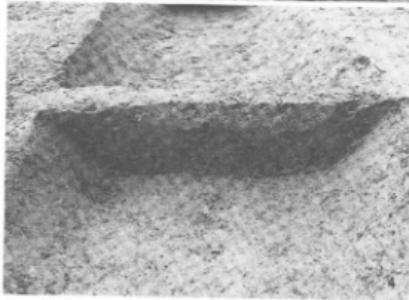
71



1. 第1面全景



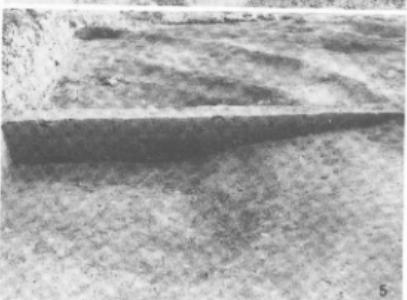
2.



4.

2. 土壠2  
4. 溝1断面3. 土壠2内遺物出土状況  
5. 土壠13断面

5.



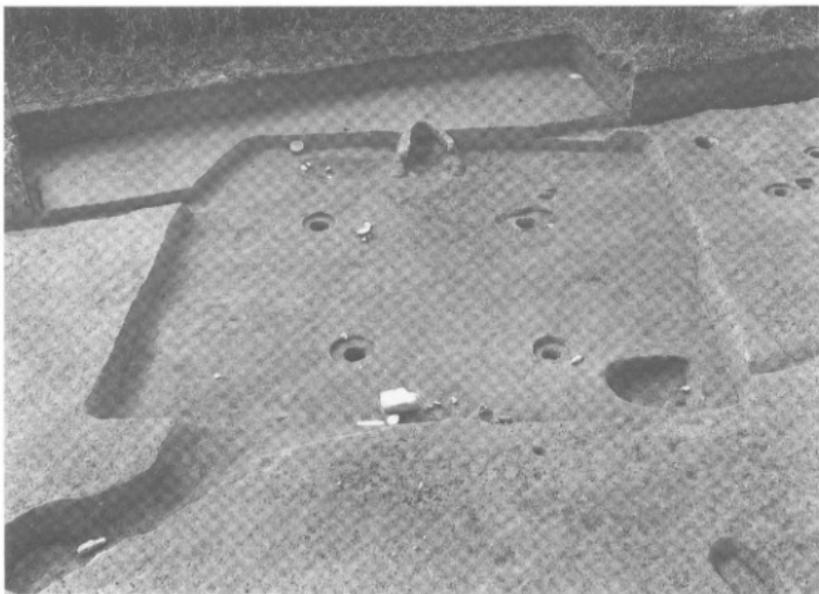
第4次調査

図版  
16

A地区遺構(2)



第2面全景（南から）

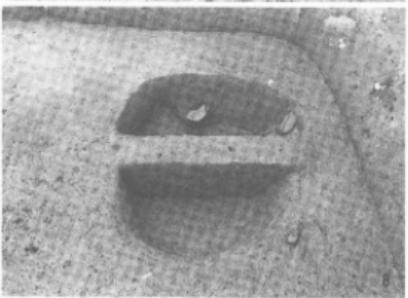
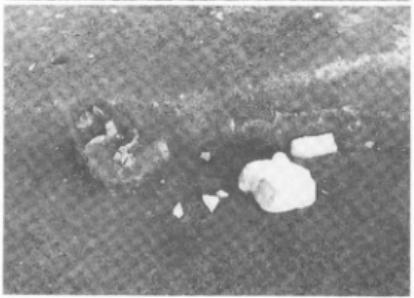
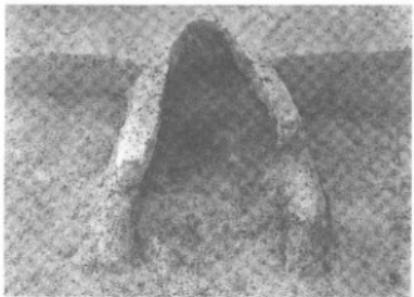


堅穴住居跡 1



1. カマド内上層の遺物  
3. カマド断面

2. カマド断面  
4. カマド内下層の断面



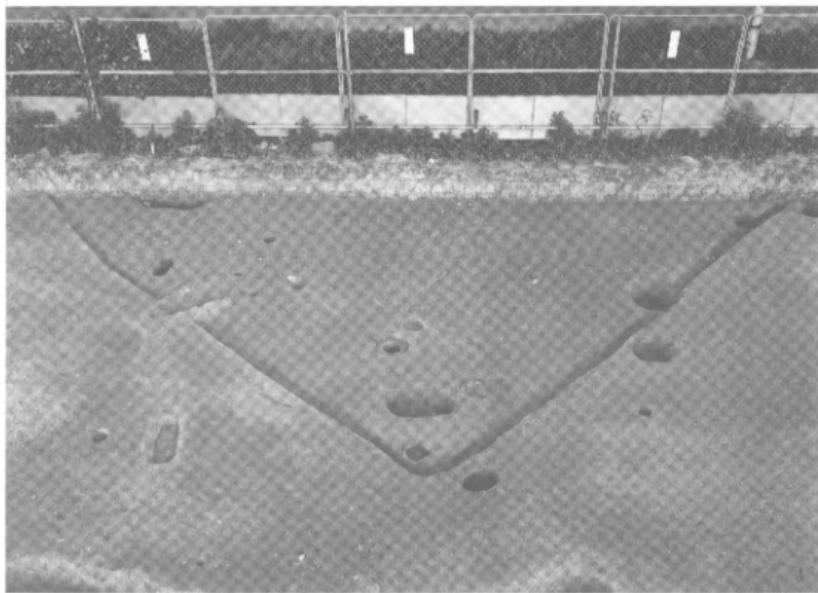
5. カマド完掘  
7. 床面の遺物

6. カマド断ち割り  
8. 住居跡内土壤 2

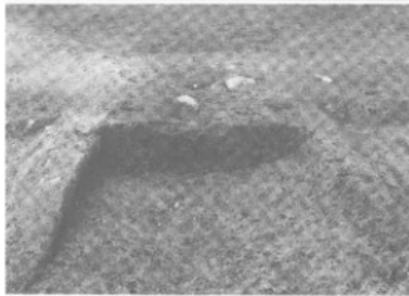
第4次調査

図版  
18

A地区遺構(4)



1. 積穴住居跡 2



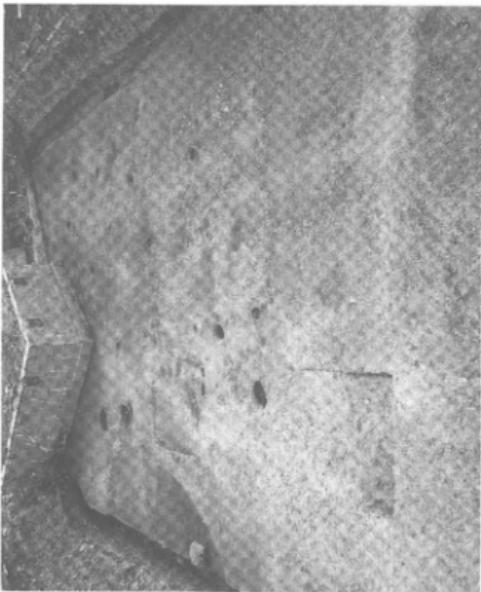
2. カマド完掘  
4. カマド断面



3. カマド断面  
5. 住居跡内土壤 1 断面



1・2. 十字引闇文土器出土状況



3. B地区区今家(北から)



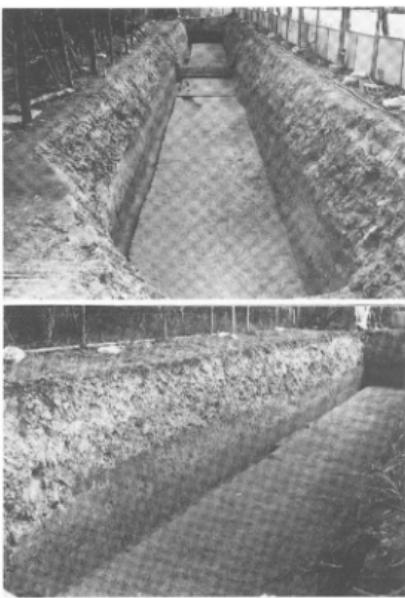
4. B地区区施下石

第4次調査

図版20  
C・D地区区遺構



1. C-1地区全景（北から）

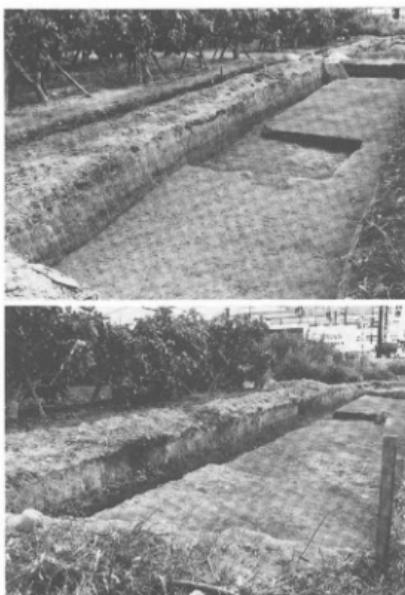


2. C-2地区全景（北から）

3. C-2地区断面



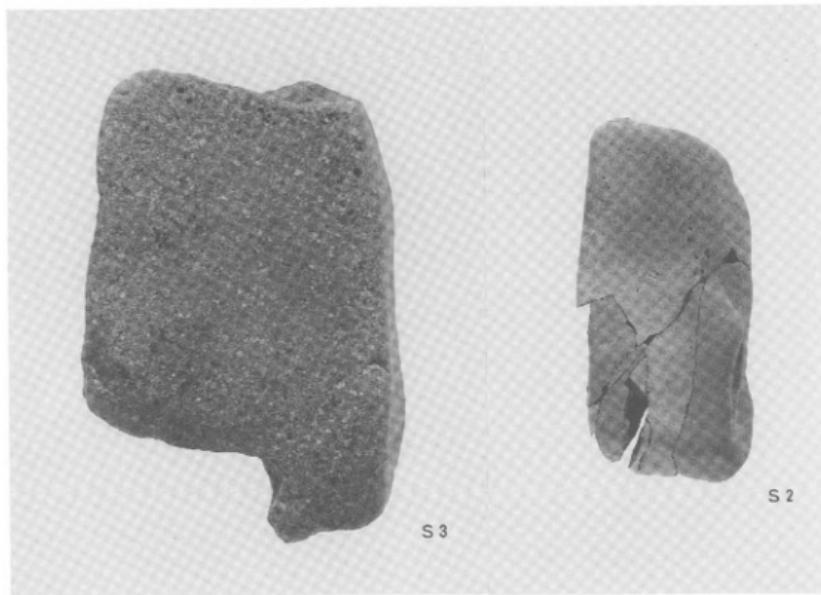
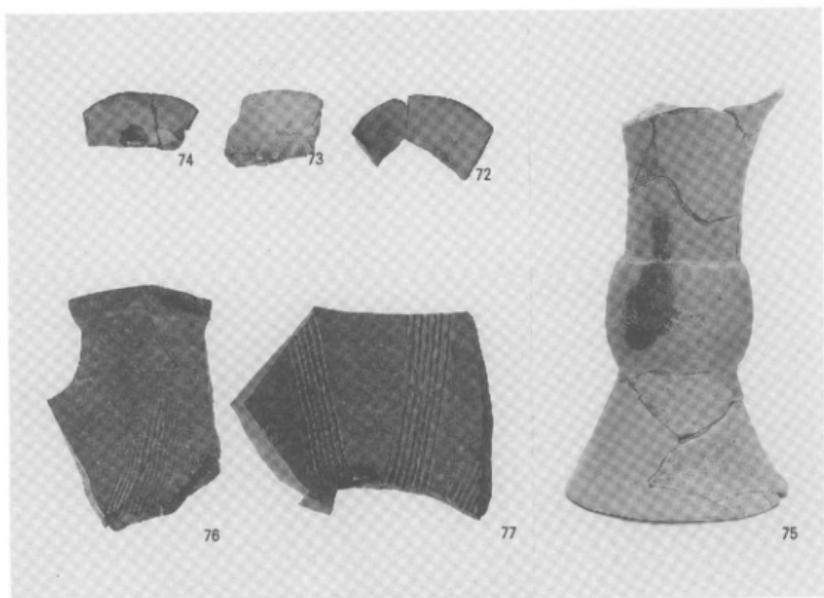
4. D地区全景（北から）



5. D-1地区断面

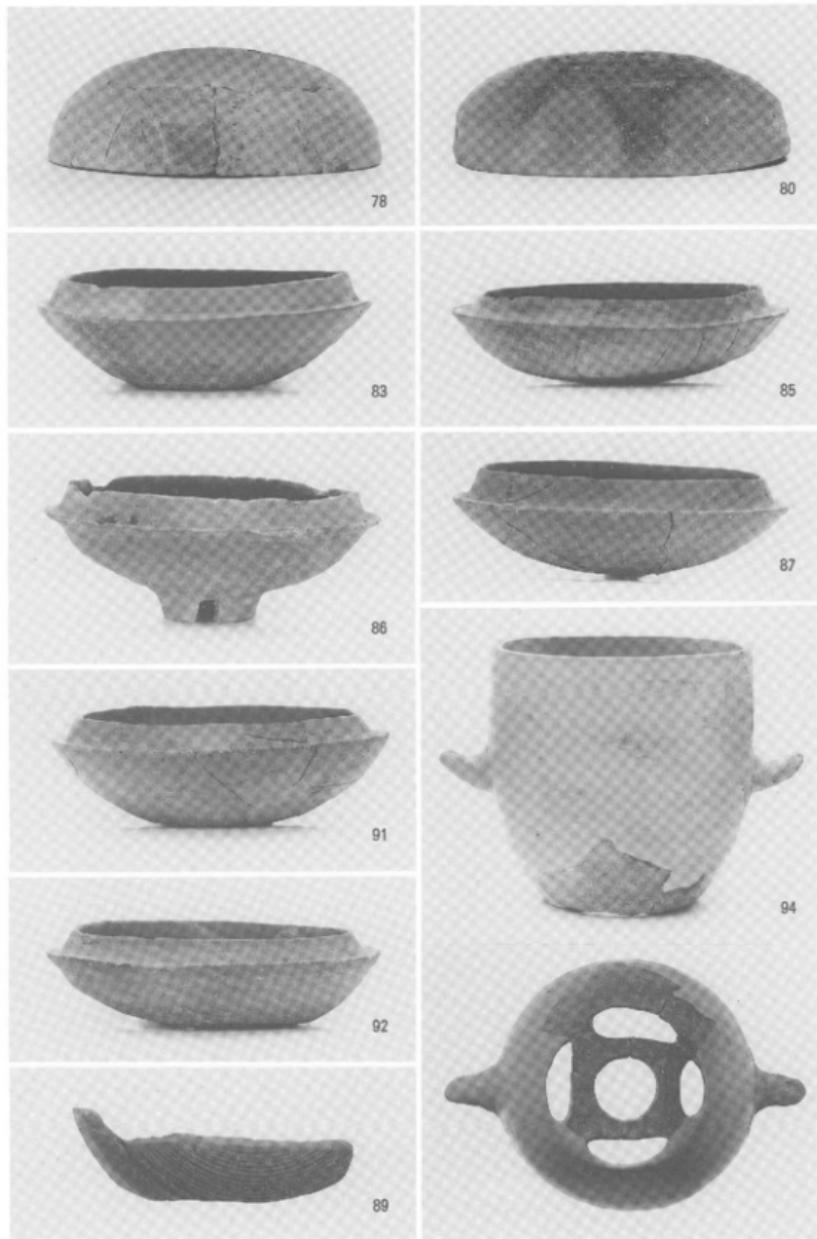
6. D-2地区断面

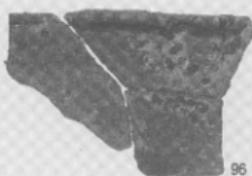
図版  
21  
遺物(1)



第4次調査

図版  
22  
遺物  
(2)





96



97



98



99



100



101



102



103



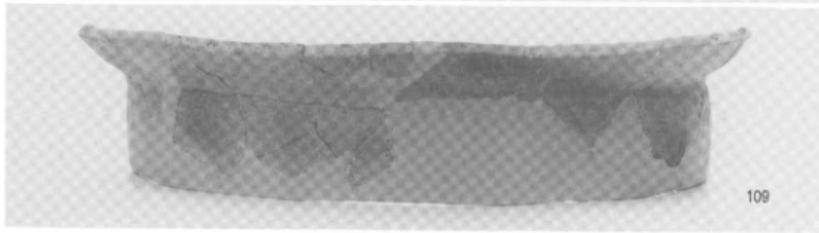
108



110



111



109

第5次調査

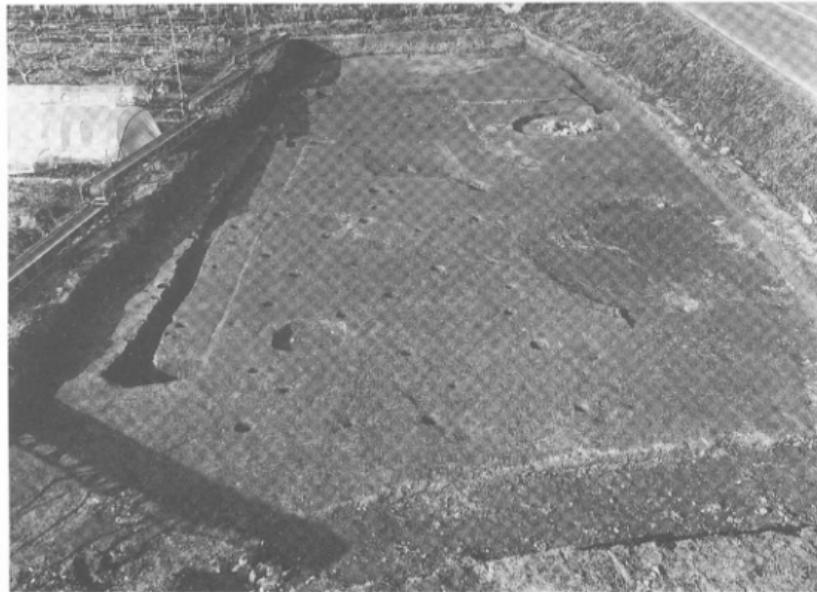
図版24 確認調査・全景写真



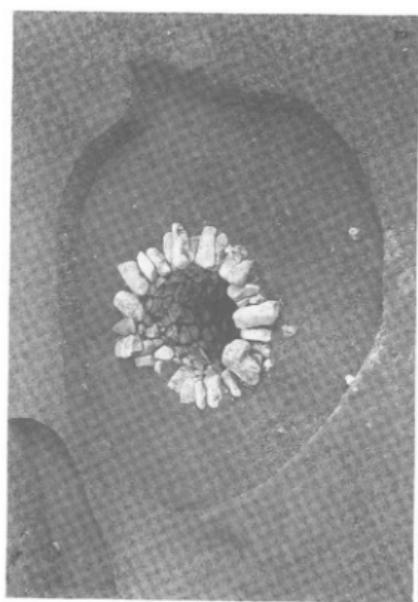
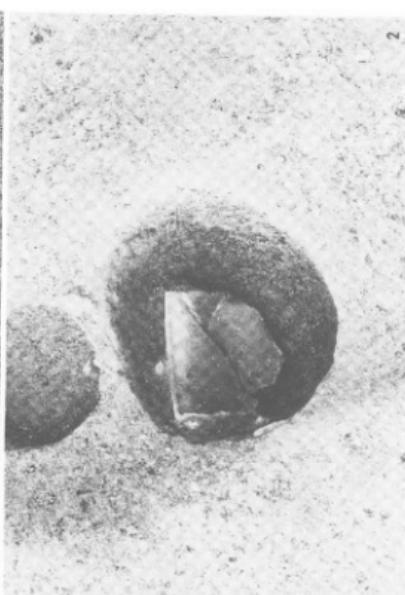
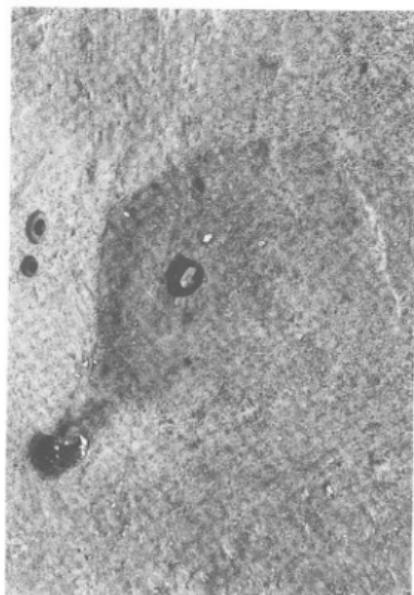
1. 第1トレンチ（南から）



2. 第2トレンチ（北から）



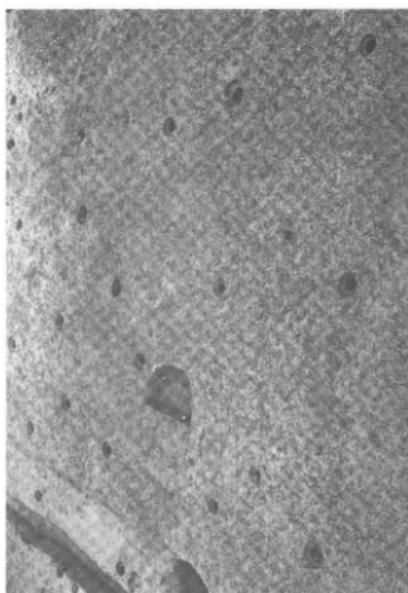
3. 全景（南から）



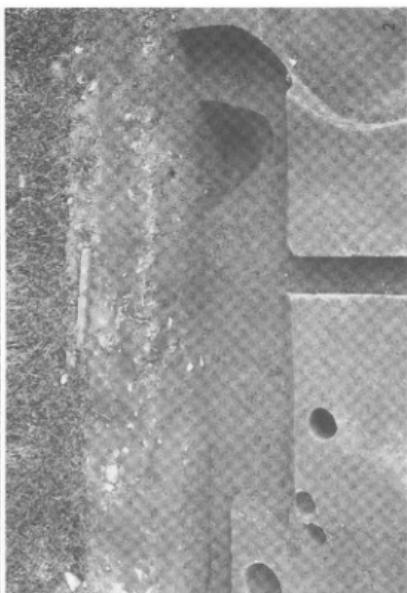
第5次調査

図版  
26

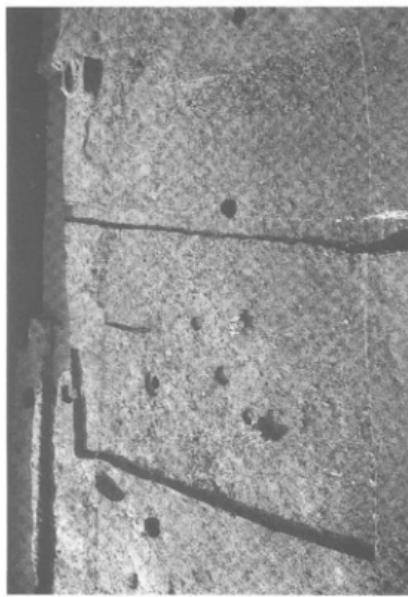
遺構  
(2)



1. 獣立柱跡跡 1 + 2



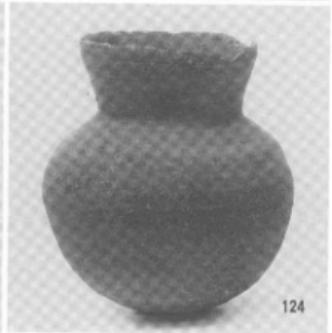
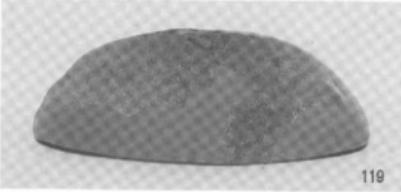
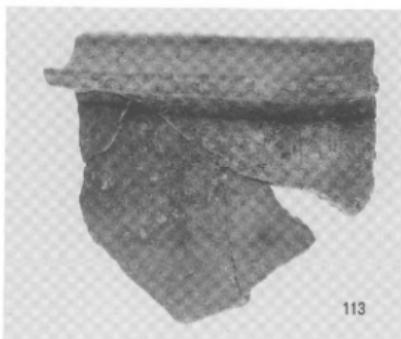
2. 獣穴住居跡 1

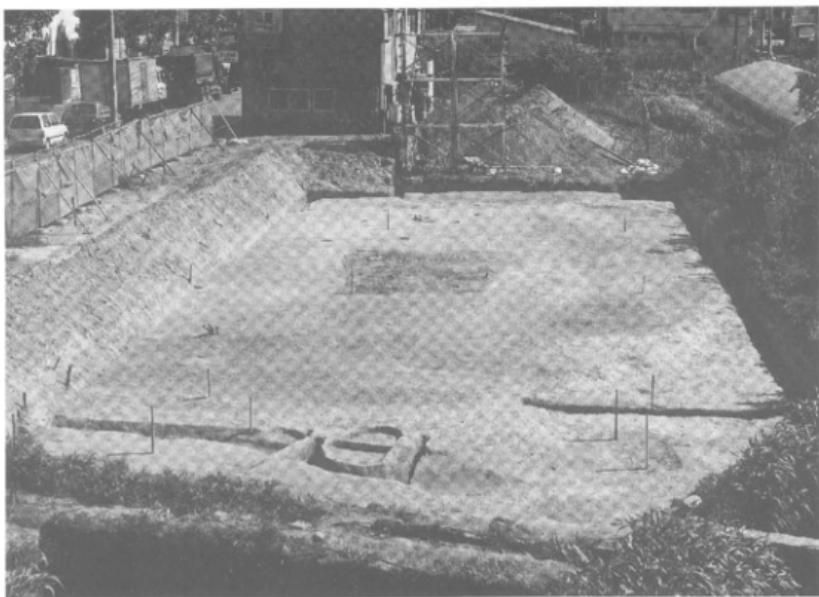


3. 獣穴住居跡 2 + 3

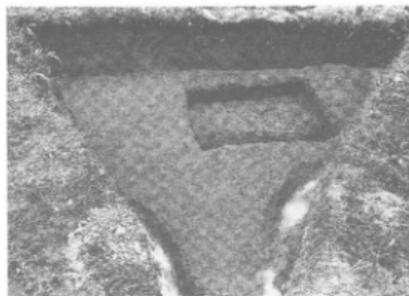


4. 獣穴住居跡 2 カ 7 ハ

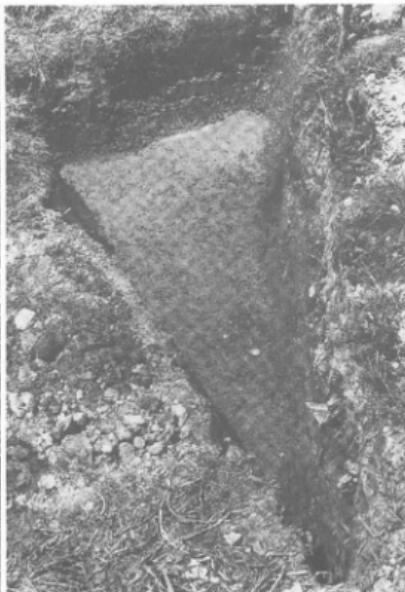




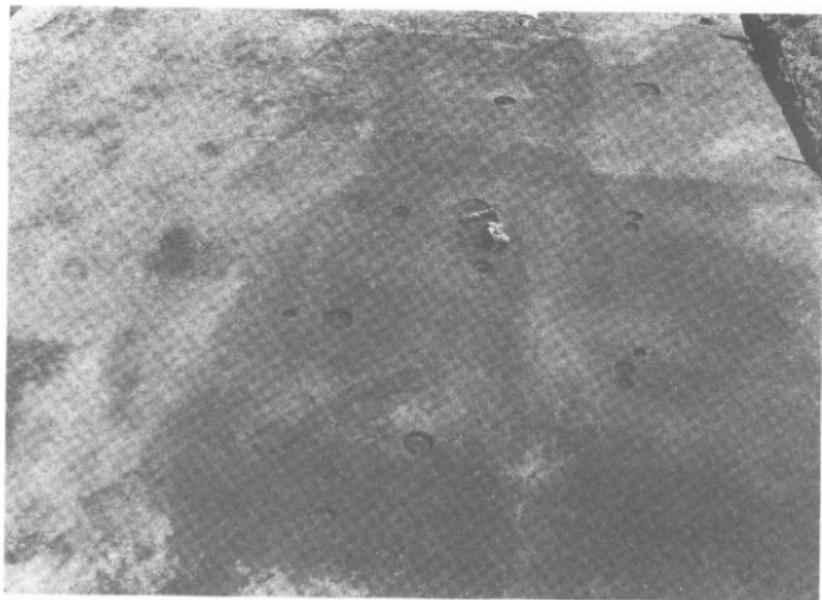
1. A地区全景



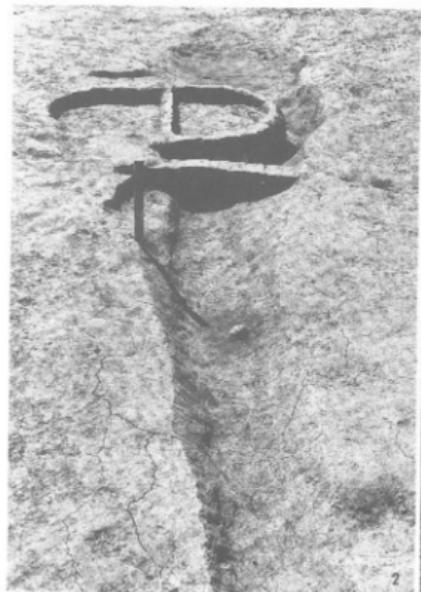
2. B地区全景  
3. C地区全景



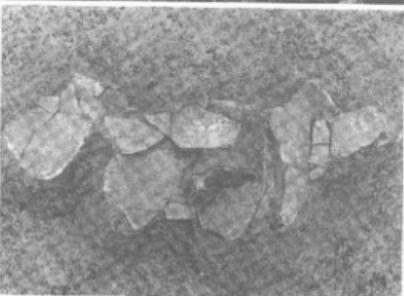
4. D地区全景



1. 柱穴群



2. 溝

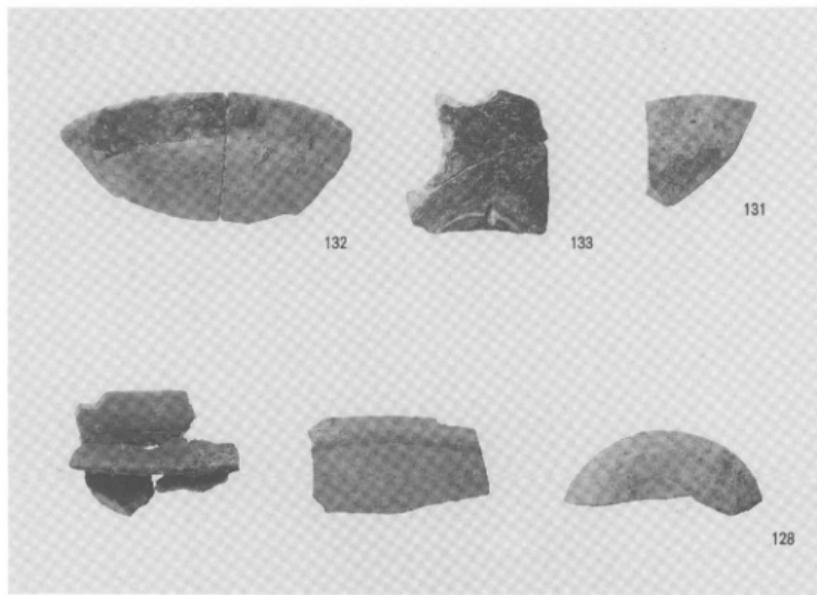
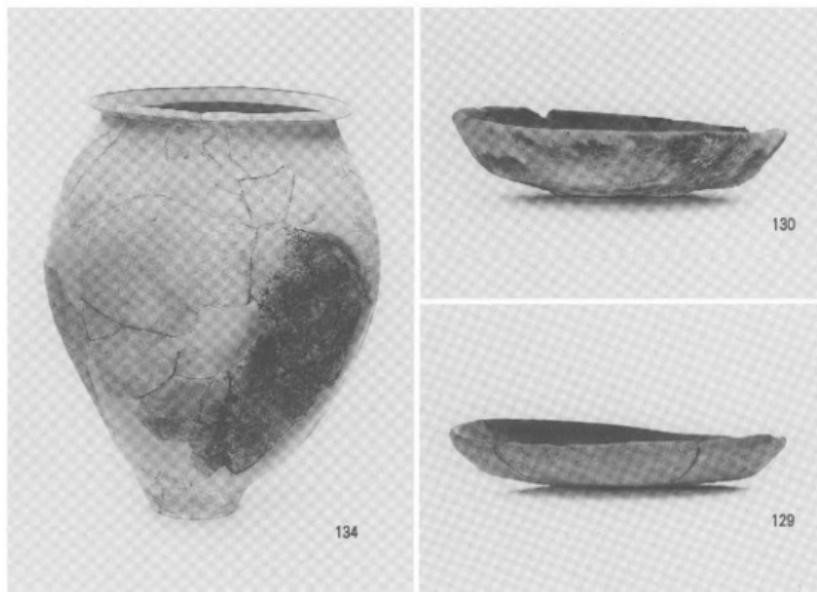


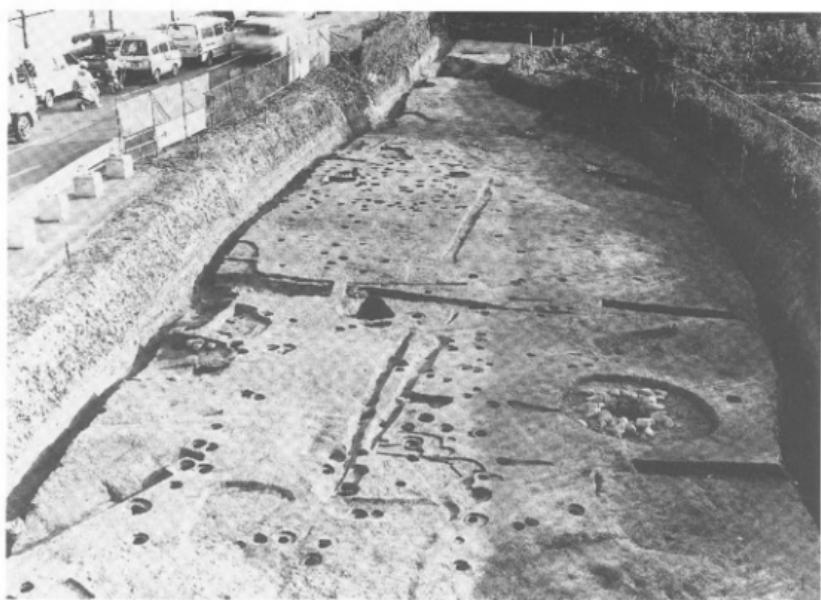
3・4. 遺物出土状況

第6次調査

図版  
30

遺物





1. 調査区全景（北から）



2. 調査区全景（南から）

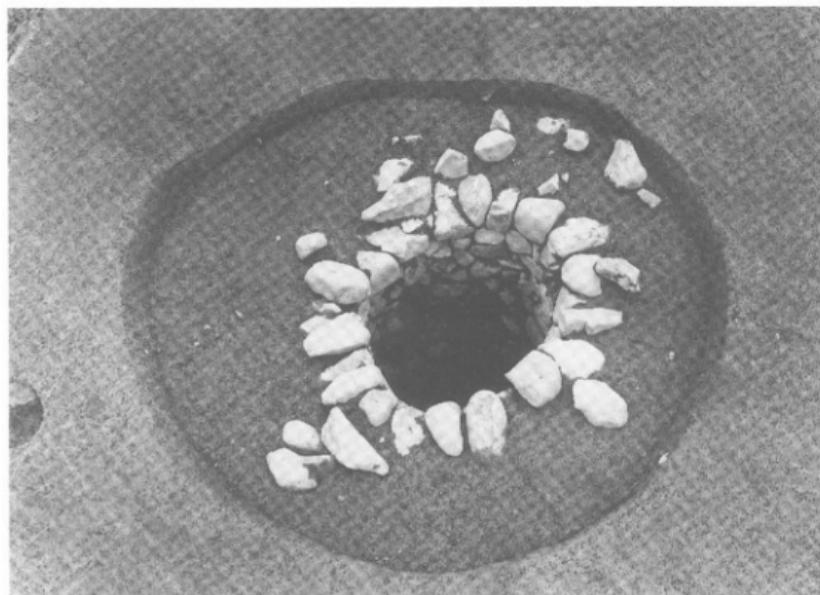


3. 微高地の遺構（北半部）  
4. 微高地の遺構（南半部）

第8次調査

図版  
32

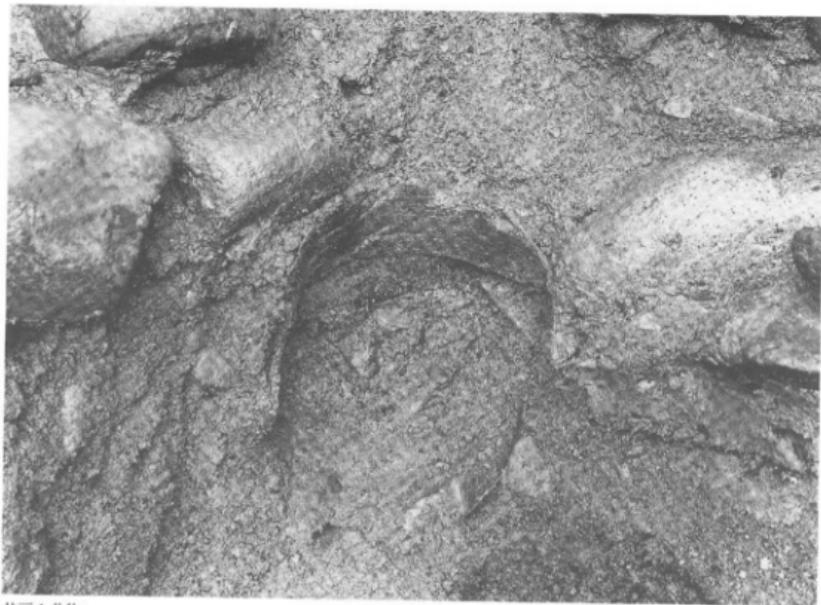
遺構(1)



井戸 1



井戸 1 断面



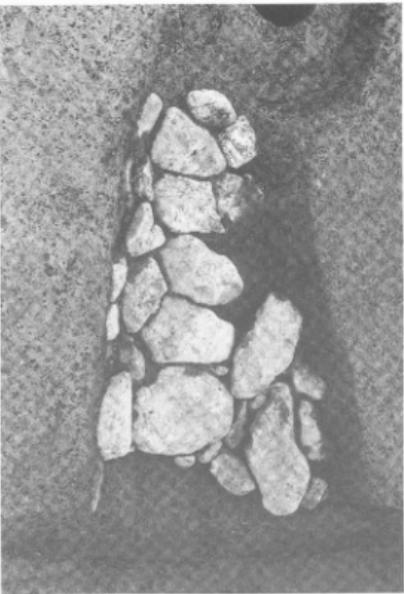
井戸 1 曲物



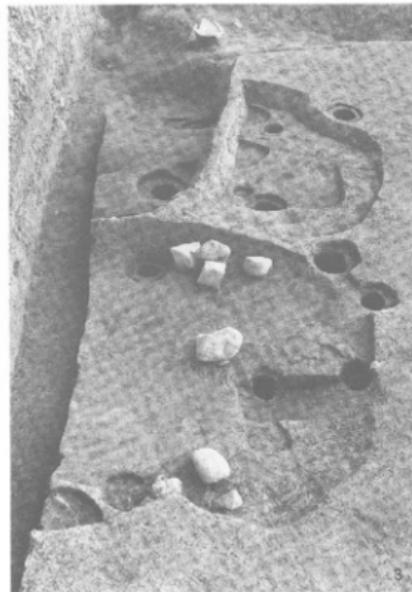
井戸 2 断面



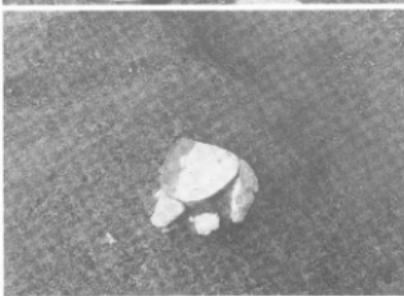
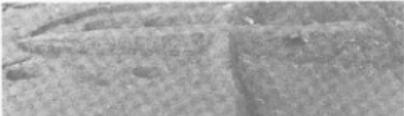
1. 土壌2検出状況



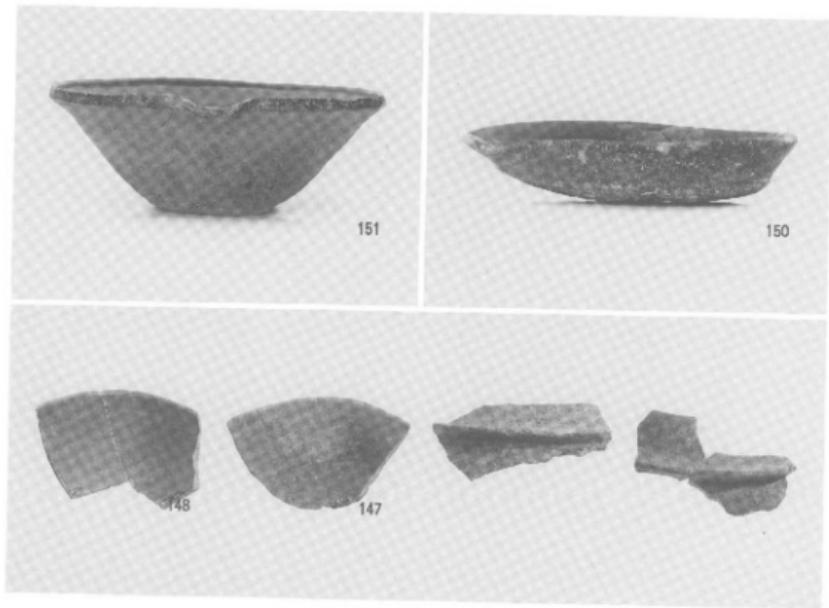
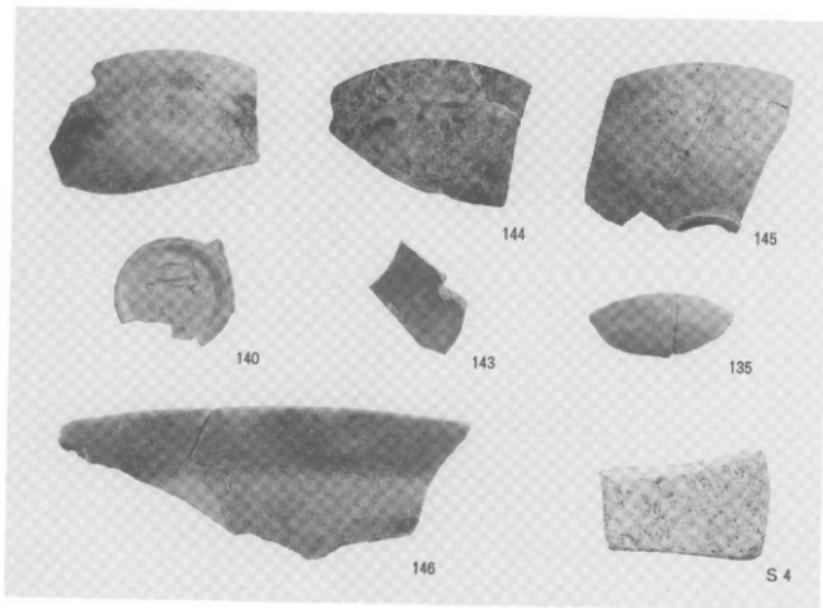
2. 土壌2全景



3. 土壌6・7全景



4. 土壌6断面  
5. 土壌7断面  
6. 溝4・6遺物出土状況



第8次調査

図版  
36

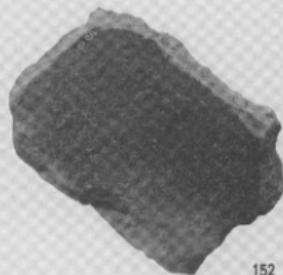
遺物  
(2)



155



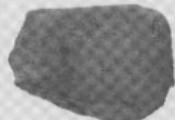
154



152



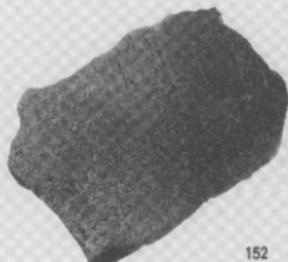
153



155



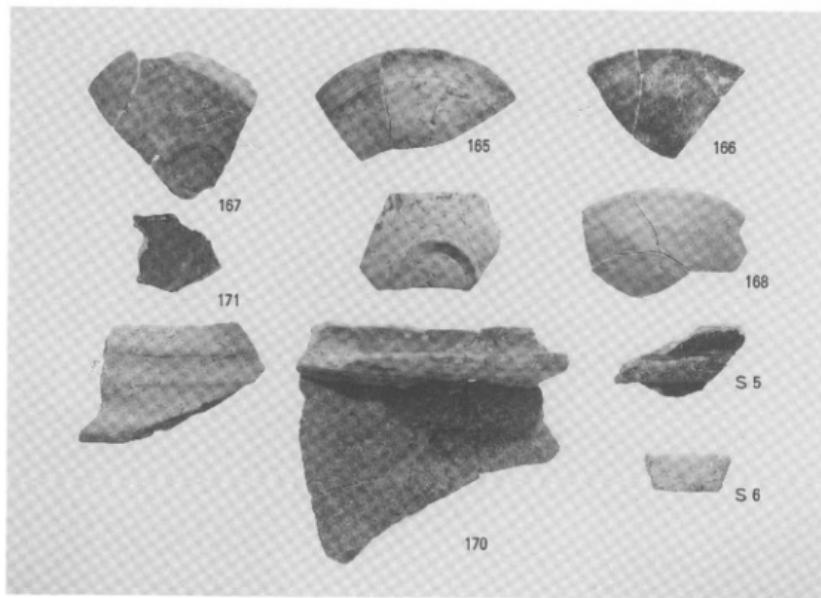
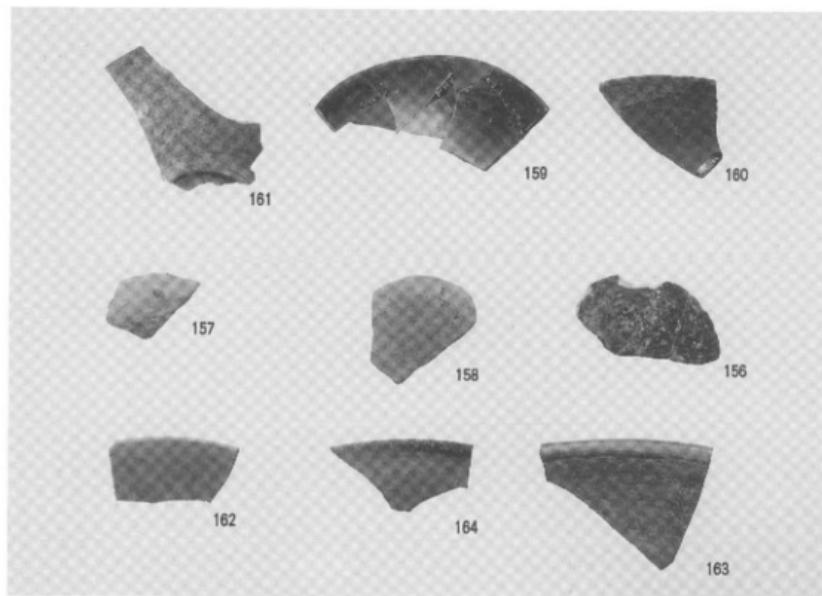
154



152

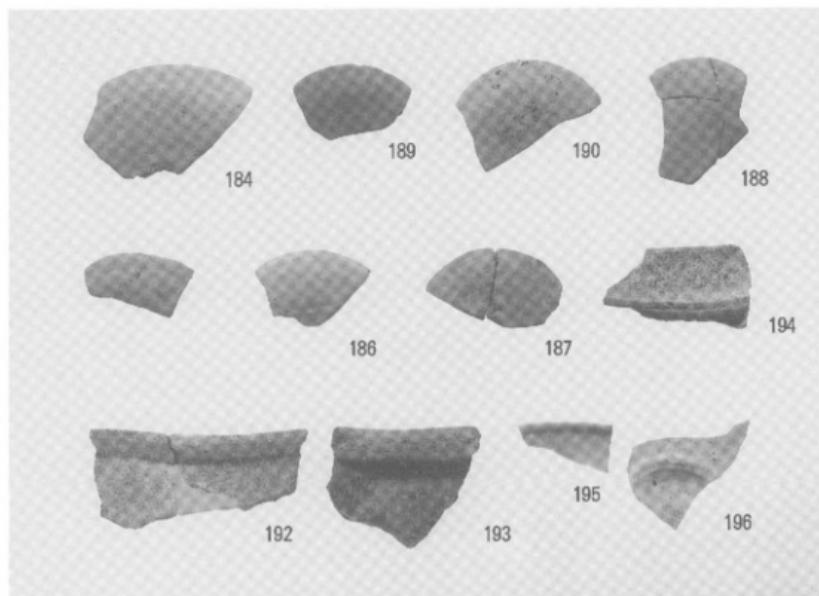
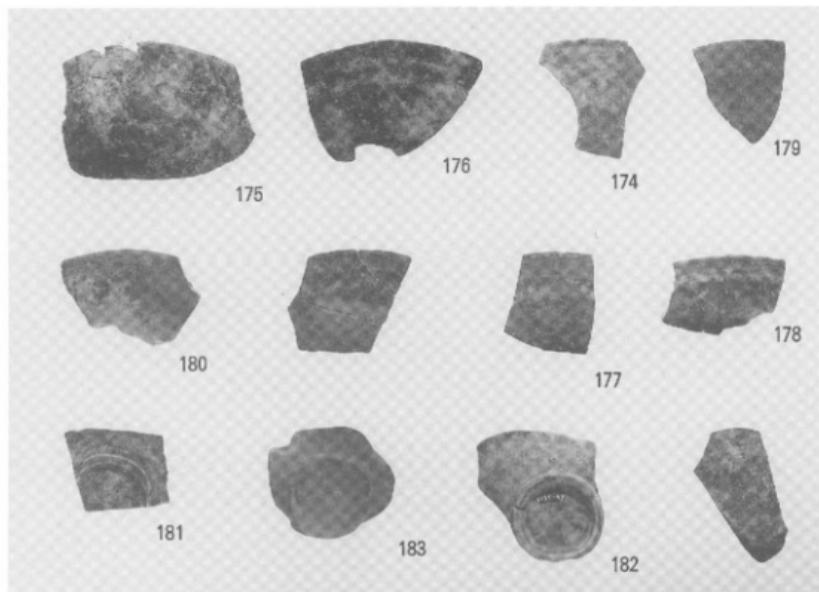


153



第8次調査

図版  
38  
遺物(4)





185



189



204



199



205



200



207



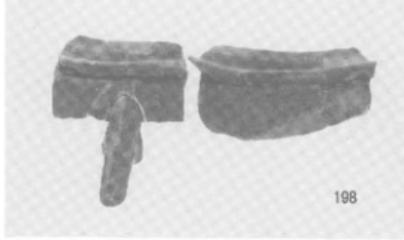
201



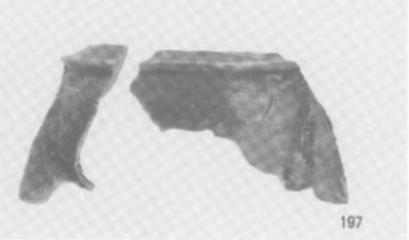
206



202



198

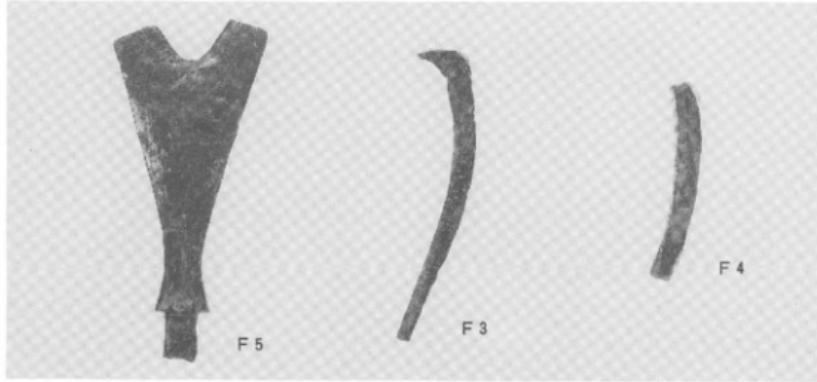
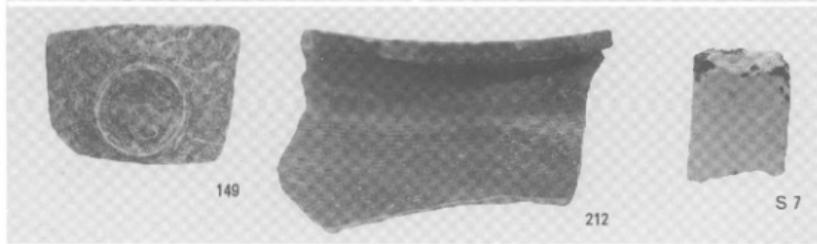
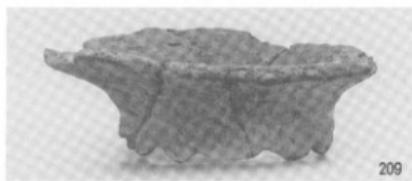
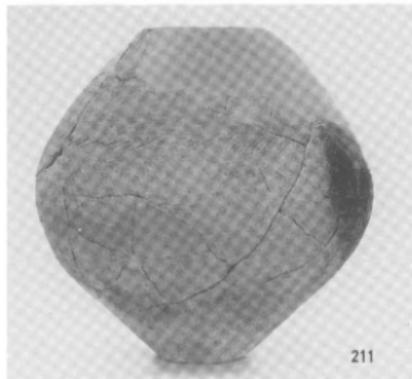


197

第8次調査

図版  
40

遺物  
(6)



兵庫県文化財調査報告 第131冊

## 下加茂遺跡

—都市計画道路川西・伊丹線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成6年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社 精文舎

〒652 神戸市兵庫区下沢通6丁目2-18